

国道386号線バイパス関係埋蔵文化財調査報告書

菩提寺古寺古墳群

福岡県甘木市菩提寺所在古寺古墳群の調査

福岡県文化財調査報告書

第 96 集

1992

福岡県教育委員会

国道386号線バイパス関係埋蔵文化財調査報告書

菩提寺古寺古墳群

福岡県甘木市菩提寺所在古寺古墳群の調査

福岡県文化財調査報告書

第 96 集

1992

福岡県教育委員会

序

福岡県教育委員会では、道路建設に関わる埋蔵文化財の保護について十分な配慮を頂くよう関係各方面に御協力をお願いしております。国道386号線バイパスについても、企画・立案の段階から県土木部道路建設課と十分な協議を重ね、ここに報告する菩提寺古寺古墳群についても同様であります。

国道386号線バイパス関係の発掘調査は工事の工程と調整を図りながら平成元年度から開始し、同2年度にすべての調査を終了しました。

この報告書が社会教育および文化財保護行政において広く活用され、さらに、学術分野での発展に寄与できれば望外の喜びとするところであります。

調査および報告書作成の過程で尊い汗を流して頂いた地元の方々をはじめ、関係各位の皆様方に対して深甚の謝意を表します。

平成4年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

例 言

- 1 本書は平成元年・2年度に福岡県教育委員会が福岡県土木部道路建設課から委託を受けて実施した、国道386号線バイパスの建設に伴って破壊される埋蔵文化財の事前の発掘調査の記録である。
- 2 本書に収録した遺跡は福岡県甘木市大字菩提寺字古寺ぼだいじ ふるでらに所在する古寺古墳群である。
- 3 遺構の実測は、主に調査担当者および調査補助員がこれにあたり、甘木歴史資料館副館長川述昭人氏、甘木市教育委員会隈部敏明・松尾宏両氏に多大な御助力を頂いた。製図は福岡県文化課太宰府事務所豊福弥生氏による。なお、関久江・原カヨ子・岡由美子・黒木美幸氏に多大な御助力を頂いた。
- 4 遺構写真は調査担当者が撮影し、出土品の写真撮影等は岡紀久夫氏にお願いした。
- 5 出土遺物の整理は岩瀬正信氏の指導のもとに文化課甘木事務所で行った。実測は調査担当者の他、文化課甘木事務所高瀬照美氏、製図は豊福弥生氏の協力による。また、関久江・原カヨ子・岡由美子・黒木美幸氏に多大な御助力を頂いた。
- 6 挿図で使用した方位はすべて真北である。
- 7 本文中の註は最後に一括した。
- 8 本書の執筆・編集は児玉真一が担当した。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経過と組織	1
	(1) 調査の経過	1
	(2) 調査の組織	4
第2章	位置と環境	6
第3章	菩提寺古寺古墳群の調査	11
第1節	古墳群の概要	11
第2節	古寺A支群の調査	11
	1. 古寺1号墳	12
	2. 古寺2号墳	25
	3. 古寺3号墳	32
	4. 蔵骨器	37
	5. 小結	37
第3節	古寺B支群の調査	38
	1. 古寺4号墳	38
	2. 古寺5号墳	44
	3. 古寺6号墳	53
	4. 古寺7号墳	58
	5. 古寺8号墳	67
	5. 土壌墓	85
	6. 小結	86
第4節	おわりに	87
	(1) 前期古墳について	87
	(2) 群集墳について	88

図 版 目 次

		本文対照頁
図版 1	(上) 菩提寺古寺古墳群 A 支群全景 (北東上空から)	11
	(下) 菩提寺古寺古墳群 A 支群全景 (南西上空から)	11
図版 2	(上) 菩提寺古寺古墳群 A 支群遠景 (西から)	11
	(下) 菩提寺古寺古墳群 1～3 号墳 (北上空から)	11
図版 3	(上) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳全景	12
	(下) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳石室全景	14
図版 4	(上) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳玄室一次床面	14
	(下) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳玄室二次床面	14
図版 5	(上) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳石室全景	14
	(下) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳玄門と羨路	14
図版 6	(上) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳前室状遺構と閉塞状況	14
	(下) 同上閉塞除去後の状況	14
図版 7	(上) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳玄室二次床面遺物出土状態	14
	(下) 同上	14
図版 8	(上) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳供献土器出土状態	14
	(下) 同上	14
図版 9	(上) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳供献土器出土状態	14
	(下) 同上	14
図版 10	(上) 菩提寺古寺古墳群 2 号墳全景	25
	(下) 菩提寺古寺古墳群 2 号墳埋葬施設全景	27
図版 11	(上) 菩提寺古寺古墳群 2 号墳埋葬施設土層断面	27
	(下) 菩提寺古寺古墳群 2 号墳遺物出土状態	30
図版 12	(上) 菩提寺古寺古墳群 3 号墳全景	32
	(下) 菩提寺古寺古墳群 3 号墳墳丘内の石積	32
図版 13	(上) 菩提寺古寺古墳群 3 号石室墳の全景	34
	(下) 菩提寺古寺古墳群 3 号墳遺物出土状態	34
図版 14	(上) 菩提寺古寺古墳群蔵骨器出土状態	37
	(下) 同上	37
図版 15	菩提寺古寺古墳群 B 支群全景 (北西上空から)	38
16	(上) 菩提寺古寺古墳群 B 支群西部 (北上空から)	38
	(下) 菩提寺古寺古墳群 B 支群東部 (西上空から)	38

図版17	(上) 菩提寺古寺古墳群 4 号墳墳丘……………	38
	(下) 菩提寺古寺古墳群 4 号墳南側溝土器出土状態……………	44
図版18	(上) 菩提寺古寺古墳群 4 号墳第 1 主体部……………	42
	(下) 菩提寺古寺古墳群 4 号墳第 2 主体部……………	42
図版19	(上) 菩提寺古寺古墳群 5 号墳全景……………	47
	(下) 菩提寺古寺古墳群 5 号石室墳全景……………	47
図版20	(上) 菩提寺古寺古墳群 5 号墳玄室二次床面遺物出土状態……………	47
	(下) 同上……………	47
図版21	(上) 菩提寺古寺古墳群 5 号墳供献土器出土状態……………	47
	(下) 同上……………	47
図版22	(上) 菩提寺古寺古墳群 6・7 号墳遠景……………	53
	(下) 菩提寺古寺古墳群 6 号石室墳全景……………	53
図版23	(上) 菩提寺古寺古墳群 6 号墳玄室……………	53
	(下) 菩提寺古寺古墳群 6 号墳羨道……………	53
図版24	(上) 菩提寺古寺古墳群 7 号墳墳丘……………	58
	(下) 菩提寺古寺古墳群 7 号墳全景……………	62
図版25	(上) 菩提寺古寺古墳群 8 号墳墳丘……………	67
	(下) 菩提寺古寺古墳群 8 号墳全景……………	67
図版26	(上) 菩提寺古寺古墳群 8 号墳玄室……………	68
	(下) 同上……………	68
図版27	(上) 菩提寺古寺古墳群 8 号墳 A 群供献土器出土状態……………	68
	(下) 同上……………	68
図版28	(上) 菩提寺古寺古墳群 8 号墳 A 群供献土器出土状態……………	68
	(下) 同上……………	68
図版29	(上) 菩提寺古寺古墳群 8 号墳 B 群供献土器出土状態……………	68
	(下) 同上……………	68
図版30	(上) 菩提寺古寺古墳群 8 号墳 B 群供献土器出土状態……………	68
	(下) 同上……………	68
図版31	(上) 土壌墓……………	85
	(下) 金剛寺地区の試掘……………	1
図版32	(上) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳出土耳環……………	16
	(下) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳出土鉄製品……………	18
図版33	(上) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳出土玉類……………	17
	(下) 菩提寺古寺古墳群 1 号墳出土玉類……………	17
図版34	菩提寺古寺古墳群 1 号墳出土土器……………	19

図版35	菩提寺古寺古墳群 1 号墳出土土器	19
図版36	(上) 菩提寺古寺古墳群 2 号墳出土玉類	31
	(下) 菩提寺古寺古墳群 2 号墳出土玉類	31
図版37	(上) 菩提寺古寺古墳群 3 号墳出土鉄製品	34
	(下左) 蔵骨器	37
	(下右) 菩提寺古寺古墳群 4 号墳南裾溝出土土器	44
図版38	(上) 菩提寺古寺古墳群 5 号墳出土耳環	48
	(下) 菩提寺古寺古墳群 5 号墳出土玉類	48
図版39	菩提寺古寺古墳群 5 号墳出土鉄製品	49
図版40	菩提寺古寺古墳群 5 号墳出土土器	50
図版41	(上) 菩提寺古寺古墳群 6 号墳出土鉄製品	57
	(下) 菩提寺古寺古墳群 6 号墳出土土器	58
図版42	(上) 菩提寺古寺古墳群 7 号墳出土鉄製品	62
	(下) 菩提寺古寺古墳群 7 号墳出土鉄製品	62
図版43	(上) 菩提寺古寺古墳群 7 号墳出土鉄製品	63
	(下) 菩提寺古寺古墳群 7 号墳出土耳環・土器	62・65
図版44	(上) 菩提寺古寺古墳群 8 号墳出土耳環・玉類・滑石製紡錘車	70
	(下) 菩提寺古寺古墳群 8 号墳出土鉄製品・A 群供献土器	70・71
図版45	菩提寺古寺古墳群 8 号墳出土 A 群供献土器	71
図版46	菩提寺古寺古墳群 8 号墳出土 A 群供献土器	71
図版47	菩提寺古寺古墳群 8 号墳出土 A 群供献土器	71
図版48	菩提寺古寺古墳群 8 号墳出土 A・B 群供献土器	71
図版49	菩提寺古寺古墳群 8 号墳出土 B 群供献土器	71

挿 図 目 次

第 1 図	菩提寺古寺古墳群と周辺遺跡分布図 (1/50,000)	折り込み
第 2 図	持丸古墳群と菩提寺古寺古墳群関係図 (1/5,000)	7
第 3 図	鬼の枕古墳墳丘測量図 (上)・墳丘復原図 (下、註 6 文献より、1/800)	8
第 4 図	池の上墳墓群・古寺墳墓群全体図 (註 9 文献より)	9
第 5 図	小田茶臼塚古墳 (註 12 文献より、1/800)	10
第 6 図	国道 386 号線バイパス路線図と古寺古墳群配置図 (1/1,500)	折り込み
第 7 図	古寺古墳群 A 支群全体図 (1/400)	12
第 8 図	古寺 1 号墳墳丘土層図 (調査前、1/200)	12

第9図	古寺1号墳墳丘測量図（調査後、1/200）	13
第10図	古寺1号墳石室実測図（1/60）	折り込み
第11図	古寺1号墳玄室遺物出土状態実測図（1/30）	15
第12図	古寺1号墳供献土器出土状態実測図（1/20）	16
第13図	古寺1号墳出土耳環実測図（1/2）	16
第14図	古寺1号墳出土玉類実測図（原寸）	17
第15図	古寺1号墳出土鉄製品実測図（1/2）	18
第16図	古寺1号墳出土土器実測図①（1/3）	20
第17図	古寺1号墳出土土器実測図②（1/3）	21
第18図	古寺1号墳出土土器実測図③（1/3、20は1/4）	22
第19図	古寺1号墳出土土器実測図④（1/6）	23
第20図	古寺1号墳出土土器実測図⑤（1/6）	24
第21図	古寺2号墳墳丘測量図（調査前、1/200）	26
第22図	古寺2号墳墳丘測量図（調査後、1/200）	27
第23図	古寺2号墳墳丘土層図（1/120）	28
第24図	古寺2号墳内部主体実測図（1/30）	29
第25図	古寺2号墳内部主体土層図（1/30）	30
第26図	古寺2号墳遺物出土状態実測図（1/10）	30
第27図	古寺2号墳出土玉類実測図（原寸）	31
第28図	古寺3号墳墳丘測量図（上—調査前、下—調査後、1/200）	33
第29図	古寺3号墳墳丘土層図（1/100）	34
第30図	古寺3号墳石室実測図（1/60）	35
第31図	古寺3号墳出土鉄製品実測図（1/2）	36
第32図	蔵骨器出土状態実測図（1/10）	36
第33図	蔵骨器実測図（1/3）	37
第34図	古寺古墳群B支群全体図（1/600）	39
第35図	古寺4号墳墳丘測量図（調査前、1/200）	40
第36図	古寺4号墳墳丘測量図（調査後、1/200）	41
第37図	古寺4号墳墳丘土層図（1/120）	42
第38図	古寺4号墳埋葬施設実測図（1/30）	43
第39図	古寺4号墳出土土器実測図（1/3）	44
第40図	古寺5号墳墳丘測量図（上—調査前、下—調査後、1/200）	45
第41図	古寺5号墳墳丘土層図（1/100）	46
第42図	古寺5号墳石室実測図（1/60）	46
第43図	古寺5号墳供献土器A群出土状態実測図（1/20）	47

第44図	古寺5号墳供献土器B群出土状態実測図(1/20)	48
第45図	古寺5号墳出土耳環実測図(1/2)	48
第46図	古寺5号墳出土玉類実測図(原寸)	48
第47図	古寺5号墳出土鉄製品実測図(1/2)	49
第48図	古寺5号墳出土土器実測図①(1/3)	51
第49図	古寺5号墳出土土器実測図②(1/3、26 \times 11/6)	52
第50図	古寺6号墳墳丘測量図(上-調査前、下-調査後、1/200)	54
第51図	古寺6号墳墳丘土層図(1/100)	55
第52図	古寺6号墳石室実測図(1/60)	56
第53図	古寺6号墳出土鉄製品実測図(1/2)	57
第54図	古寺6号墳出土土器実測図①(1/3)	57
第55図	古寺7号墳墳丘土層図(調査前、1/200)	59
第56図	古寺7号墳墳丘測量図(調査後、1/200)	60
第57図	古寺7号墳墳丘土層図(1/100)	61
第58図	古寺7号墳石室実測図(1/60)	62
第59図	古寺7号墳出土耳環実測図(1/2)	62
第60図	古寺7号墳出土鉄製品実測図(1/4、1/2)	63
第61図	古寺7号墳出土土器実測図(1/3)	64
第62図	古寺8号墳墳丘測量図(上-調査前、下-調査後、1/200)	66
第63図	古寺8号墳墳丘土層図(1/100)	67
第64図	古寺8号墳石室実測図(1/60)	68
第65図	古寺8号墳供献土器A・B群出土状態実測図(1/20)	69
第66図	古寺8号墳出土装身具実測図(1は1/2、他は原寸)	70
第67図	古寺8号墳出土紡錘車実測図(1/2)	70
第68図	古寺8号墳出土馬具実測図(1/2)	71
第69図	古寺8号墳出土A群供献土器実測図①(1/3)	72
第70図	古寺8号墳出土A群供献土器実測図②(1/3)	73
第71図	古寺8号墳出土A群供献土器実測図③(1/3)	75
第72図	古寺8号墳出土A群供献土器実測図④(1/3)	77
第73図	古寺8号墳出土A群供献土器実測図⑤(1/4)	79
第74図	古寺8号墳出土A群供献土器実測図⑥(1/3)	80
第75図	古寺8号墳出土A群供献土器実測図⑦(1/3)	81
第76図	古寺8号墳出土A群供献土器実測図⑧(1/6)	82
第77図	古寺8号墳出土B群供献土器実測図(1/3)	84
第78図	土壌墓実測図(1/30)	87

第 1 章 はじめに

(1) 調査の経過

国道386号線バイパス関係の埋蔵文化財の調査は平成元年度から開始した。分布調査の時点ではA支群に円墳2基、B支群に円墳2基の計4基の存在が知られていたにすぎなかった。しかし、繁茂する樹木や篠竹を伐採をした結果、後述するようにA支群3基、B支群5基の計8基の古墳を確認することができた。調査はA支群を平成元年度に、B支群を同2年度に実施した。

また、平成2年度に全線において試掘調査を実施したが、金剛寺地区では工事のためのボーリング調査中であったため、ボーリング調査の機械を設置している部分はずして試掘調査を実施した。しかし、工事中にその機械が設置された部分から箱式石棺が発見され、調査は甘木市教育委員会にお願いした。

以下、調査年次を追って調査の経過を簡単に振り返ってみよう。

【A支群の調査】 平成元年7月25日～同9月11日

先述のようにA支群においては円墳2基の予定であったが、樹木や篠竹の伐採をした結果、3基の古墳の存在を確認した。1・2号墳は分布調査の時点でその存在を把握していたが、2号墳の南東側に古墳の盗掘壕と思われるものが存在し、調査の結果、横穴式石室を内部主体とする古墳と判明し3号墳とした。このうち2号墳は当初予測したような円墳ではなく、南側に小規模な前方部を持つ不整形な前方後円墳である可能性が高いことが判明した。

平成元年度は北筑後教育事務所が担当する発掘調査が目白押しであり、早く調査を終えるため、大勢の作業員を導入して人海戦術により、3基の古墳を同時並行的に調査した。内部主体と墳丘の調査終了後、重機を導入して表土を除去した。その結果、2号墳の南東部分で奈良時代の蔵骨器1基を検出した。また、平石の小口部に赤色顔料を塗布した石材をいくつか検出し、それは竪穴式石室の存在を示唆するものであった。

《1号墳》 墳丘測量後、盗掘壕の清掃から調査を開始した。折りからの炎天下と石室の開口方向が不明なため、調査は一定の制約を伴った。とりあえず、石室床面の検出を目指し、床面の検出後に調査範囲を拡張して石室のプランと開口方向を確認し、石室の調査を実施した。石室の遺存状態は良くなかったが、2枚の床面を検出し、石室内に須恵器を副葬していることを確認した。また、墳丘の土層図を作成後に盛土を除去したが、第一次墳丘に関するものなのか石室の周囲に平石の周石を検出した。この外部、すなわち、羨道の北側に供献土器群を検出した。また、2号墳側の周溝埋土から轡を検出した。

調査の結果、羨道部を仕切った単室の横穴式石室で追葬を確認することができた。

《2号墳》 墳丘測量後、墳丘中心部を中点としてグリッドを設定し、北東グリッドにおいて主体部の一部を平面的に検出した。その時点で土層図を作成し、グリッドを拡張して調査を実施したが、第2主体の存在を確認できなかった。主体部は二段掘りの掘り方内に納められた組合わせ式の木棺だと想定され、棺外副葬された状態で玉類を検出した。

墳丘測量図によれば、南側に小規模な前方部を持つ不整形な前方後円形を呈していた。それは盛土が流出したためによる可能性も予想されたが、盛土を除去した結果、地山を不整形な前方後円形にカットし、わずかに盛土していることが判明した。

また、墳裾部を検出中に南東部分で奈良時代の蔵骨器を1基検出した。

《3号墳》 2号墳の南東側は平坦で盗掘壕かと思われるものが存在したので、確認調査のため発掘を実施した。調査の結果、単室の横穴式石室を検出した。また、平坦な部分は後世に厚く土盛りされており、人力でこの土砂を排除することが困難であったため、南東側斜面を整掃する形で墳丘断面の調査を実施した。

【B支群の調査】 平成2年5月21日～同8月31日

調査に先だって業者に樹木や篠竹の伐採を委託したが、伐採の仕方が不十分であった。よって作業員を導入した初日は安全対策と墳丘の整掃を兼ねて樹木や篠竹を根から切り取る作業を行った。その作業は4号墳側から開始したが、5月21日午後3時過ぎ頃、5・6号墳北側で煙がほのかに上がった。当日は強風が吹き荒れており、煙も目だたなかったため砂塵と見間違ふほどであった。しかし、作業に熱中して煙か砂塵？から目を離している間に、火の手が上がってこれは大変だということになった。まず、作業員を導入して消火作業に当たったが、折りからの強風にあおられて火勢は一向に衰えないばかりか、ますます強まるだけであった。ために、羽野組の現場事務所へ急行し、甘木土木事務所・羽野組の関係者に緊急連絡をした。その後現場に戻ってしばらく消火作業に従事したが、連絡した関係者は姿を見せず、火の勢いは増すばかりであった。この時点で5号墳の東半部と6号墳は黒焦げになり、7号墳に火が及びつつあった。すでに、消火作業は我々素人の及ぶところではなく、山火事の危険性が強くなったため、再度、関係方面への緊急連絡を行い、消防署へ連絡を依頼した。しかし、大したことはないと思っていたのか甘木土木事務所・羽野組の担当者は消防署への連絡をせずに現場に来て、やっと事の重大性を悟り、消防署への連絡を行った次第である。この時はすでに路線内全域に火が及んでおり作業員への二次災害の危険性を考慮して風上の4号墳側へ避難した。やがて、サイレンの音けたたましく十余台の消防車が到着し、消防団

員の必死の消火作業により、鎮火した。古墳は火傷を負い、見る影もなく真っ黒になった。

火災の原因はタバコの火の不始末ではないかと思われていたが、4号墳の整掃作業に従事していたため午前11時以降は誰も出火地点に立ち入ってはいなかった。出火した3～4日前に伐採樹木の一部を路線内で焼却しており、焼却の際の消火が完全ではなく種火が残り、強風にあおられて出火したようである。しかし、路線内で火は納まり、怪我人がでなかったことが不幸中の幸いであった。

調査に入った初日から大変な事態が出来たため、以後の調査にあたっては安全対策面に十分な配慮を払った。

調査区内の清掃を終えた段階で5基の古墳を確認し、A支群から連番にして西側から4～8号墳とした。5～8号墳はいずれも墳頂部に盗掘墳が存在する円墳であるが、4号墳は不整形な低墳丘墓の様相を呈していた。前方後円形に近いもので、A支群2号墳との関係が想定された。当初の予想以上に古墳の数が増えたため、作業員を大量に動員して同時並行的に調査を行った。以下、各古墳の調査経過を簡単に振り返ってみよう。

《4号墳》 墳丘測量の結果、丘陵尾根に沿ってほぼ東西に主軸を置く不整形な前方後円形を呈していることを確認した。よって、主軸と後円部に各々直交するように十文字にトレンチを設定して墳丘調査と主体部確認のため調査を開始した。その結果、後円部のトレンチ交叉部と前方部に各1基、計2基の主体部と、後円部の南側に溝を検出した。よって、土層観察用の土堤を残して墳丘の全面発掘を行った。2基の主体部は土壌墓であることが判明し、溝は本墳に伴うものと想定されるが周溝とは言い難く、後円部の南側だけに掘られたものであった。

《5号墳》 墳丘測量後、盗掘墳の清掃から調査を開始した。折りからの炎天下のため調査は困難を極めたが石室床面の検出を目指し、その後に調査範囲を拡張して石室プランと開口方向を確認し、石室の調査を実施した。石室の遺存状態は良くなかったが2枚の床面の存在を確認した。石室プランの確認後に墳丘調査のためのトレンチ調査を実施し、土層図作成後に墳丘の全面発掘を行った。その結果、羨道の北側に供献土器群を検出した。副葬品は玉類を中心とした装身具、鉄鏃を中心に鉄製武器片を検出した。

《6号墳》 墳丘測量後、盗掘墳の清掃から調査を開始した。石室床面の検出後に調査範囲を拡張した石室プランと開口方向を確認し、石室の調査を実施した。石室の遺存状態は悪く床面は1枚であった。石室プランの確認後に墳丘調査のためのトレンチ調査を実施し、土層図作成後に墳丘の全面発掘を行った。その結果、羨道の南側斜面に供献土器群を検出した。

《7号墳》 墳丘測量後、盗掘墳の清掃から調査を開始した。本墳は本古墳群中最大の円墳であり、墳丘も高く、盗掘墳の調査は困難を極めた。盗掘墳の廃土量は極めて多量で不思議なことに盗掘墳の攪乱土中に、折れてはいたが大刀があたかも意図的に置かれたような状態で検出された。石室掘り方床面の検出後に調査範囲を拡張して石室プランと開口方向を確認し、石室の調査を実施した。石室の遺存状態は極めて悪く石材は殆ど遺存しない状態であった。床面は僅かに床石が存在するのみであった。石室掘り方のプランを確認後に墳丘調査のためのトレンチ調査を実施し、土層図作成後に墳丘の全面発掘を行った。その結果、羨道の南西側斜面に供献土器群を検出した。

《8号墳》 墳丘測量後、盗掘墳の清掃から調査を開始した。本墳は風通しの悪いところにあるために折りからの炎天下のため調査は困難を極めたが石室床面の検出を目指し、その後調査範囲を拡張して石室プランと開口方向を確認し、石室の調査を実施した。石室の遺存状態は良くなかった。石室プランの確認後に墳丘調査のためのトレンチ調査を実施し、土層図作成後に墳丘の全面発掘を行った。その結果、羨道の左右両側に多量の供献土器群を検出した。

(2) 調査の組織

平成元年度、2年度の2年次にわたる調査であったので各年度ことに記す。なお、肩書きは調査年度当時のものである。

【平成元年度】

〔総括〕	教育長	御手洗 康
	教育次長	濱地 甫伯
	指導第二部長	月森清三郎
	文化課長	六本木聖久
	文化課長補佐	平 聖峰
	文化課長技術補佐	宮小路賀宏
	文化課記念物係長	浜田 信也
	〔庶務〕	文化課庶務係長
〔調査〕	文化課事務主査	和田 健作
	甘木歴史資料館副館長	川述 昭人
	北筑後教育事務所	児玉 真一
	文化課文化財専門職員	日高 正幸
	文化課調査補助員	武田 光正

【平成2年度】

[総括]	教育長	御手洗 康
	教育次長	濱地 甫伯
	指導第二部長	月森清三郎
	文化課長	六本木聖久
	文化課長補佐	平 義勝
	文化課長技術補佐	石松 好雄
	文化課記念物係長	浜田 信也
[庶務]	文化課庶務係長	池原 脩二
	文化課事務主査	東 勇治
[調査]	甘木歴史資料館副館長	川述 昭人
	北筑後教育事務所	児玉 真一
	文化課文化財専門職員	日高 正幸
	甘木市教育委員会	松尾 宏
	甘木市教育委員会	隈部 敏明
	関西大学学生	中森 祥

第 2 章 位置と環境

菩提寺古寺古墳群は、甘木市大字菩提寺字古寺に所在し、南流して筑後川に注ぐ小石原川が秋月を経て平野部に臨もうとする左岸の丘陵上に構築されている。

小石原川兩岸の丘陵や山麓には多くの群集墳が存在し、左岸では丘陵の好所を選び菩提寺古寺古墳群付近から東の甘木市役所付近にかけて古墳時代前期の低墳丘墓が存在する。また、広く目を転ずれば筑後川北岸の南面する山麓地帯には大小の群集墳や低墳丘墓が構築されており、その一部については九州横断自動車道建設に係る事前調査等が行われている。主に道路建設に伴う調査であるため、群集墳や低墳丘墓について群として全面的な調査を実施することは不可能に近いが菩提寺古寺古墳群周辺の調査報告例のいくつかを以下に紹介する。

【柿原古墳群】 甘木市大字柿原字若山・大谷～大字板屋字城ノ下

九州横断自動車道建設に係る採土場となった朝倉山塊南斜面の標高60～100mほどの山麓地帯に構築された群集墳である。縄文時代から平安時代初期ころまでの遺構が検出されているが数量的にみて主たる遺構は群集墳である。石室の構造上の相違から石棺系立穴室を内部主体とするもの（65基）と横穴式石室を内部主体とするもの（81基）に分けられる。前者はI地区南側の谷部に集中的に構築され、後者は南面する各丘陵の南斜面に構築されている。また、石棺系堅穴式石室は新しいものも一部含まれるが5世紀代に構築されたものが多く、横穴式石室は6世紀後半以降に構築され復次埋葬・単次埋葬の二者が存在する。両石室は時期的に重なり合う部分もあり、初期群集墳の形成は石棺系堅穴式石室を内部主体として5世紀代に始まり、6世紀後半以降に横穴式石室を内部主体とする後期群集墳の構築が開始され、造墓活動は8世紀代にまで及んでいる（註1～4）。

【持丸古墳群】 甘木市安川町大字持丸山田山

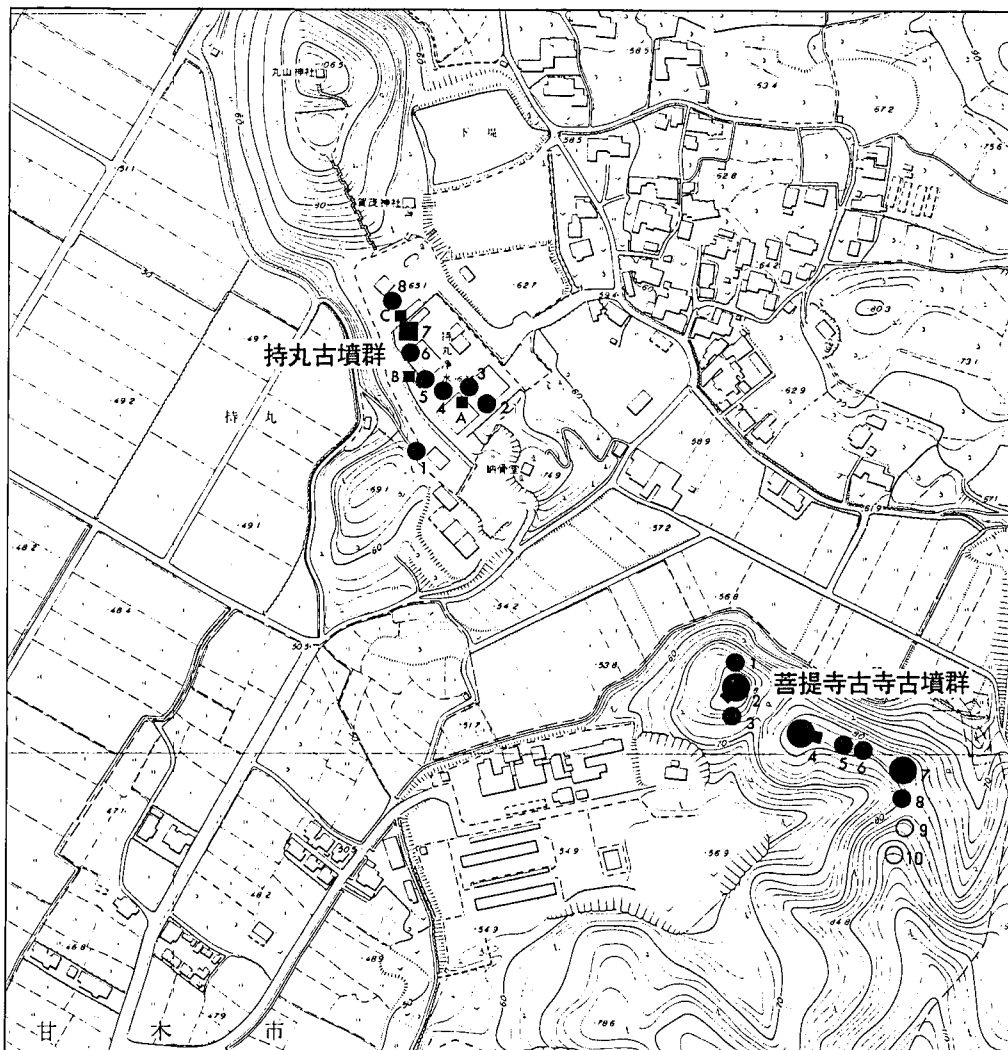
甘木市の浄水施設建設に伴って調査された。小石原左岸、朝倉山塊西部の独立丘陵の尾根上に構築された小規模な群集墳で、先行して箱石棺を内部主体とした4基の低墳丘墓が構築されている。また、中世の埋葬遺構も検出されている。

単室の横穴式石室を内部主体とする円墳4基からなる群集墳で、標高75m程の丘陵尾根部に構築されている。2号墳を除いて石室は大破している。比較的遺存状態の良い2号墳は直径16～17.5m、高さ2～2.4mで南東に開口する横穴式室を内部主体とする。石室は最後の追葬時に左側壁の一部と前壁を利用して、玄室内に石室を造っており、極めて異例の石室構造である。鉄製大刀や鉄鏃等の武器、馬具、農工具、装身具、須恵器、土師器等が出土しており、菩提寺古寺古墳群の副葬品の組成と良く似てゐる。また、奥壁後背部の第一次墳丘裾部付近で、墳丘盛土下の不整長楕円形土壌内に意識的に破砕して置いた状態で3個体分の須恵器の大甕が検出され、墳墓（石室）の築造前に行われた祭祀関係のものであろうと推測さ



1. 菩提寺古寺古墳群
2. 持丸古墳群
3. 鬼の枕古墳
4. 古寺墳墓群
5. 池上墳墓群
6. 柿原古墳群
7. 小田茶臼塚古墳
8. 神蔵古墳
9. 山隈窯跡群
10. 焼ノ峠古墳
11. 小隈古墳
12. 小隈窯跡群
13. 若宮古墳群
14. 堂の浦古墳群
15. 仙道古墳群
16. 仙道古墳
17. 乃木松古墳群

第1図 菩提寺古寺古墳群と周辺遺跡分布図 (1/50,000)



第2図 持丸古墳群と菩提寺古寺古墳群関係図 (1/5,000)

れている。6世紀半ば～後半代に構築された群集墳である（註5）。

【鬼の枕古墳】 甘木市大字菩提寺字山畑388 番地他

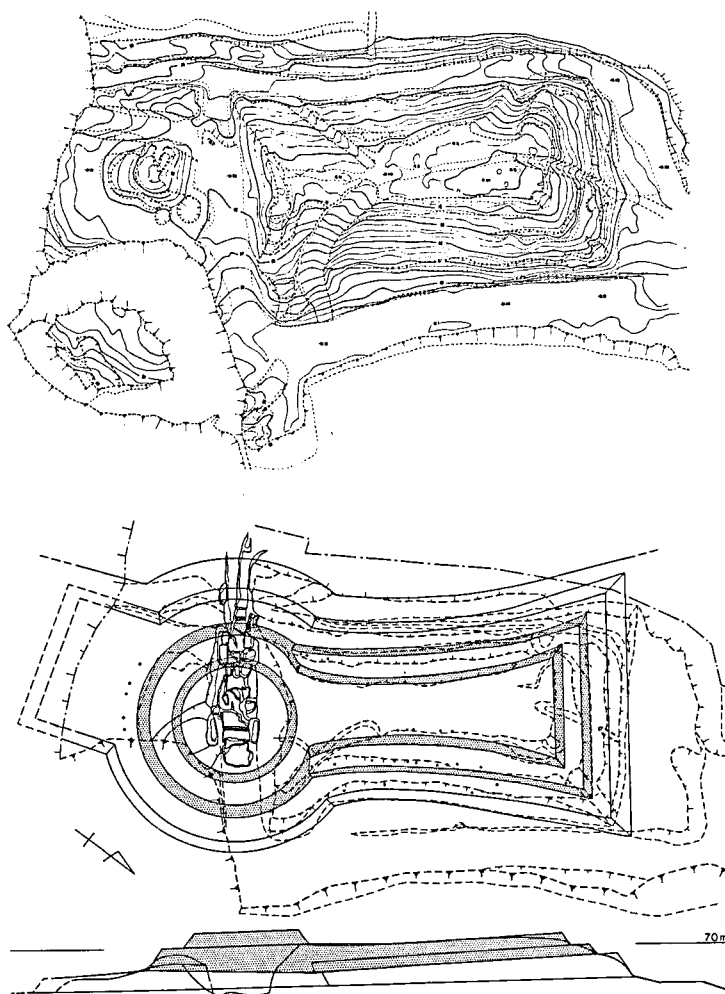
菩提寺古寺古墳群の南方約700mに位置し、朝倉山塊南斜面の最西端に主軸を南東～北西に置いて構築された前方後円墳で、後円部の南東に方形の別区を設ける。甘木市教育委員会が調査を行ったが、後円部は大きく破壊され、横穴式石室の石材はほとんど抜き取られていた。調査の結果、墳丘は三段築成で斜面に葺石を巡らせ、前長56m、後円部径・前方部幅とも28mに復原されている。墳丘平坦面には円筒埴輪を主体に人物・馬・武器・家・衣蓋形埴

輪等を樹立する。石室は墳丘主軸に直交して南西に開口する複室構造の横穴式石室で、全長14.2m、素掘りの墓道を含めて22.4mと推定されている。石室・墓道等からガラス玉、鉄鏃・鉄鉾(?)・馬具残欠等の鉄製品、須恵器、土師器が出土している。6世紀中葉～後半に築造されたと推定され、調査担当者の小田和利氏はこの地方の最後の前方後円墳と考えられている(註6)。

【池の上墳墓群・古寺墳墓群】 甘木市大字菩提寺字池の上・古寺・後牟田

両墳墓群は鬼の枕古墳の北側の丘陵鞍部に構築された一連の墳墓群で、墓域のほぼ全域

が調査された数少ない遺跡である。方墳(方形周溝を巡らす)・円墳のほか土壙墓、石蓋土壙墓、箱式石棺と竪穴式石室との折衷形態の埋葬施設、また、竪穴系横口式石室を模した刳貫式の横穴墓等の古墳時代の埋葬施設が検出されている。調査担当者の橋口達也氏は、これらはほぼ100年間の所産とされ、墳墓の在り方から全体的に見て東南側の池の上墳墓群から西北側の古寺墳墓群へと造墓活動の変遷を考えられている。竪穴系横口式石室を模した刳貫式横穴墓に複次葬を認めることができるが、それ以前の埋葬施設は一部を除いて単次葬である。この墳墓群の埋葬施設には陶質土器を棺内副葬する例があり、北部九州の弥生時代後期以降から古墳時代前期の集団墓地の一般的な埋葬施設とは異質である。すなわち、陶質土器



第3図 鬼の枕古墳墳丘測量図(上)・墳丘復原図(下)、
註6文献より、1/800)



第4図 池の上墳墓群・古寺墳墓群全体図（註9文献より）

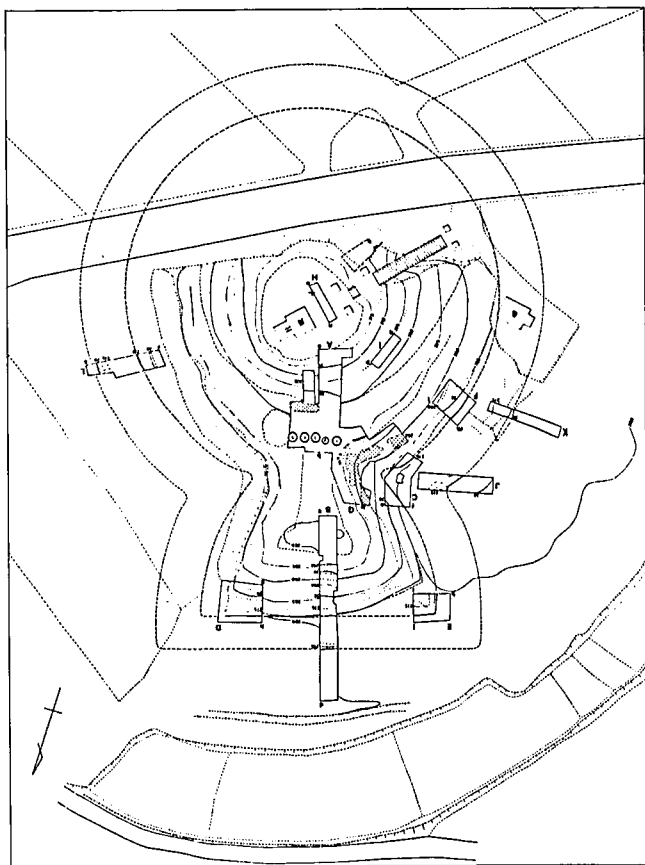
や初期馬具等に象徴されるようにこの墳墓群に葬られた人々の出自の問題を内包しており、その実態は明らかではないが、初期須恵器を生産した三輪町山隈窯跡（註7）、夜須町小隈窯跡（註8）の工人集団との関係は極めて密接なものであったと考えられる。

土師器・陶質土器・初期須恵器の分類について橋口氏は「墳墓の流れと一致しており、又古墳内部の主体および墳墓の構造も、割竹形木棺・箱式石棺・土壙墓→竪穴式石室・土壙墓→土壙墓→土壙墓・竪穴系横口割貫石室という風に変化しており、土器の分類とも対応しているといえる。」（註9）とされ、土器の分類と遺構の変化が重なり合うものとされた。さらに、この墳墓群の評価について「池の上1号墳がつくられてから100年程を経て、古寺1号墳にみられるりっぱな古墳がつくられる過程は、当初墳丘をもちながら、次には周溝だけとなり、副葬品にもさほど優劣がみられなかった状態から、首長層一族の中での激しい階層分化の過程を経て、首長個人へ権力が集中する状況を見てとることができる。・・・神蔵・小田茶臼塚等を形成したこの地域の大首長層に伍するにいたる権力と勢力を獲得するまでには次の時代、すなわち塊の枕前方後円墳の時代を待たねばならなかった。」（註10）とされた。

この墳墓群の造墓時期について、氏は陶質土器・初期須恵器を池の上Ⅰ～Ⅳ式に分類され、池の上1～3号墳出土の古式土師器を池の上Ⅰ式直前とされた上で、池の上Ⅰ式を4世紀後半とし、池の上1～3号墳の古式土師器を4世紀中頃、また池の上Ⅳ式を5世紀前半の後半とされた。よって、両墳墓群は4世紀中頃～5世紀前半の後半ころに継続して構築されたものと考えられる（註11）。

【小田茶臼塚古墳】 甘木市大字小田字茶臼塚

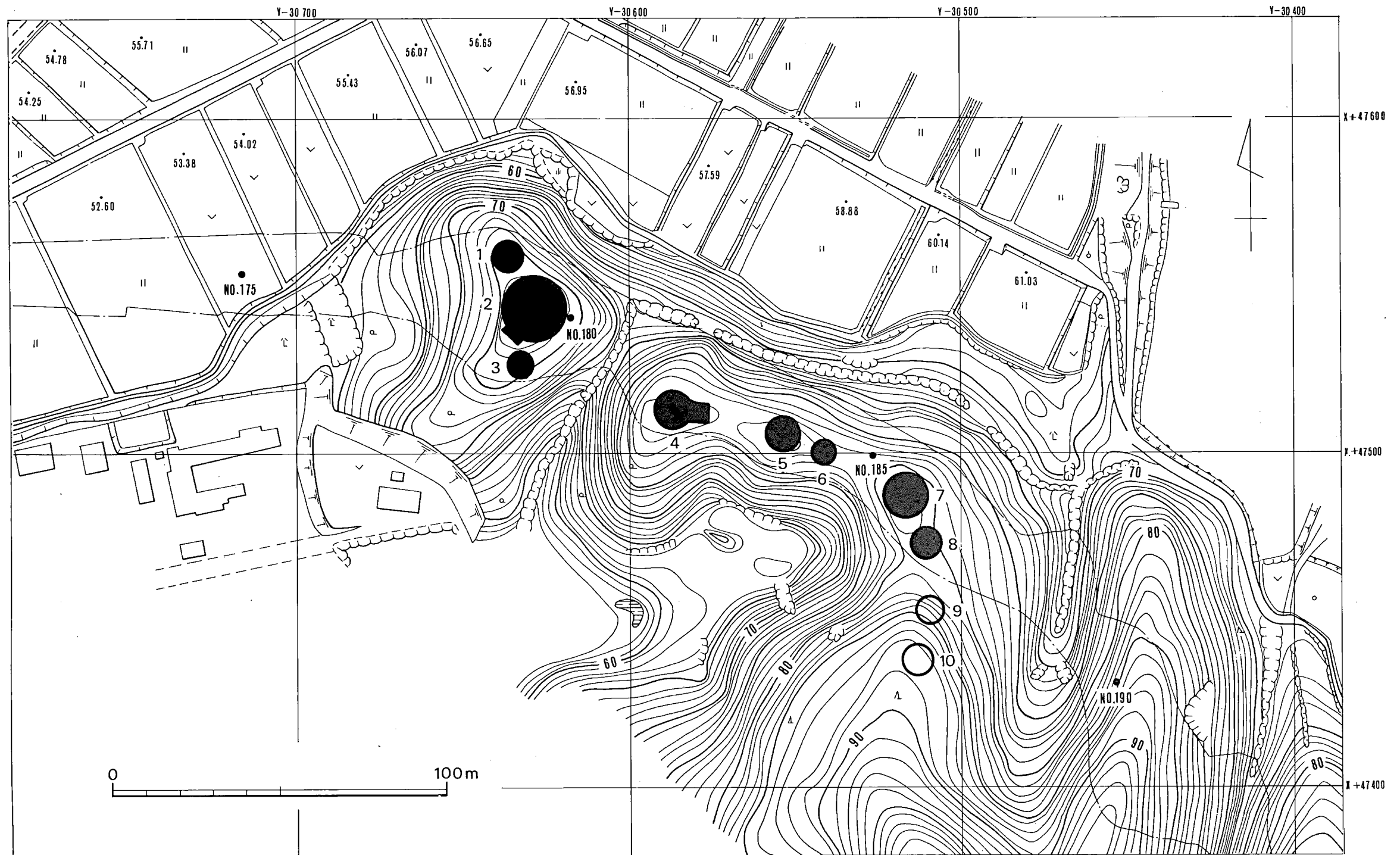
南流して筑後川に注ぐ佐多川右岸の河川段丘上に構築された二段築成の帆立貝式前方後円墳である。道路工事により後円部は1/4ほど破壊されて石室が露出している。甘木市教育委員会の調査によれば、墳丘全長54.5m、後円部径39.7m、前方部長14.5m、同幅25m、くびれ部幅14.5mで一重の周溝が巡り、周溝まで含めて全長63mと報告されている。内部主体は後円部に構築された単室の横穴式石室で、甲冑・鉄銚・鉄鏃等の武器、環鈴・轡等の馬具、鉄鎌・鑿形鉄製品等の農工具、玉類が出土している。墳丘からは埴輪のほか須恵器の大甕・



器台・塤等の献土器が出土している。調査にあたった柳田康雄氏は出土須恵器についてa～c型式に3分類され、5世紀中頃あるいは後半の早い時期に比定された。またa型式は現石室との時間差を考慮して、さらに1基の石室の存在を想定されている。（註12）。

本墳は甘木・朝倉地区で古式の横穴式石室を内部主体とする首長墓の初見例である。

第5図 小田茶臼塚古墳（註12文献より、1/800）



第6図 国道386号線バイパス路線図と古寺古墳群配置図 (1/1,500)

第3章 菩提寺古寺古墳群の調査

第1節 古墳群の概要 (第6図)

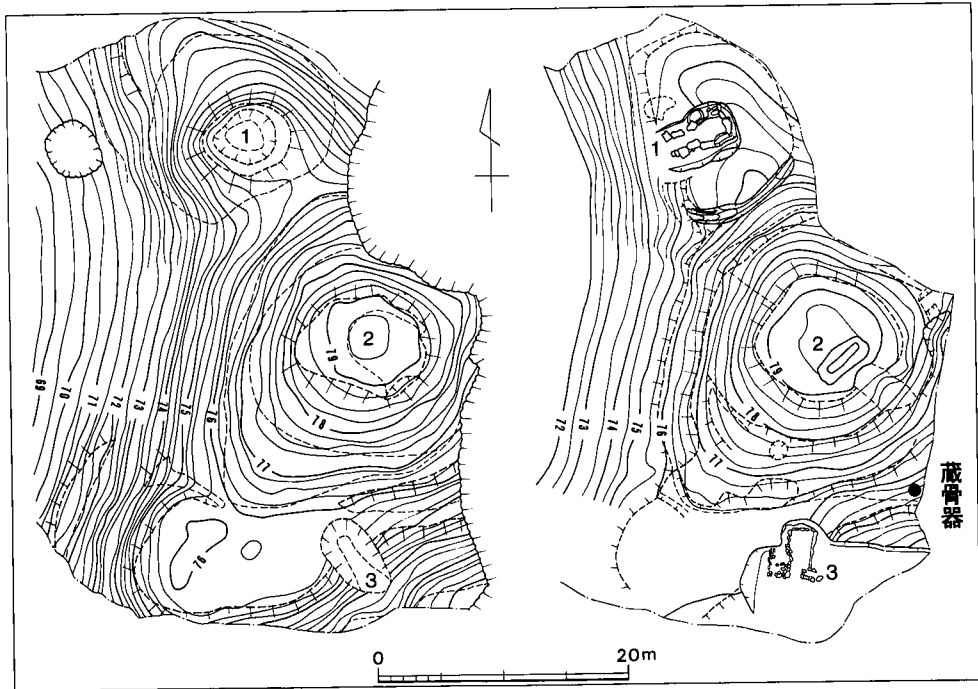
菩提寺古寺古墳群は細い谷をはさみ、空間的にA・B二つの支群に分かれる。A支群は2号墳が四世紀代に、1・3号墳の2基が六世紀代に構築されたものである。B支群も4号墳が四世紀代の、5～8号墳が六世紀代の構築である。両支群の造墓活動には新旧2時期があってほぼ2世紀の空白期間があり、その間の社会の変質を考慮すれば両時期の造墓活動の背景には異質な要素の存在が考えられる。よって、視覚的に二つの支群に分けることには内容的に無理な部分が存在するが、便宜的にA・B支群として説明する。

第6図のように両支群とも四世紀代の墓は、各々丘陵の最好所を選んでいる。しかし、2号墳は4号墳と異なり平野に面した高所に構築され、占地の面から見て有利な位置を占め、墳丘・副葬品についても後述するように格段の差を認めることができる。

六世紀代に構築されたA・B支群の群集墳は、前項で説明した持丸古墳群とは本来的に一体として把握すべきものである。A支群の周囲は路線範囲外についても分布調査を実施したが他に古墳の存在を認めることができなかった。B支群は路線範囲外の東南側に2基の古墳の存在(9・10号墳)を確認している。よって、現状ではA支群は2基、B支群は6基からなるものと推測している。両支群の調査を実施した古墳の内容については後述するが、古墳の立地・規模・副葬品の面で両支群間に質的な差異を認めることは困難である。また、先述の持丸古墳群の内容と比較しても同様なことが言える。

第2節 古寺A支群の調査 (図版1. 2、第7図)

やせた尾根の鞍部に肩を寄せ合うように3基の古墳が構築されている。四世紀代の2号墳が最好所を選び、その南北に六世紀代の群集墳(1・3号墳)が存在する。先述したようにこの丘陵には他に古墳の存在を視認することはできず、A支群では前期古墳1基、後期古墳2基、2号墳の東南墳裾に奈良時代の蔵骨器1基を確認したにとどまる。しかし、3号墳の西側の平坦部及び斜面で通称柿原石と呼ばれる扁平な板状節理の石材の小口に赤色顔料を塗布したものが十数枚出土しており、竪穴式石室を内部主体とする古墳が存在した可能性が高い。調査時点で石材の存在だけを確認したものの、古墳の痕跡は検出できなかった。

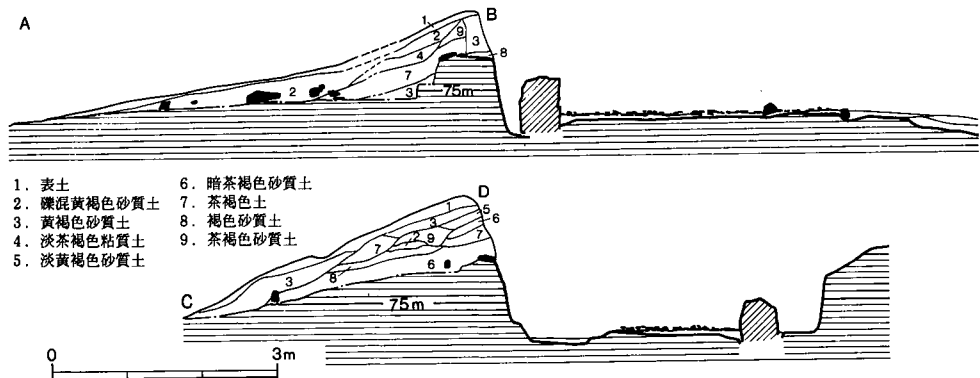


第7図 古寺古墳群A支群全体図 (左・調査前、右・調査後、1/400)

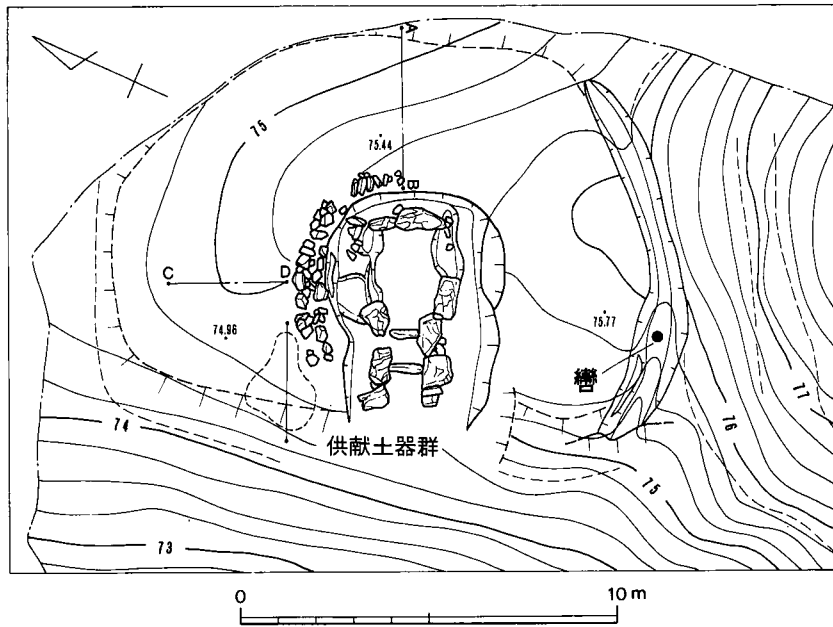
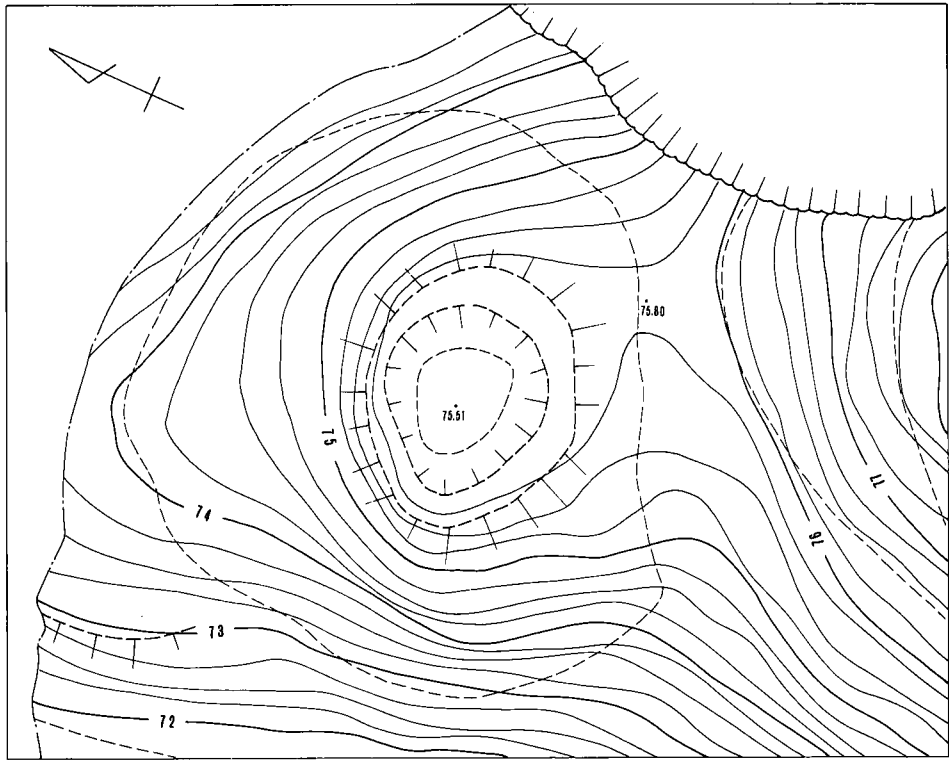
1. 古寺1号墳

(1) 墳丘 (図版3、第8・9図)

樹木伐採後の観察では径12~15m、墳丘の高さは2~3mほどの円墳状を呈し、墳丘の中央に径4~5m、深さ0.5mほどの盗掘壙を認めることができた。調査はこの盗掘壙をさらえることから開始した。盗掘壙の底から1mほど掘り下げたところで石室の床面を検出し、石室のプランを確認した段階で墳丘に土層観察用のトレンチを設定した。最終的には墳丘の盛土を全て除去した。その結果、2号墳側に幅1m弱、深さ0.3mほどの周溝を有し、南北15



第8図 古寺1号墳墳丘土層図 (調査前、1/100)



第9図 古寺1号墳墳丘測量図 (上・調査前、下・調査後、1/200)

m、東西12mほどの方墳状のものとなった。しかし、石室が開口する西側は急な斜面となっており、盛土が流出していることや、周溝が弧状を呈することなどから、本来は円墳であったろうと推測する。

墳丘の盛土は先述のように盗掘を受け、流出などして当初の状態を残さないが、墳丘の東・北側の土層から判断して、石室の構築に際して腰石を設置した段階で掘り方の外縁に沿って板石をめぐるしている。さらに天井石架構前から小規模な盛土を行い、石室の完成後に第一次墳丘を形成し、最終的に当初から予定された規模に合わせて墳丘を構築している。

(2) 石室 (図版3～6、第10図)

地山整形後、深さ1～1.2mの掘り方に構築された横穴式石室で西に開口する。プラン的には単室の石室ではあるが玄門から30cmほど入口側に本来の仕切石（第一仕切石）があり、それからほぼ1m入口側にさらに仕切石（第二仕切石）が設置されている。両仕切石の間部分にも玄室の第一次床面と同様な床石が敷かれ、この空間は副室的な機能を果たしたと推測されるが、それは形式的なものであり、副葬品は存在しなかった。石室は石が抜き取られ、奥壁・右側壁の一部と羨道の腰石が残るだけである。全長4.8mで玄室は長方形プランを呈し、玄門仕切石までは主軸長2.7m、右壁側で2.4mである。幅は側壁腰石の一部しか遺存しないので定かではないが1.8m～2mほどであろう。玄門には方柱状の石材を立てているが、左側の袖石は過去の石材採取の時にやや移動して傾むいており現状を保たない。閉塞は第二仕切石の部分で行われ、複数の板石を使用している。閉塞部外側の閉塞石の中で羨道床面から30cmほど浮いたものが存在し最終的な閉塞時にはこの部分が土砂で一定程度埋まっていたことがわかる。

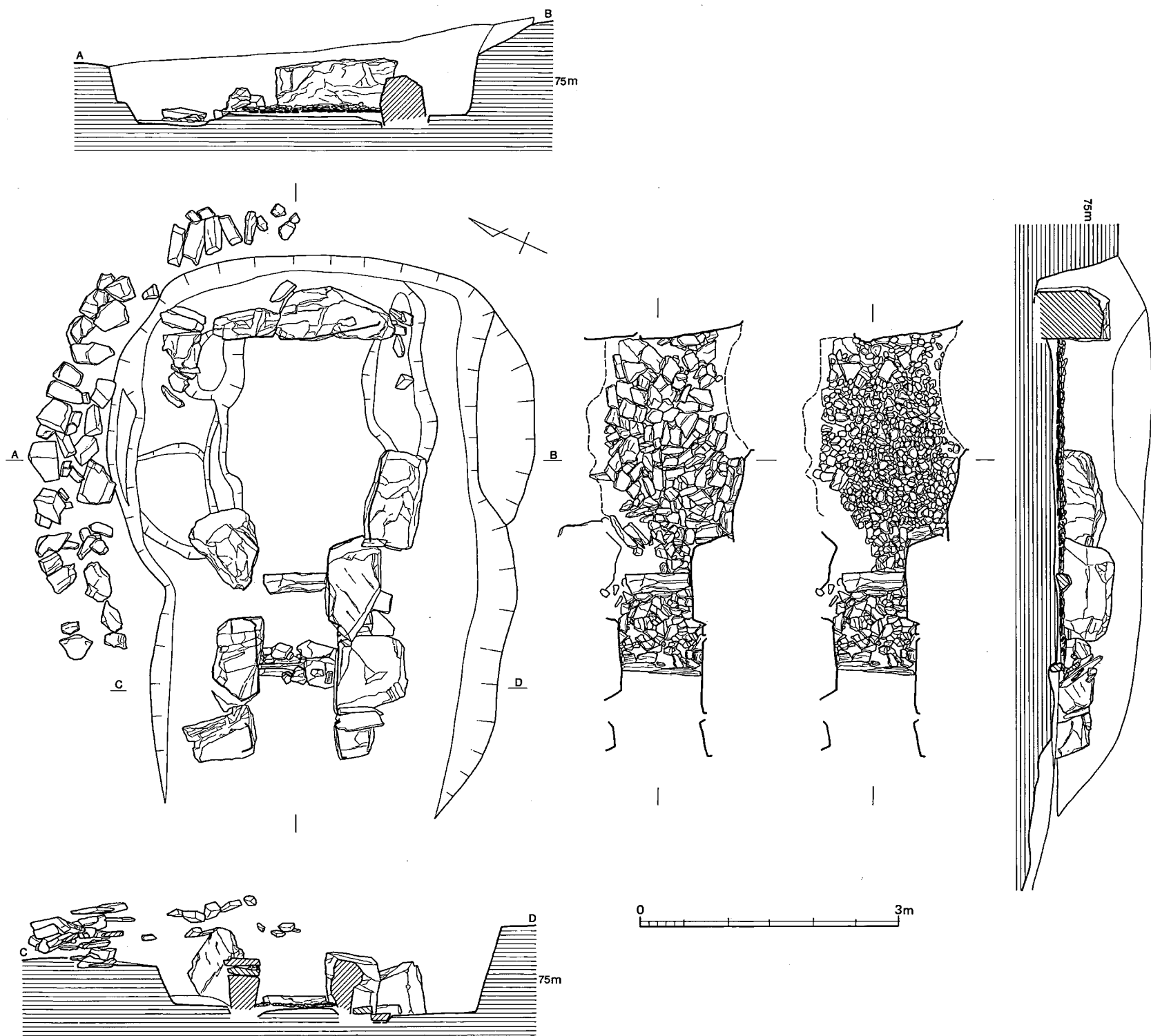
閉塞部の状況だけからでも追葬の事実は明らかであるが、玄室の床面敷石も2層存在する。第一次床面は板石を使用し、第二次床面は玉石を敷きつめている。両床面の間には目立った間層をはさまず、したがって、第二次床面を形成するまでの間において自然的な土砂の流入や玉石設置時に人為的な土砂の搬入はなかったことがわかる。第二次床面の玉石が敷かれたのは玄室だけで、先述の第一・二仕切石間の床面は第一次床面と同様な板石が敷かれている。

本古墳の石室は他の古墳と同様に堤を造る際の石材採取の対象とされ、石室構造の細部については不明な部分を多く残している。

(3) 遺物の出土状態 (図版7～9、第11・12図)

石室内・周溝・墳丘盛土内から出土した。

石室内では両床面から、耳環・玉類等の装身具類、鉄製品が出土し、第二次床面からは土器類が出土している。しかし土器類は第二次床面形成時にかたづけられて再配置された可能性を残し、どの床面に伴うものかにはわかに判断しがたい。



第10图 古寺1号填石室实测图 (1/60)



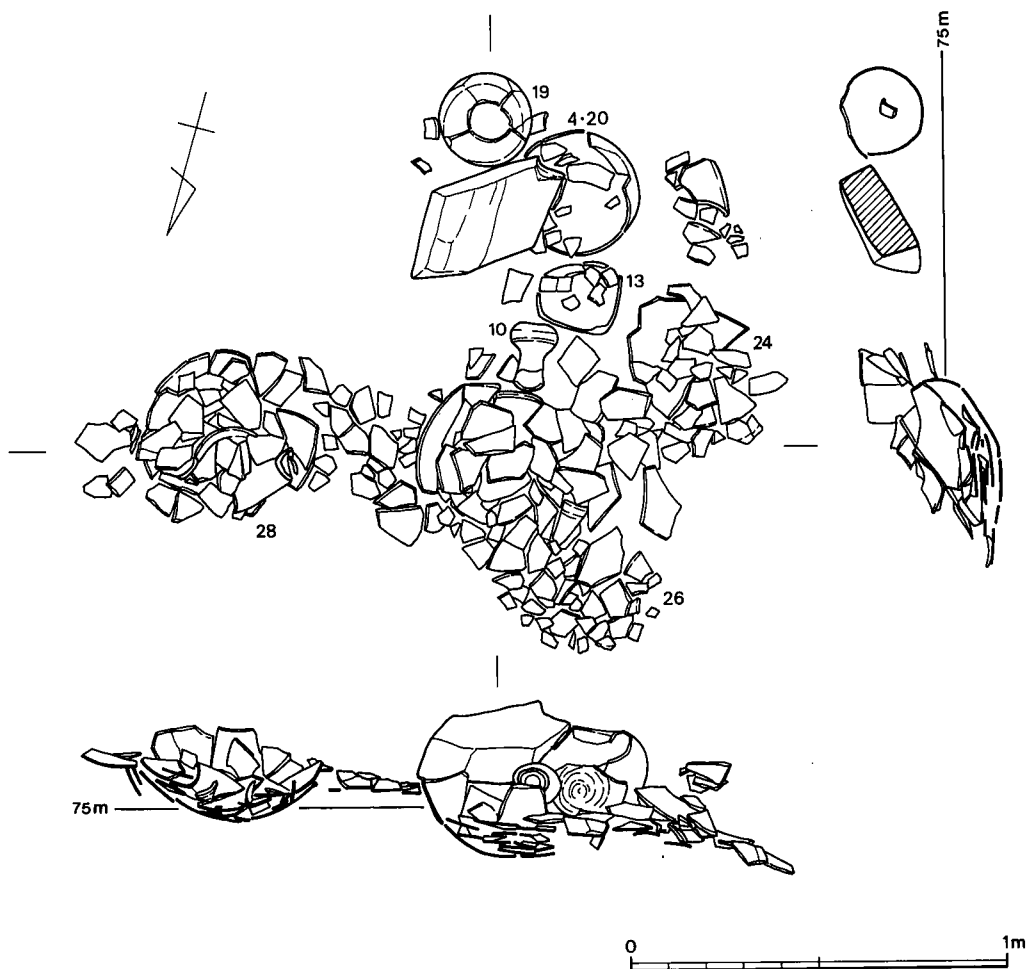
第11図 古寺1号墳玄室遺物出土状態実測図 (1/30)

周溝内から轡が出土している。復原すればほぼ完形品であろうが錆化が進行し、割れ口が完全に接合しない。

墳丘内から供献土器群を検出した。原位置を保つものは第12図のごくわずかである。検出した地点は、墓道左側の第一次墳丘の墳裾でかつ最終的な盛土内である。ただし、この部分から墳裾側に向かって傾斜が急になっており、一部は墳丘流出等に伴って丘陵斜面から検出したものも含まれる。すなわち、墳丘構築の過程で執り行われたマツリに伴うウツワで、検出した土器の中には土師器は含まれず、すべて須恵器で器種は甕・壺・高坏・坏・提瓶・平瓶等である。詳細については後述するが、甕・壺等の大型品は意識的に破碎され、中には底部を意識的に打ち欠いた例もある。土器のセットは8号墳と基本的に変わらないが、土師器を含まない点が注目される。

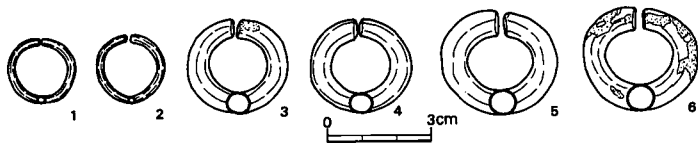
(4) 出土遺物

装身具 耳環と勾玉・管玉・小玉等の玉類が出土している。小玉類はガラス製で他に水晶製の玉が1点出土している。



第12図 古寺1号墳供献土器出土状態実測図 (1/20、番号は実測図と対応する)

耳環 (図版32、第13図1~6) 第一・二次床面から6個出土している。これらは、形状から判断して1・2、3・4、5・6、の各々が対になると推測され、本石室には少なくとも3体が埋葬され、追葬は少なくとも2回であったろうと考えられる。1・2は細身の銀製の耳環で、1は外径19mm、断面径2mmで2は同じく20mm、2mmである。3・4の表面は銀貼りされ、ともに外径29mm、断面径6mmである。5・6も3・4と同様に表面は銀貼りで、ともに外径33mm、断面径7mmである。



第13図 古寺1号墳出土耳環実測図 (1/2)

玉類(図版33、第14図) ガラス製小玉、滑石製白玉、水晶製棗玉、ガラス製勾玉、碧玉製管玉が出土している。先述のように、これらは石室内から出土したが第二次床面が荒らされて原位置を移動したものがあり、どの床面に伴うのか判断できないものが含まれる。玉類の出土リストは以下のとおりである。

〔第一次床面〕

・ガラス製粟玉

黄緑色 10個
 スカイブルー 10個
 コバルトブルー 34個

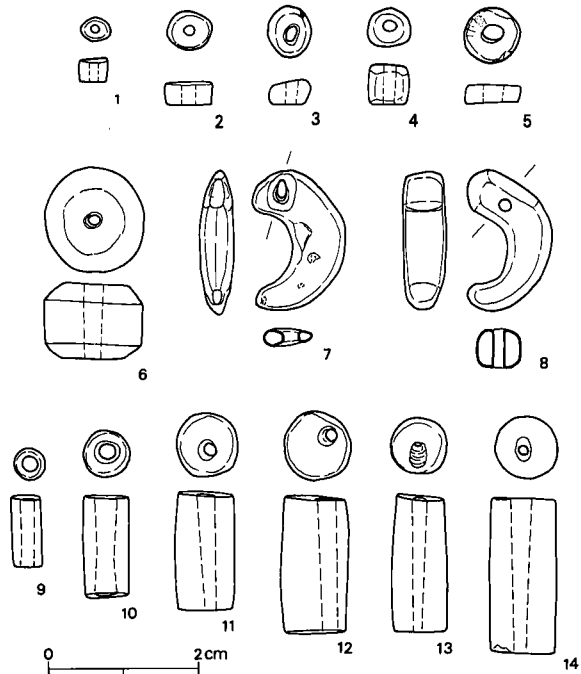
・ガラス製小玉

黄色 9個
 スカイブルー 2個
 コバルトブルー 6個

〔第一・二次床面の攪乱敷石間〕

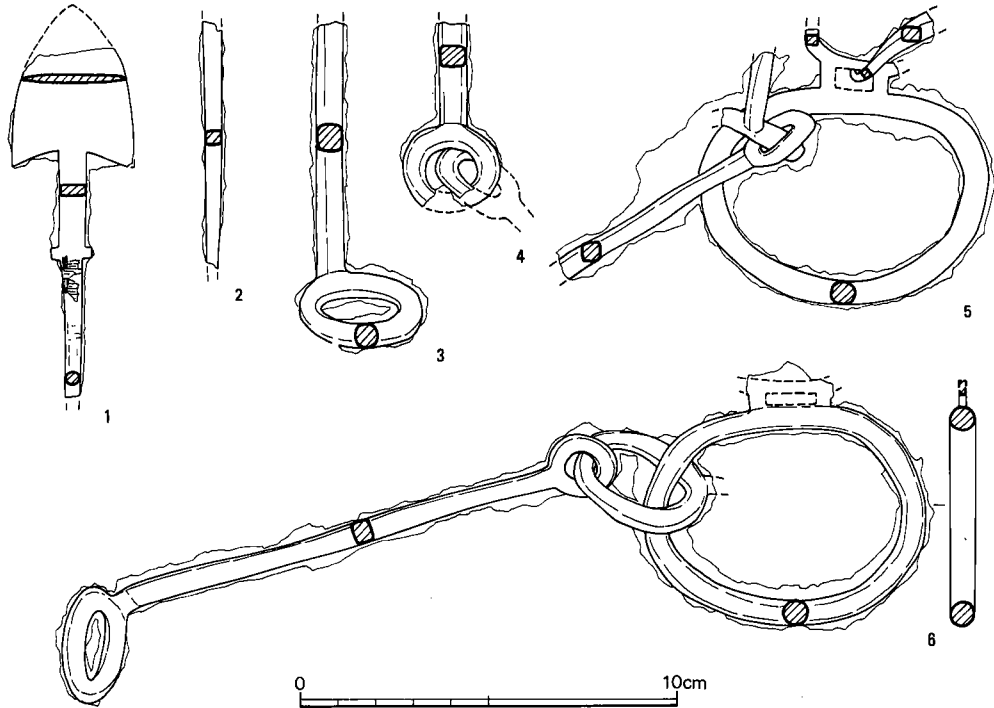
・ガラス製粟玉	黄緑色	24個	コバルトブルー	16個
・ガラス製小玉	黄色	14個	コバルトブルー	9個
	スカイブルー	2個		
・水晶製棗玉	1個			
・ガラス製勾玉	2個			
・碧玉製管玉	9個			
・滑石製白玉	3個			

以上が出土玉数の総計である。第14図の1～4はガラス製小玉で3はスカイブルー、他の3個はコバルトブルーを呈する。1から順に径は4mm、6.5mm、6mm、5.5mmである。ともに第一・二次床面の攪乱された敷石間から出土した。5は径7mmの滑石製白玉で第一・二次床面の攪乱された敷石間から出土した。6は径13mmの水晶製棗玉で出土位置は上記玉類と同様である。7・8はともにガラス製勾玉である。7は長さ18mm、厚さ4.5mmの扁平なものである。ガラス製で黒灰色を呈する。8は長さ18mm、厚さ5.5mmの断面が矩形状を呈する。ガラス製でスカイブルーを呈する。ともに第一・二次床面の攪乱された敷石間から出土した。9



第14図 古寺1号墳出土玉類実測図(原寸)

～14は碧玉製の管玉9・14を除いて側面観はエンタシス状を呈する。長さ・径は9以下おのこの、9.4mm・3.5mm、14mm・6mm、16mm・8mm、18.5mm・9mm、16.5mm・7mm、20.5mm・9mmである。
鉄製品 鉄鏃・馬具が出土している。先述のように石室内があらされており、鉄製品の副葬品目については鉄鏃を除いて不明である。



第15図 古寺1号墳出土鉄製品実測図 (1/2)

鉄 鏃 (図版32、第15図) 1は現存長9.3cmを測り、身部の先端と茎の下端を欠失する。棘以下には矢柄と桜皮の一部が銹着している。2は茎だけの破片で現存長6.6cmである。石室内の第一・二次床面の攪乱された敷石間から出土した。

馬 具 (図版32、第9・15図) 3～6は同一個体の破片である。意識的に置かれた状態で周溝内から出土した。銹と欠損のため立聞の部分についての詳細な形状は定かではないが方形を呈しているように見受けられる。本例の鏡板は素環で5・6の平面形は細部においてやや異なるが楕円形を呈し、外径で5は長径7.7cm、短径5.8cmほどである。同じく6は7.5cm、5.8cmほどである。引き手は全形をうかがえる6では全長15.7cmを測り、断面は径5mmほどの円形である。衝については全形を知りえない。

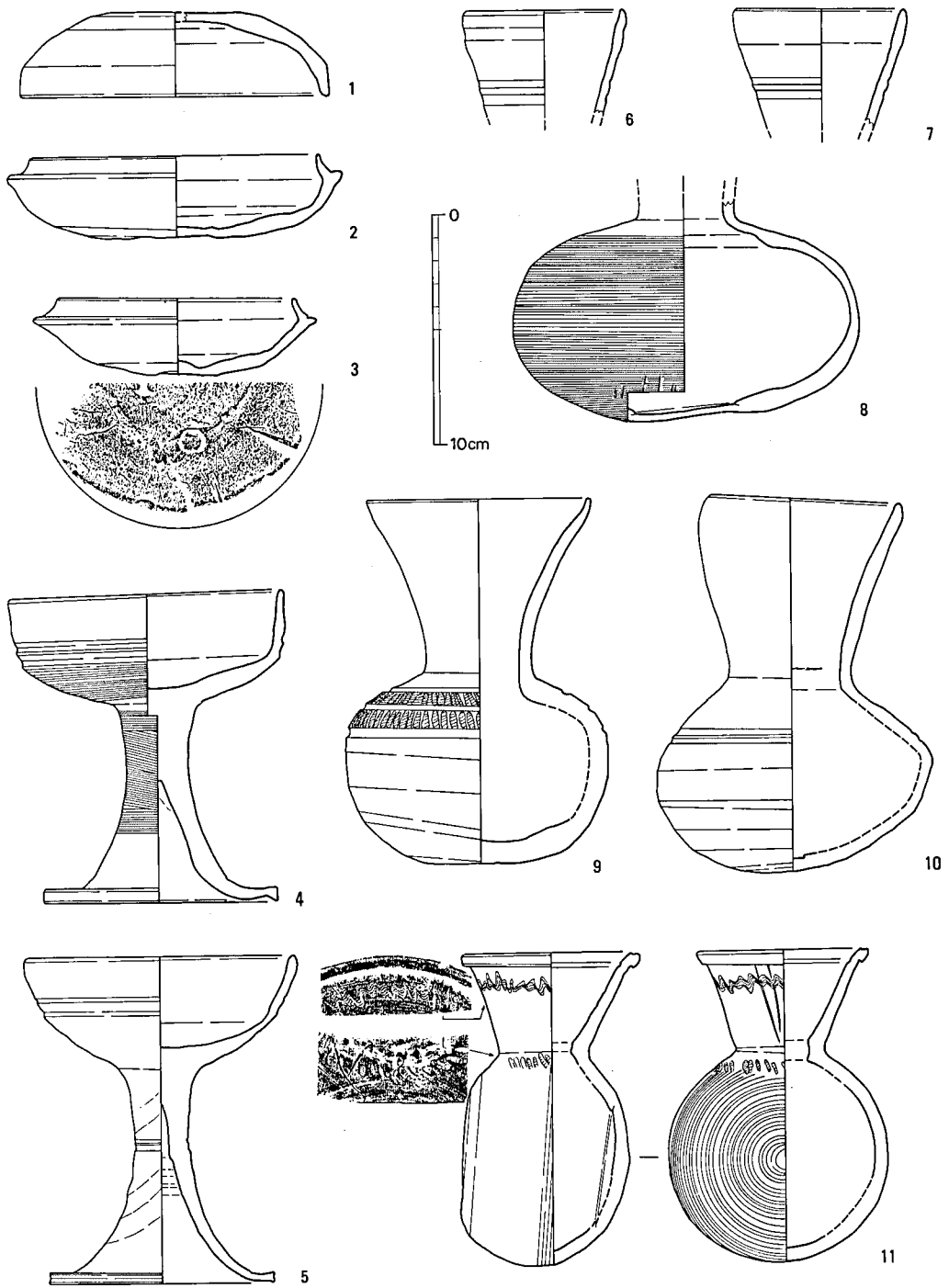
土器（図版35・35、第16～20図）図示したのは28個体である。小破片は省いたが出土した個数は30個体を超える。17・18は本墳に直接伴うものではなく、後世に石室を再利用した時に持ち込まれたものであろう。先述のように、本墳の出土土器の中には明らかに土師器だと認定されるものはなく、5は焼き上がりは土師器的ではあるが成形技法的には須恵器の技法で作られたもので、すべて須恵器の工人集団により製作されたものである。器種的にはバラエティに富んでいる。

坏（1～3）1・2は墳丘盛土内から検出された供献土器で、3は石室内で検出した。1は1/4ほどの破片からの復原実測図である。復原口径13.2cm、同器高3.6cmである。ヘラ削りの範囲は狭い。焼成良好で淡褐色を呈し青灰色～暗灰色を呈する。3は2と比して小型化した坏身で完形品である。口径10.2cm、器高3.3cmを測る。外底面のヘラ削りの範囲は狭く荒い。焼成良好で暗灰色～暗紫灰色を呈する。

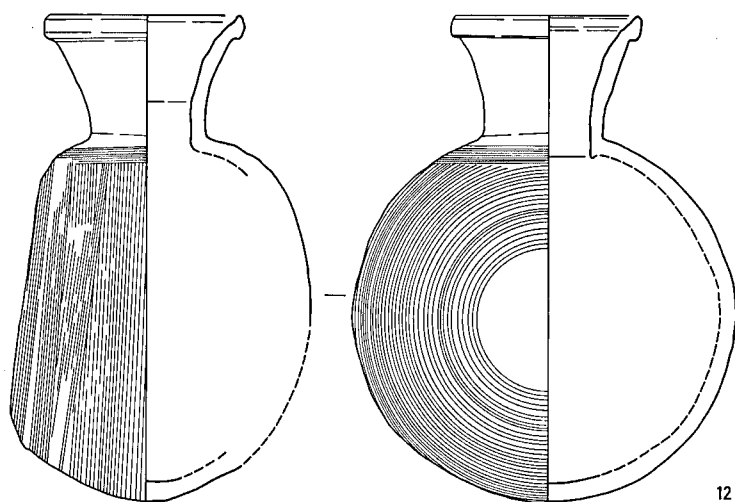
高坏（4・5）4は墳丘盛土内から検出された供献土器で、甕20の内部に入られた状態で検出した。5は石室掘り方北東隅の埋土中から出土したので本来は石室内にあって石材採取の折りに原位置を移動したものである。4は口径11.8cm、器高13.4cmを測り、坏部下半および脚柱部上半にはカキ目調整をほどこし、脚柱部には絞り目が認められる。焼成は良好で灰色～白灰色を呈する。5は口径11.8cm、器高14.1cmを測り、脚柱部には絞り目が認められる。焼成は良好で灰色～白灰色を呈する。

長頸壺（6～10）10は第12図のように供献土器郡の一部で、甕26と壺13の間に検出した。9は玄室の第二次床面上で、6～8は玄室の盗堀墳の廃土中に検出したもので本来は玄室内に副葬されて原位置を移動したものであろう。6・7は破片資料であるが8はこの状態ではほぼ完形で上開きの口頸部がつくだろう。底部の作りは堤瓶・平瓶のように後で貼りつけている。玉葱形の胴部最大径は15.2cmを測る。胴部中位以下は時計まわりのヘラ削りを行い、上半部は3条の凹線を巡らせ、その間に刻み目を施す。焼成は良好で青灰色～暗灰色を呈する。10は器のゆがみがひどいが口径8.4cm、器高16.1cmほどを測る。方部下に2条の凹線を巡らす以外には加飾されない。焼成は良好で灰色～暗灰色を呈する。

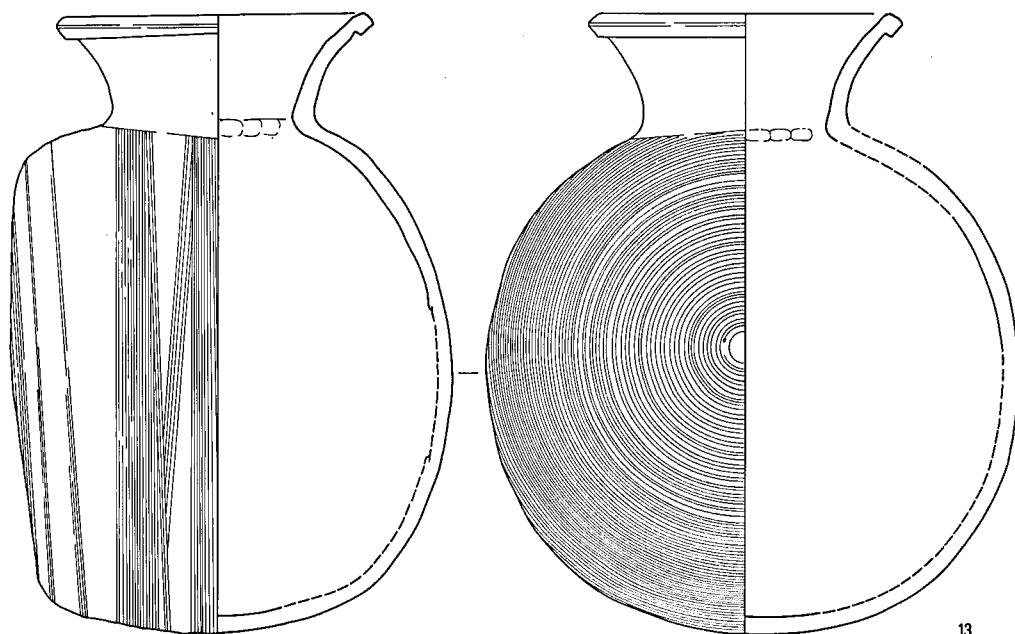
提瓶（11～13）11は玄室の第二次床面で検出した。12・13は供献土器で13は甕20の北側に検出した。11は口径7.5cm前後、器高13.5cmの小型品である。口縁部下に波状文を、肩部に刻み目を施す。焼成良好で暗灰色～黒灰色を呈する。12は口径7.5cm、器高19.2cmを測る。焼成は良好で灰色～暗灰色を呈する。13は意識的に破砕された状態で出土したが、図上で口径12.5cm、器高24.7cmに復原される大型品である。焼成は良好で暗灰色～黒灰色を呈する。



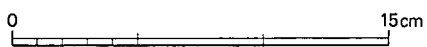
第16图 古寺1号出土土器实测图① (1/3)



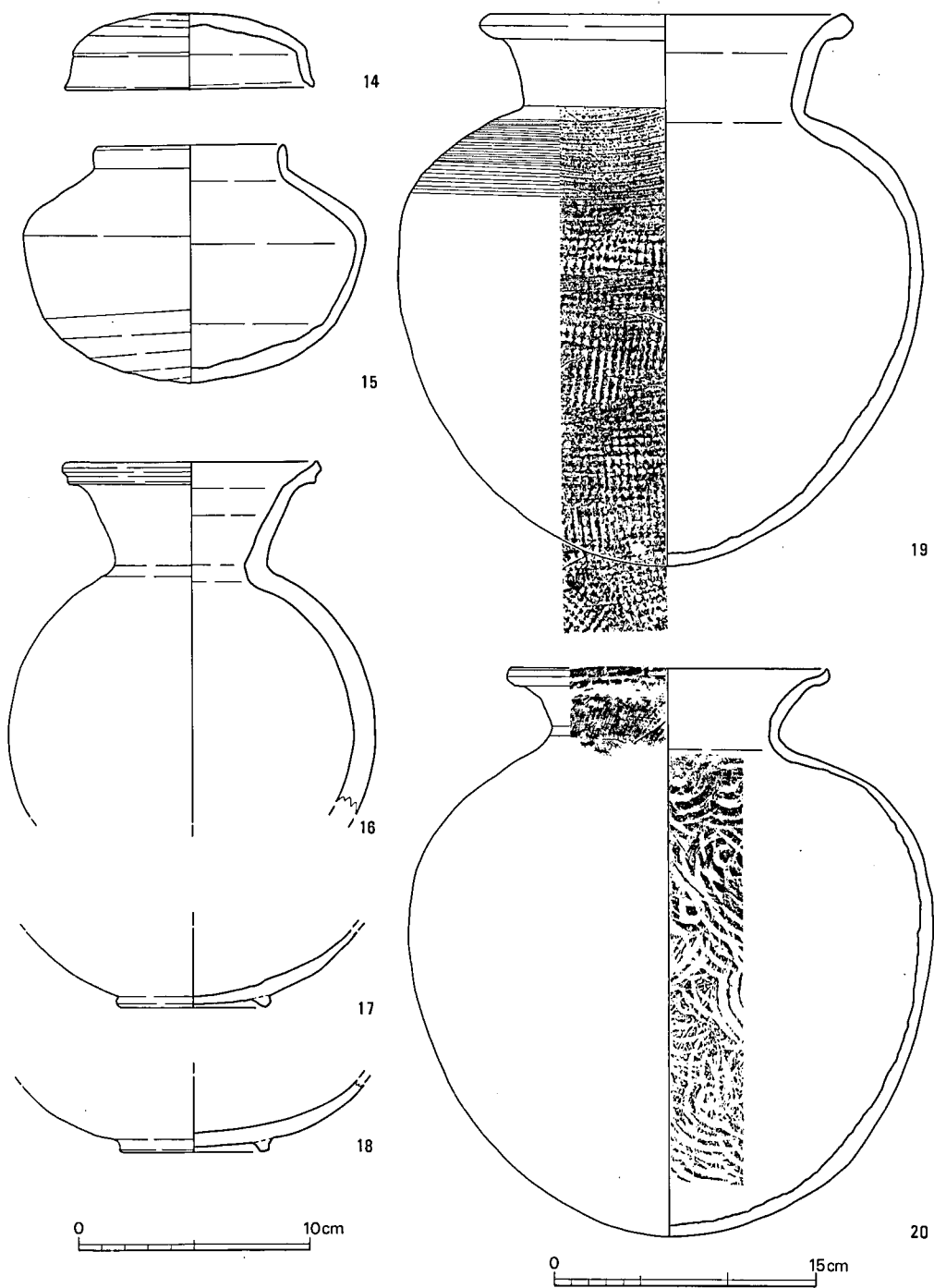
12



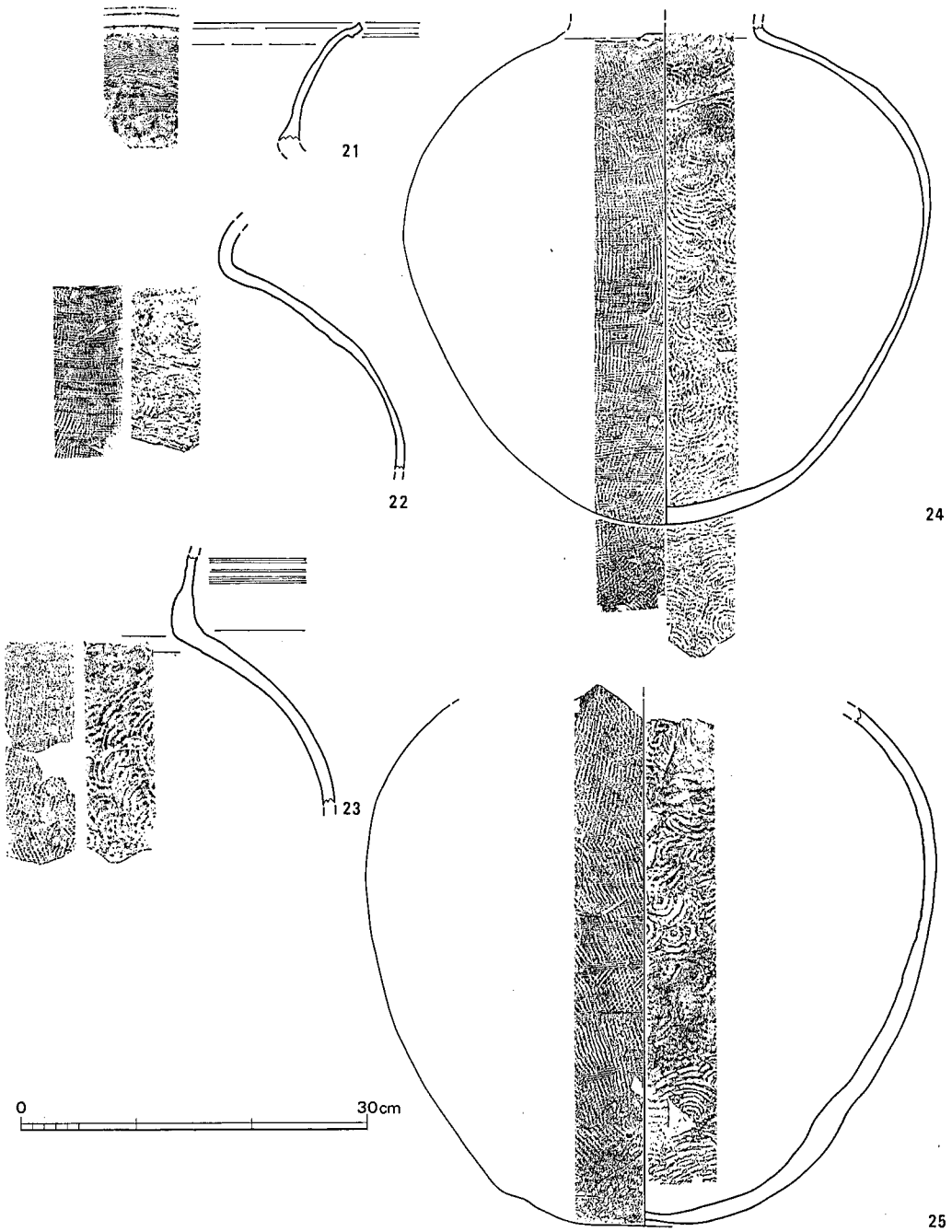
13



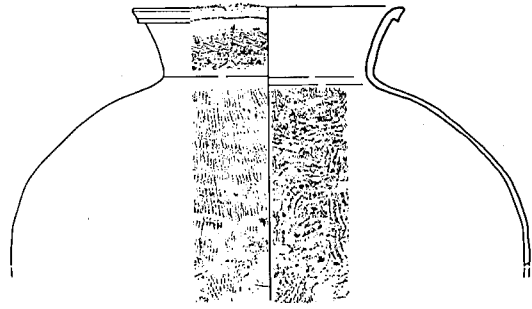
第17图 古寺1号墳出土土器実測図② (1/3)



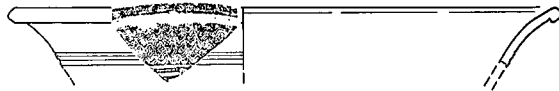
第18図 古寺1号墳出土土器実測図③ (1/3、20は1/4)



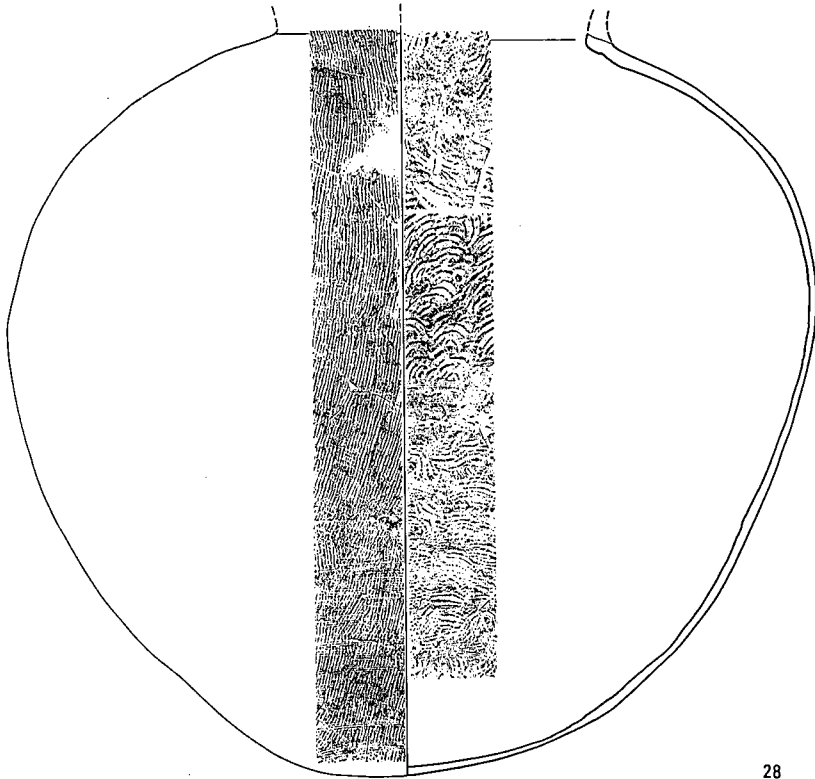
第19图 古寺1号墳出土土器実測図④ (1/6)



26



27



28



第20图 古寺1号墳出土土器実測図⑤ (1/6)

壺 (14・16・19) 14・15は玄室の第二次床面で検出したものでセットになると思われる。16・19は供献土器で19は甕20の東側に検出した。14は口径10.8cm、器高3.3cmを測る。焼成は良好で淡灰色～黒灰色を呈する。15は口径8.3cm、器高10.2cmを測る。焼成は灰色～暗灰色を呈し、外面に自然釉が認められる。16は口径11cm、現存高15cmほどを測る。焼成は良好で灰色～暗灰色を呈する。19は口頸部が打ち欠かれた状態で出土したが、口径16.1cm、器高23.6cmに復原される。焼成は良好で淡灰色～灰色を呈する。

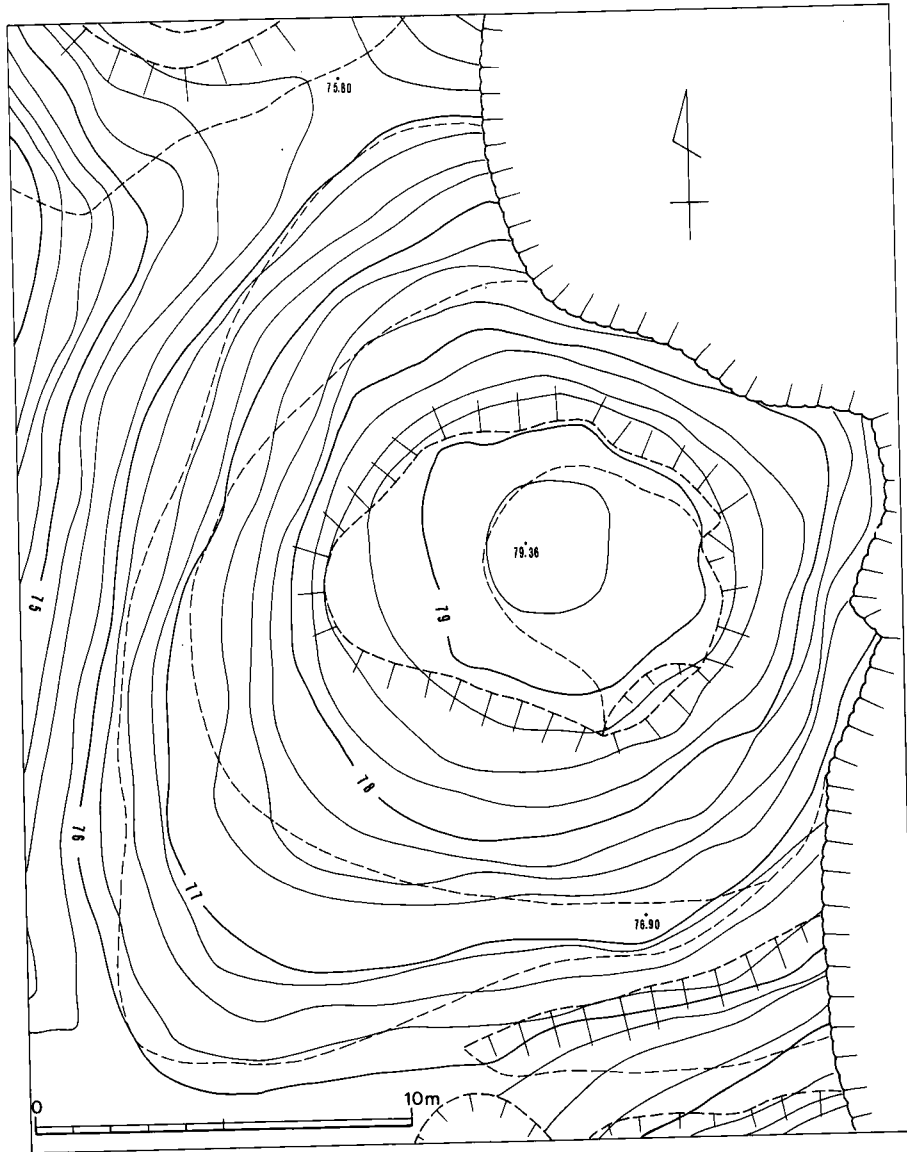
甕 (20～28) すべて供献土器で、20・24・26・28は第9図のように意識的に破砕された状態で出土したが他は墳丘の流出土中から出土した。20は口径18.1cm、器高33cmに復原される。焼成不良で淡青灰色～淡黄灰色を呈する。21～23はおのおの別個体の破片である。24は胴部最大径45cmほどを測る。焼成良好で暗灰色～黒灰色を呈する。26の破片は多量にあるが胴部下半が接合しない。口径22cm、現存高20.5cmほどを測る。焼成良好で暗灰色～黒灰色を呈する。27・28は同一個体であるが接合しない。図上の推定復元によれば、口径44cm、器高75cmほどになる。焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。

2. 古寺2号墳

(1) 墳丘 (図版2・10、第21～23図)

樹木の伐採後の観察では径22～23m、墳丘の高さは3.5mほどの円墳状を呈し、墳丘の南西側に前方部状の張り出しを認めることができたが墳丘盛土の流出である可能性も考えられた。墳頂部に東西10m、南北7.5mほどの平坦部があり、側面観は截頭円錐形を呈し、墳丘の東・北側の墳裾部は採土のため削られていた。墳頂部に盗堀壕は認められず、古墳の形状・規模から当初の予想とは異なり、古い古墳であろうと考えた。

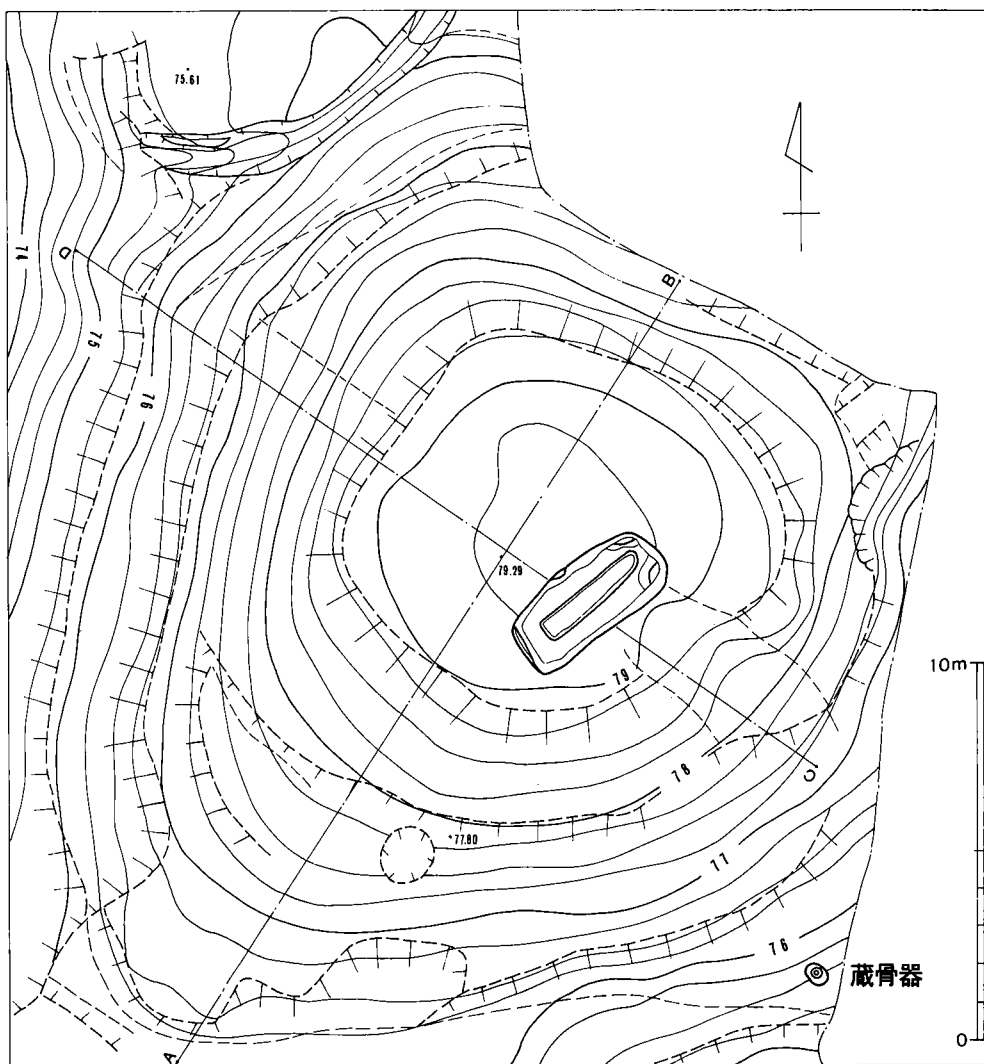
墳丘の中心を通る十文字のトレンチを設定し、盛土の状況の確認と主体部の検出を目的に調査を開始した。その結果、主体部の確認が次の課題として残った。よって、土層図作成後、墳丘の盛土をすべて除去し、主体部の検出に努めた。地山が雲母片岩の風化過程のもので、埋土も同様のものであり、折からの炎天下のため主体部の検出には苦慮した。若干の降雨とボーリング棒による探査により、墳丘中心部から東側に片寄った部分でどうにか主体部を検出することができた。しかし、本主体部の位置が墳丘の中心から東側にずれているため、西側にさらに1基の主体部が存在する可能性があり、第2の主体部を求めて調査を続行したが検出することができなかった。気球写真撮影後、ダメ押しの特レンチをいれ、ボーリング探査も実施したが第2の主体部は存在しなかった。よって、当初から意識的に墳丘中心から



第21図 古寺2号墳墳丘測量図（調査前、1/200）

東に片寄った部分に主体部を造り、第2主体部の構築を予測していた可能性もある。しかし、結果的には1基の埋葬施設しか造らなかったと推測される。

墳丘は地山削りだしによるもので、先述のように盛土はわずかである。墳丘の平面形は南西側にわずかな造り出しを有する帆立貝状の不整形な前方後円形を呈する。北・東側の墳裾部を削り取られているので不正確であるが、おおむね主軸長30m、後円部径25m、前方部長5mである。墳頂部の平坦面は直径10mほどの不整形円形をし、後円部の高さは3.5mである。

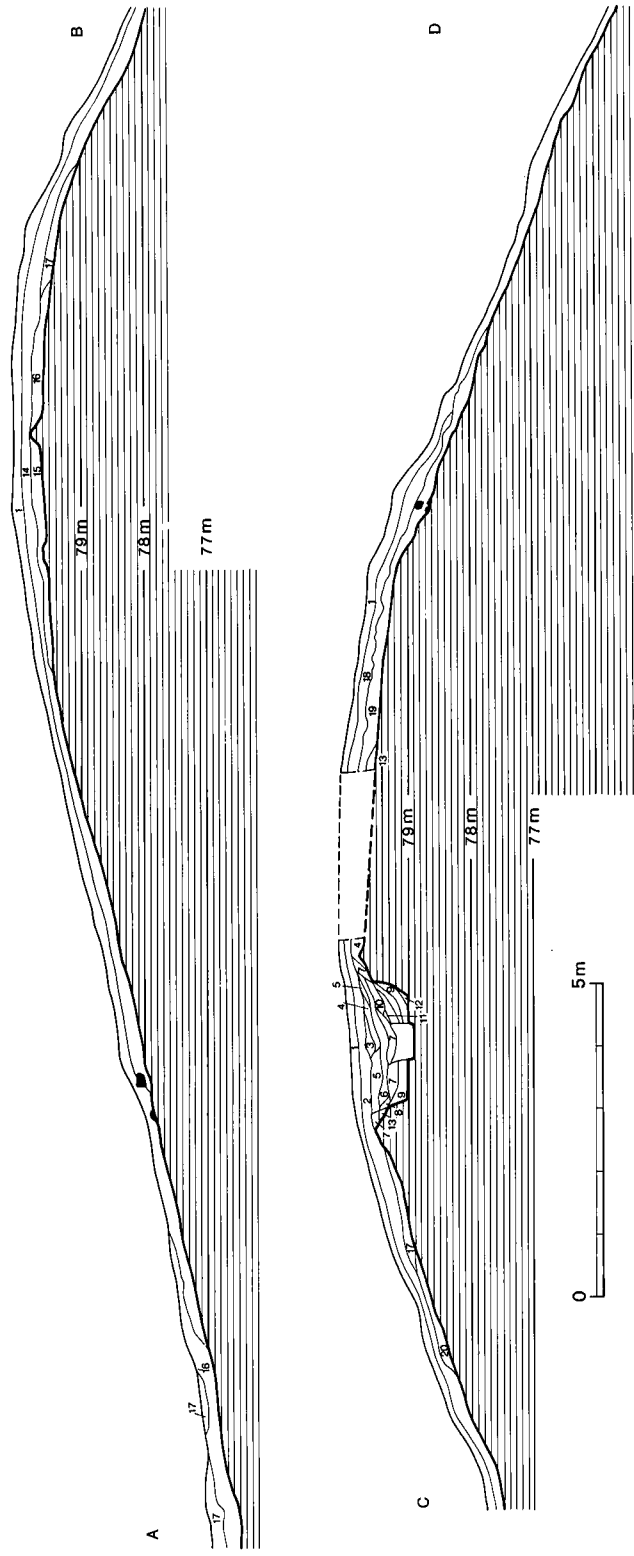


第22図 古寺2号墳墳丘測量図（調査後、1/200）

なお、墳丘北西部の墳裾は1号墳の周溝により切られ、前方部前面にはわずかな溝がある。

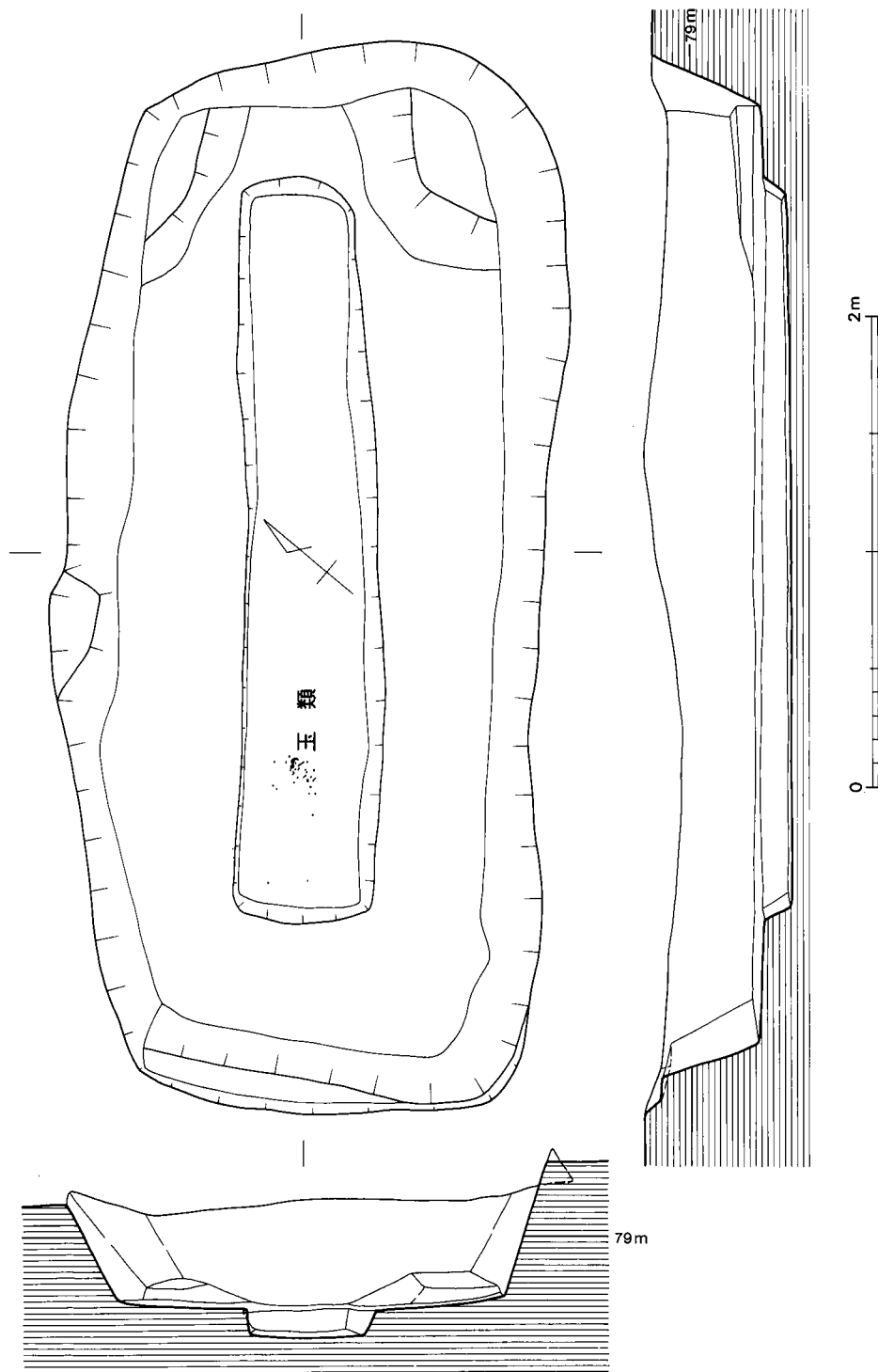
(2) 埋葬施設（図版10・11、第24・25）図

先述したように、墳丘中心より、東側に片寄った部分に検出した。南北に長い掘り方の主軸は墳丘主軸にはほぼ平行する。掘り方は墳丘中心側に若干の盛土を行った後に掘り込まれている。掘り方は二段掘りで、一段目は上端で長軸4.48m、短軸2.03m、深さ0.4～0.5m、二段目は長軸3.15mで、頭位(南)側の幅0.6m、足位側は0.48mで深さは10cm前後である。土層図

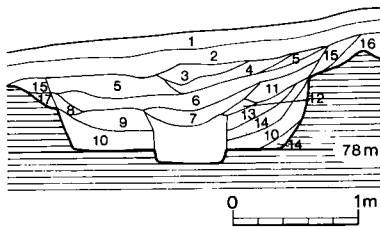


- 1. 表土
- 2. 小礫・砂粒混黄褐色土
- 3. 砂粒混黄灰褐色土
- 4. 砂粒混黄灰褐色土
- 5. 砂粒混黄色土
- 6. 砂粒混明黄灰色土
- 7. 礫混黄灰色土
- 8. 礫混赤褐色土
- 9. 礫混明黄灰色土
- 10. 礫混黄茶灰色土
- 11. 黄茶灰色土
- 12. 砂粒混黄茶灰色土
- 13. 砂粒混赤褐色土
- 14. 砂粒混灰黄褐色土
- 15. 砂粒混明茶褐色土
- 16. 黄灰色砂质土
- 17. 赤茶褐色土
- 18. 茶褐色砂质土
- 19. 礫混茶褐色砂质土
- 20. 砂粒混暗灰色土

第23图 古寺2号墳填丘土層図 (1/120)



第24図 古寺2号墳内部主体実測図 (1/30)

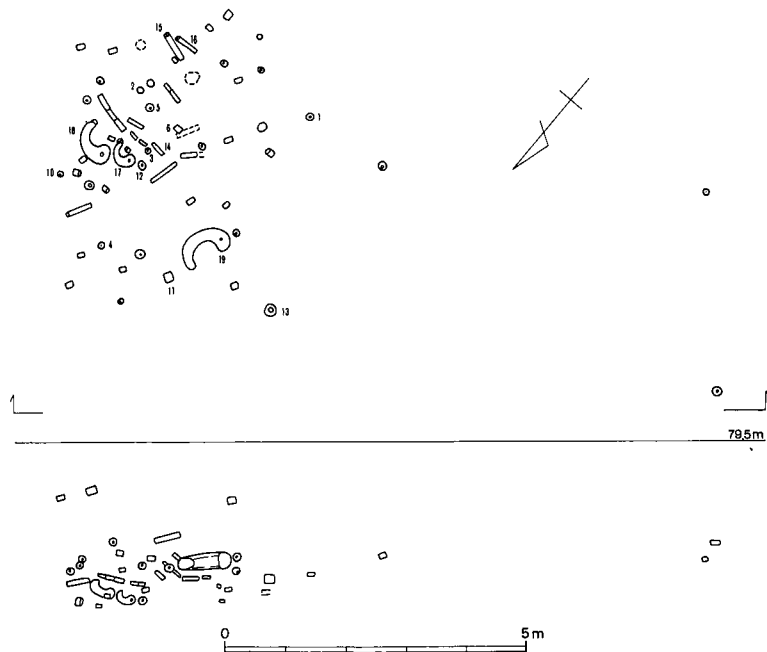


- | | |
|----------------------|----------------|
| 1. 表土 | 10. 地山礫混り明黄灰色土 |
| 2. 地山小礫砂粒混り黄色褐土 | 11. 礫混黄茶灰色土 |
| 3. 地山の砂粒混り黄灰色褐土 (炭含) | 12. 黄茶灰色土 |
| 4. 地山の砂粒混り黄灰色土 | 13. 砂粒混り黄灰色土 |
| 5. 砂粒混り黄色土 | 14. 砂粒混り黄茶灰色土 |
| 6. 砂粒混り明黄灰色土 | 15. 小礫混り黄灰色土 |
| 7. 礫混り黄灰色土 | 16. 砂粒混り黄灰色土 |
| 8. 地山礫混り赤色褐土 | 17. 砂粒混り赤色褐土 |
| 9. 地山礫混り黄灰色土 | |

第25図 古寺2号墳内部主体土層図 (1/30)

(3) 遺物の出土状態 (図版11、第26図)

二段目堀方の南側から多量の玉類が出土した。棺外に副葬されたもので、棺材が腐食して棺内に落下したためかなり広範囲にわたって埋土中から出土している。よって原位置を移動しており、玉の出土位置から本来の着装状態を明らかにすることはできない。



第26図 古寺2号墳遺物出土状態実測図 (1/10)

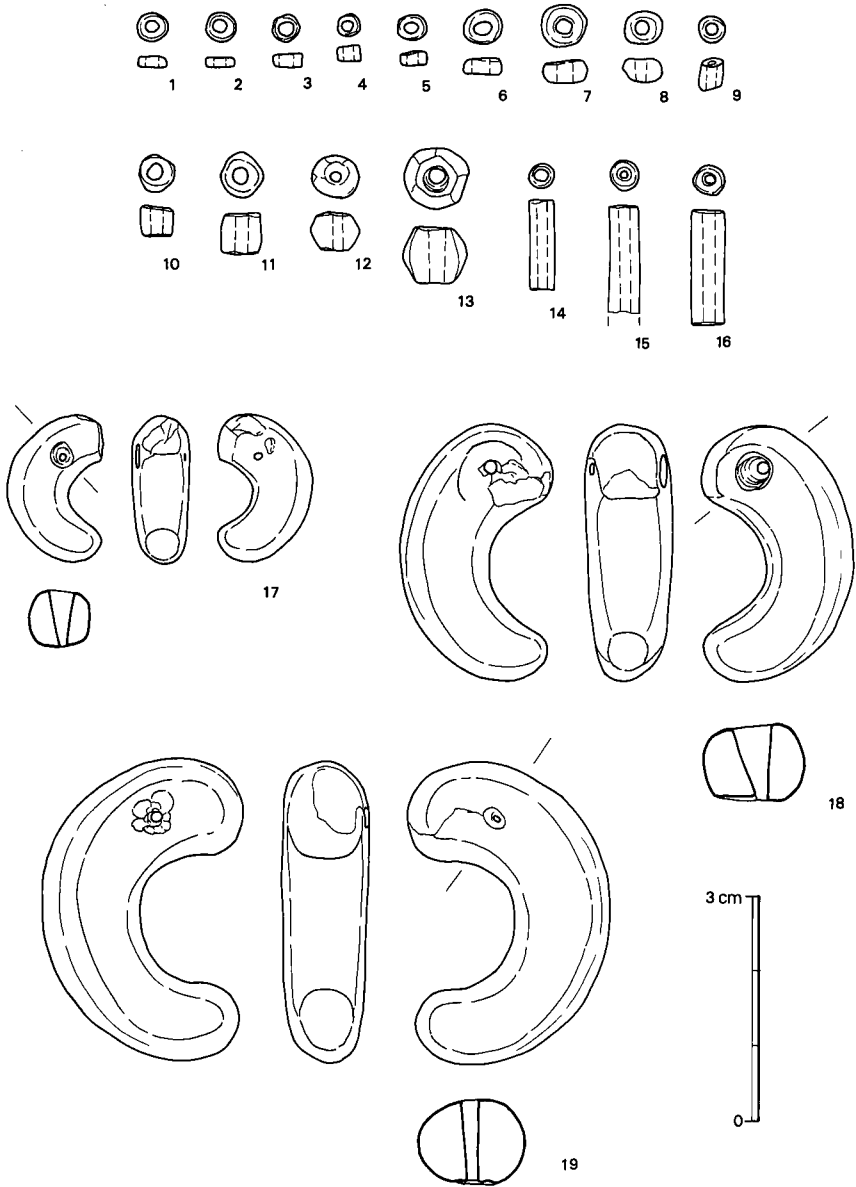
で明らかのように、埋葬主体は木棺で棺の外側は掘り方を掘削した時の土で裏込めされ、棺の深さは少なくとも20cmはあったと考えられる。また、一段目の掘り方の北側両隅は地山を掘り残し、一段高くなっている。

木棺は、二段目の掘り方の規模などから、長さ3m、幅50cm前後、高さ20cm以上と推定される。この部分の埋土には赤色顔料が多量に含まれ、棺内面には赤色顔料を塗布していたことがわかる。また、堀方の南側から多量の玉類が出土し、堀方の幅も南側が広く頭位は南側であろうと推測される。なお、側板等を設置する溝は存在しないので、底板の上に側板を設置した可能性がある。

(4) 出土遺物 (図版36、第27図)

副葬品はすべて玉類である。栗玉・小玉・管玉・勾玉で以下に種別と出土数を記す。

- ・ガラス製栗玉 スカイブルー 7個 (+)
- ・ガラス製小玉 スカイブルー 68個 (+) コバルトブルー 29個 (+)
茶色 39個 (+) 青緑 5個 (+)



第27図 古寺2号墳出土玉類実測図 (1/2)

淡鉛空色 22個 (+)

- ・緑泥片岩製小玉 3個 (+)
- ・メノウ製丸玉 3個
- ・ガラス製管玉 15個 (+)
- ・碧玉製管玉 2個
- ・硬玉製勾玉 3個

これらの各種の玉種については、特にガラス製管玉は風化が進行しており、また小粒の砂利を含む粘質の埋土中から検出したため、取り上げ時に破損したものが含まれ正確な数は明らかにしがたい。

粟玉 図示していないが、径2mm前後のものである。すべてガラス製である。

小玉 (1~11) 径3mm強~6mmほどで、ガラス製 (2~11) は色・形・作りの面でバラエティに富む。2は15・16のガラス製管玉と同質で淡鉛空色を呈し、切り離す際の長短の相違により、前者は小玉に後者は管玉として使われたものである。径4mm、厚さ1mm強である。3~11は、3・4・11がコバルトブルー、5・10が茶色、6・7が青緑、8・9がスカイブルーである。

丸玉 (12・13) メノウ製である。表面は磨いているが、当初からの割れ傷が残っている。13と図示していない他の1個はやや赤味がかかっているが、12はメノウとしては淡い柿色である。12は径6.5mm、高さ5mm、13は同8mm、7.5mmである。

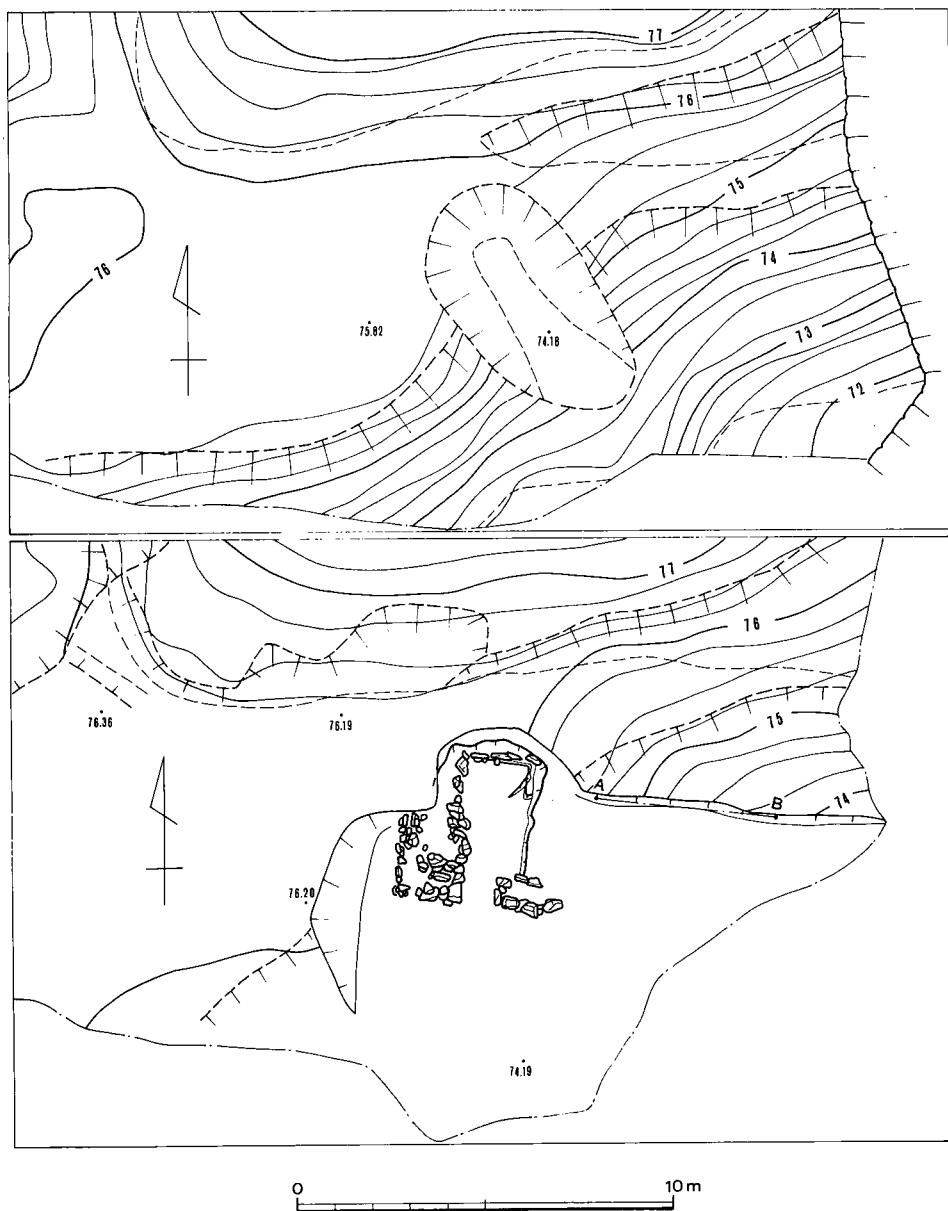
管玉 (14~16) ガラス製と碧玉製の二者があるが前者が量的に多い。14は碧玉製で径3.5mm、長さ11.5mmである。図示していないが他の一個の碧玉製管玉は径は同じで長さは6.5mmである。ガラス製の管玉は完形品の16では径4mm、長さ15mmである。15も16とほぼ同じ長さであろう。他のガラス製管玉は破損しているが、径は4mmほどである。

勾玉 (17~19) 3個ともそれぞれ大きさが異なり、大きいものほど石の質が良い。17は石の質が悪く白っぽい色を呈し、軟質でもろい。長さ19mmで一方から穿孔している。18は緑地に濃緑色の斑点が入る材質の石を使っている。長さ34mmで一方から穿孔している。19は淡緑の地に濃緑の縞が入る材質の石を使った優品である。長さ40mmで一方から穿孔している。

3. 古寺3号墳

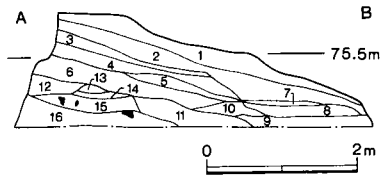
(1) 墳丘 (図版12、第28・29図)

樹木の伐採後の状況は、墳丘は全く残存せず、幅4m、長さ7m、深さ1mほどのくぼみがあるにすぎなかった。盗掘墳の可能性があるので、このくぼみの廃土作業を行った。その



第28図 古寺3号墳墳丘測量図（上一調査前、下一調査後、1/200）

過程で石材が少しずつ顔をみせ始めたので古墳の可能性が高いと判断して、調査区を拡張した。破壊された古墳であることを確認した後、2号墳南西側の斜面に墳丘観察用のトレンチを設定し、盛土の状況を観察した（土層図ポイントA-B：第28図下）。その結果、玄室奥壁と墳丘の中心がほぼ一致するならば、径10mほどの小規模な円墳であろうと考えられる。



- | | |
|---------------|----------------|
| 1. 砂粒子混黄褐色砂質土 | 9. 暗黄褐色弱粘質土 |
| 2. 黄褐色砂質土 | 10. 安黄褐色粘質土 |
| 3. 砂粒混黄褐色砂質土 | 11. 黄灰色砂質土 |
| 4. 黄灰色土 | 12. 黄褐色砂質土 |
| 5. 茶褐色土 | 13. 砂粒混黄褐色砂質土 |
| 6. 黄褐色弱粘質土 | 14. 砂粒多含黄褐色砂質土 |
| 7. 黄褐色土 | 15. 礫混黄灰色土 |
| 8. 暗黄褐色土 | 16. 礫混黄灰色砂質土 |

第29図 古寺3号墳丘土層図
(1/100)

存在した可能性もある。すなわち、後述のように閉塞に玉石を使用することは通常考えられず、現に閉塞石には割石が使用されており、この玉石は第二次床面の敷石であった可能性が高いと考える。

石室の閉塞は仕切石から約1m離れた部分から行っている。図のよに仕切石側は割石や大きめの川原石を使用しており、この外側の石室外にまで玉石が存在する。玄室床面の状態から床石を石室外に搬出したものと考えられる。

(3) 遺物の出土状態 (図版13、第30図)

石室の埋土を廃土中に須恵器の小破片が出土している。副葬土器の存在を示唆している。供献土器については不明であるが、先述の破片の存在はその可能性も否定できない。しかし、原位置を保つ土器資料はない。

副葬品としては鉄製品が6点出土している。原位置を保つものは皆無であるが仕切石の内外で出土している。前述のように、床面の敷石のほとんどが搬出されており、その際に副葬位置から大きく移動しているものと思われる。敷石上で検出したものは1点もなくすべて石室掘方の床面からの出土である。

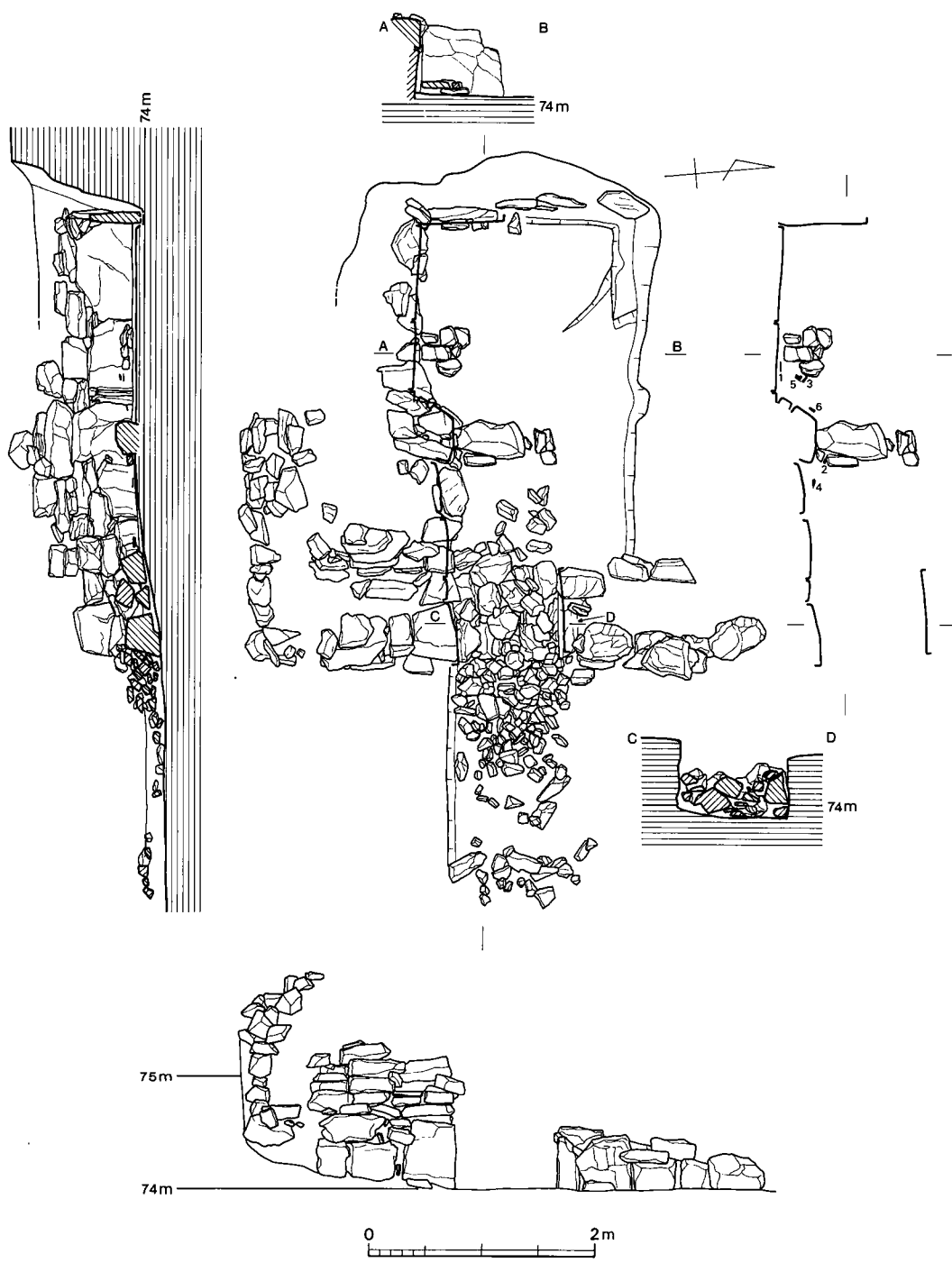
(4) 出土遺物 (図版37、第31図)

武器・農工具が6点出土している。武器は鉄鏃が4点、農工具は鉄斧1点、鎌1点である。原位置を大きく移動しているため完形品はないが、鎌を除いておおむね原型を推測できるものが多い。

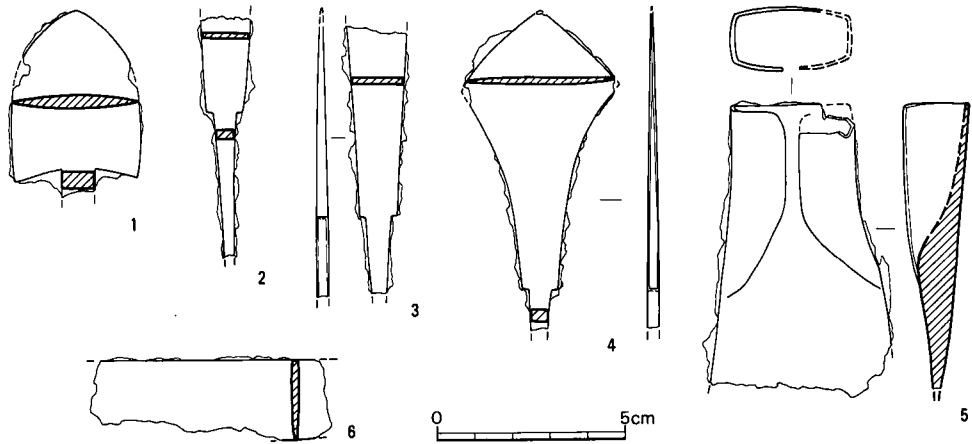
ただし、石室前面側の墳丘斜面～裾部の壁状の石積は直線をなしており、石室全面側は通常の円墳のように円弧をなさないものであろう。

(2) 石室 (図版12・13、第30図)

単室の横穴式石室である。石室は大きく破壊されており、羨道の一部を除いて右壁側は腰石すら残らない。しかし、左壁と腰石の掘り方や仕切石の配置状態から判断して、石室は床面で主軸長3.9m、玄室長1.75m、同幅1.4m～1.5mほどである。床面は10cm×20cm大ほどの板石を敷いていたと思われ、左壁寄にその痕跡が残っている。また1号墳のように2次にわたる床面が



第30图 古寺3号墳石室実測図 (1/60)



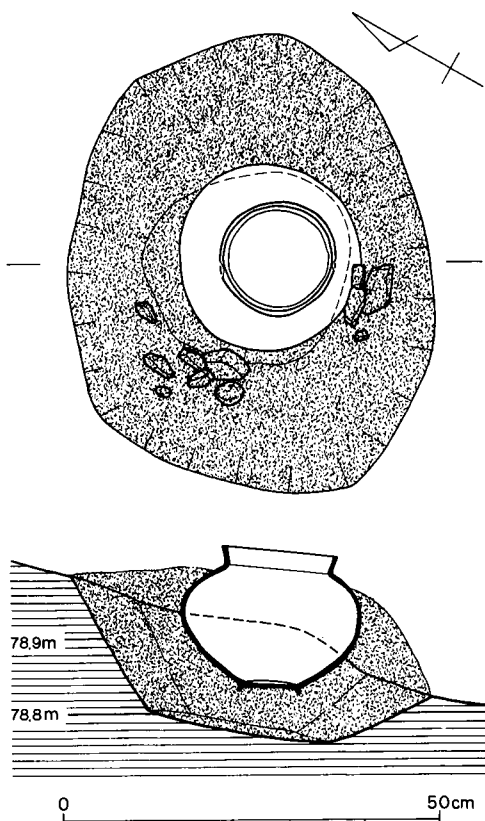
第31図 古寺3号墳出土鉄製品実測図 (1/2)

鉄 鎌 (1~4) 4点とも平造の大型品である。

1は現存長5cm、身の長さ4.5cm、最大幅3.5cmを測るが茎はそのほとんどを欠失し形状は不明である。2・3は同一形式の鉄鎌である。3は現存長7.1cmであるが側面観から推定復原すると、欠失した鎌身の先端部を含めて身の長さは5.5cm、先端部幅1.8cmほどと推測される。2も3と同様であらう。4は茎のほとんどを欠失するが現存長8.4cm、鎌身長7.4cmである。刃は先端の山形部分にのみ作り出される。細身の鉄鎌は破片すら出土していない。

鉄 斧 (5) 袋部上端の1/3ほどと刃部を欠く。袋部から身への形状はほぼ直線的で肩は明瞭ではない。袋部の俯瞰は腹の出た長方形を呈し、横幅3.2cm、縦幅1.7cmほどである。現存長7.7cmであるが斧身の断面図から、復原長は8.5cmほどと思われる。

鉄 鎌 (6) 身の部分の破片資料である。幅と厚味から鎌と判断した。現存長6.4cmで、幅は2.3cmほどである。



第32図 蔵骨器出土状態実測図 (1/10)

4. 蔵骨器

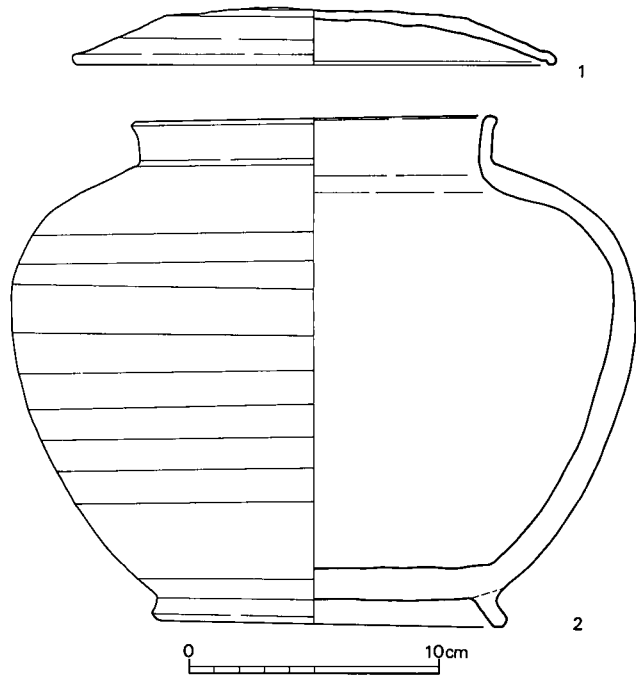
(図版14・37、第32・33図)

2号墳の南東墳裾部に検出した。蓋については32図に表現していない。発見当時、蓋が割れて散乱しており、出土状況が正確でなかったことによる。しかし、33図のままに蓋をかぶせれば当初の姿になるうと考えられる。

蔵骨器は長軸62cm、短軸48cm、深さ23cmほどの掘り方内に埋置されている。掘り方と蔵骨器の空間は木炭を充填し玉石を11個埋置する。蔵骨器

は掘り方の底に5～6cmほど木炭を詰め込んだ後に設置され、さらに木炭を充填したものである。器の中は火葬骨で一杯であった。

蔵骨器自体は須恵器の短頸壺である。蓋は須恵器の坏蓋を使用しているため両者の口径は合わず、蓋のほうが大き目である。蓋は口径19.3cm、器高2.3cmである。偏平な蓋で口縁端部はわずかに折り曲げ、内側に沈線が巡る。天井部外面はヘラ削りを行う。外面は灰をかぶり、内面はいぶされたように黒変する。重ね焼きのためであろう。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好である。壺は全体に丸味を帯び口径17.7cm、胴部最大径25cm、器高20.3cmで、口頸部・高台部ともしっかりとした作りである。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好である。内面は淡青灰色～淡緑灰色、外面は淡緑灰色～暗茶灰色を呈する。



第33図 蔵骨器実測図 (1/3)

5. 小 結

古寺A支群は既述のように3時期の遺構が存在し、各々が個性をもった遺構であった。2号墳の評価は判断の別れるところであるが、造墓手法は地山削り出しでわずかな盛土を行うもので古い手法を踏襲する。構築時期は四世紀代のどこに求めるかは今後の課題である。

第3節 古寺B支群の調査

(図版15・16、第6・34図)

ほぼ東西に軸線を置く丘陵の鞍部に構築された古墳群でA支群とは細い谷を挟んで隔てられている。丘陵の南北斜面は険しい危険なほどの斜面である。立地面では広い平野に面したA支群がB支群に勝る。しかし、後述するように調査の結果によれば両支群の六世紀代の古墳に際立った相違を認めることは困難である。たしかに盗掘がひどく副葬品に不明な部分を残すが、構築時期、墳丘規模・石室構造において両者には親しい関係を認めることができそうである。

B支群ではA支群と同様に四世紀代の古墳1基(4号墳)が存在する。東面する不整形な前方後円墳状のものでA支群の2号墳のように墳丘は目立たない。また、立地面と被葬者の質的な差異によるのか、4号墳ではまったく副葬品は検出されなかったし、埋葬施設の規模・構造にも差が見られた。

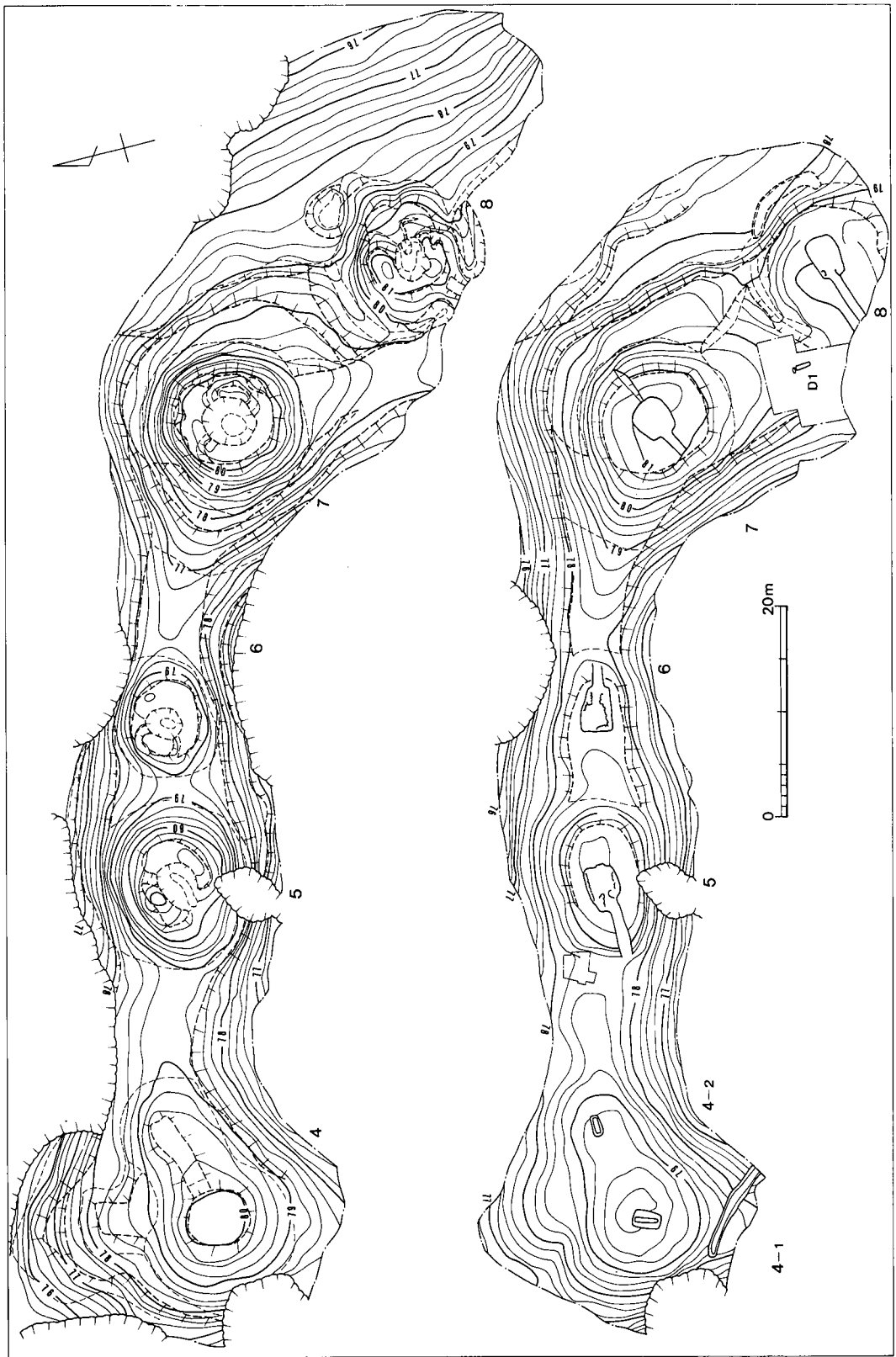
六世紀代の古墳は路線内に4基、8号墳南側の路線外に2基、総数で6基存在する。これらは2基ずつ接近して構築されており、2基一対からなる家族墓のようである。対となる2基には墳丘規模に差を認めることのできる。古墳のこのようなあり方はA支群とは大きく異なる。古墳以外の遺構については8号墳の西側に土壙墓を1基検出したが、A支群で検出したような蔵骨器は存在しなかった。

1. 古寺4号墳

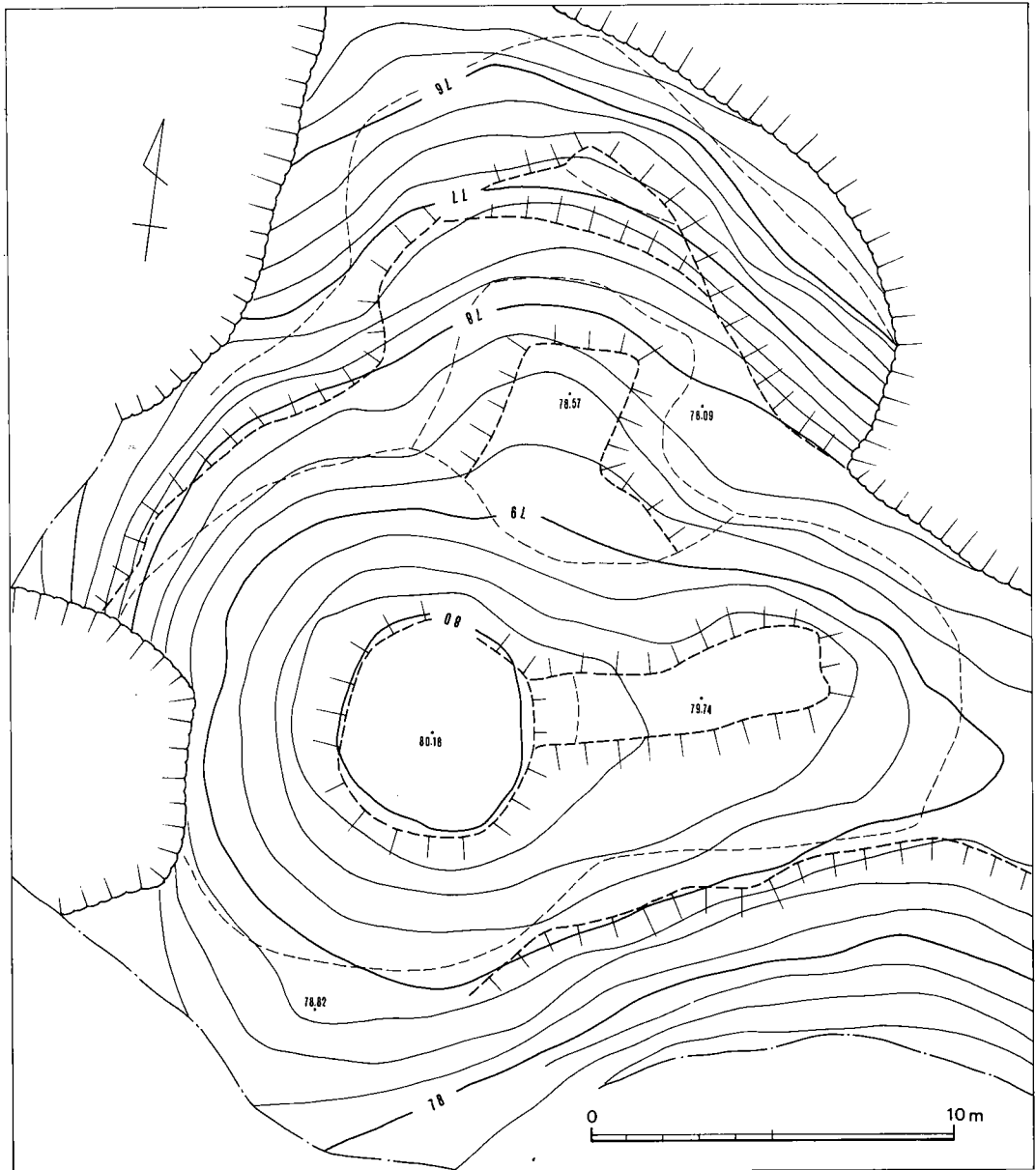
(1) 墳丘(図版16・17、第35・36・37図)

樹木伐開後の見かけの状況では低墳丘墓のように見受けられた。さらに清掃して詳細な観察と墳丘測量の結果、主軸長23mほどの東面する不整形な前方後円墳状を呈していた。したがって、前方後円墳として調査を開始し、図のように直交するトレンチを墳丘の中央に設定した。トレンチ調査の結果、2基の埋葬施設を確認し、墳丘盛土はごく薄いことが判明した。土層図作成後、墳丘盛土を除去し埋葬施設のプランを確認し遺構検出を行った。

本墳はA支群の2号墳と同様に地山を削り出して墳丘を構築するが、2号墳と大きく異なる点は地山削り出しによる墳丘規模の差である。すなわち、2号墳では地山を削り出して径30m、高さ3m余の墳丘を構築しているが、4号墳では丘陵鞍部の旧地形を利用してわずかに整形するだけで高さ1m余の不整形な前方後円形状の墳丘を形造るに過ぎない。両墳とも墳丘の盛土は50cm前後であるため地山削り出し時の規模の差がそのまま結果的に墳丘規模の差となって現れる。

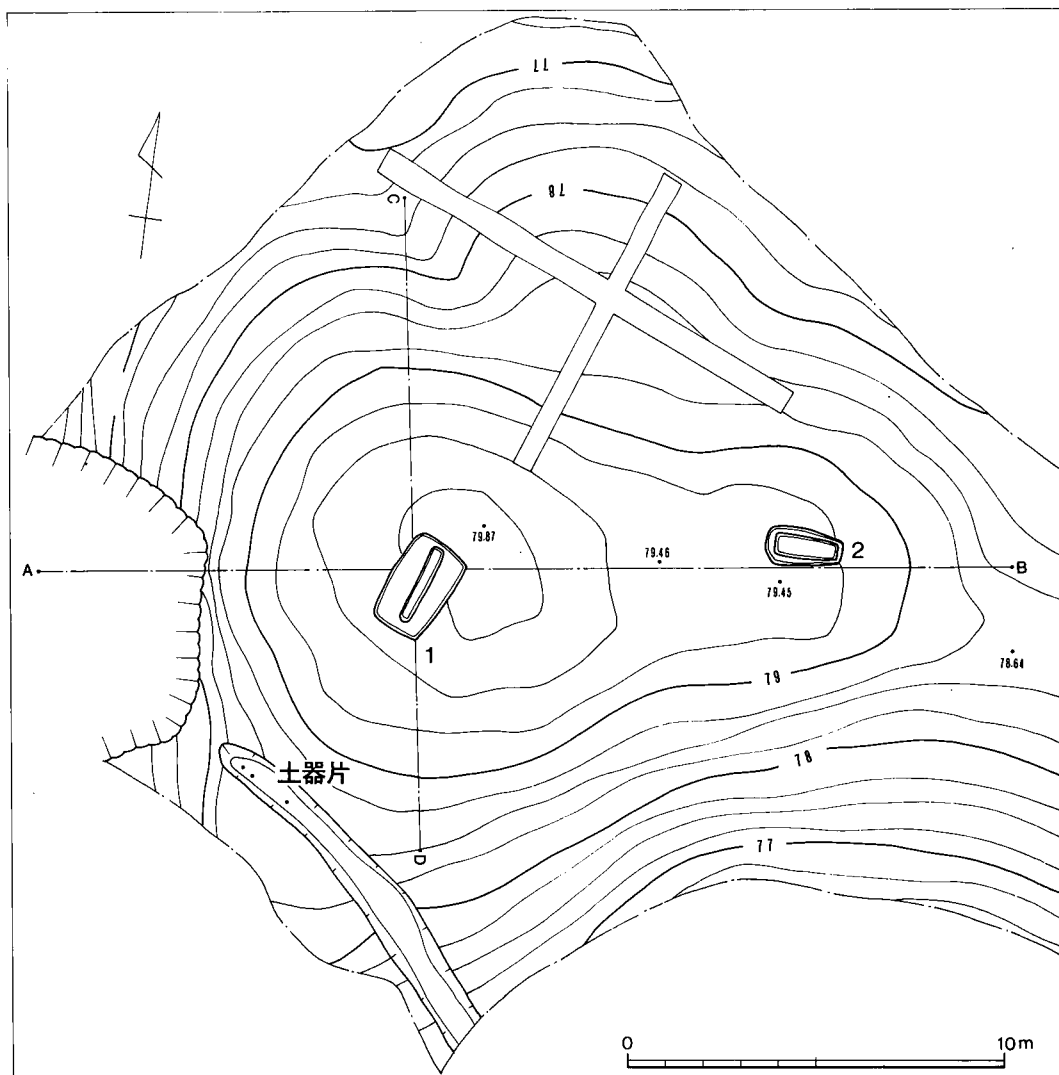


第34图 古寺古墳群B支群全体図 (1/600)



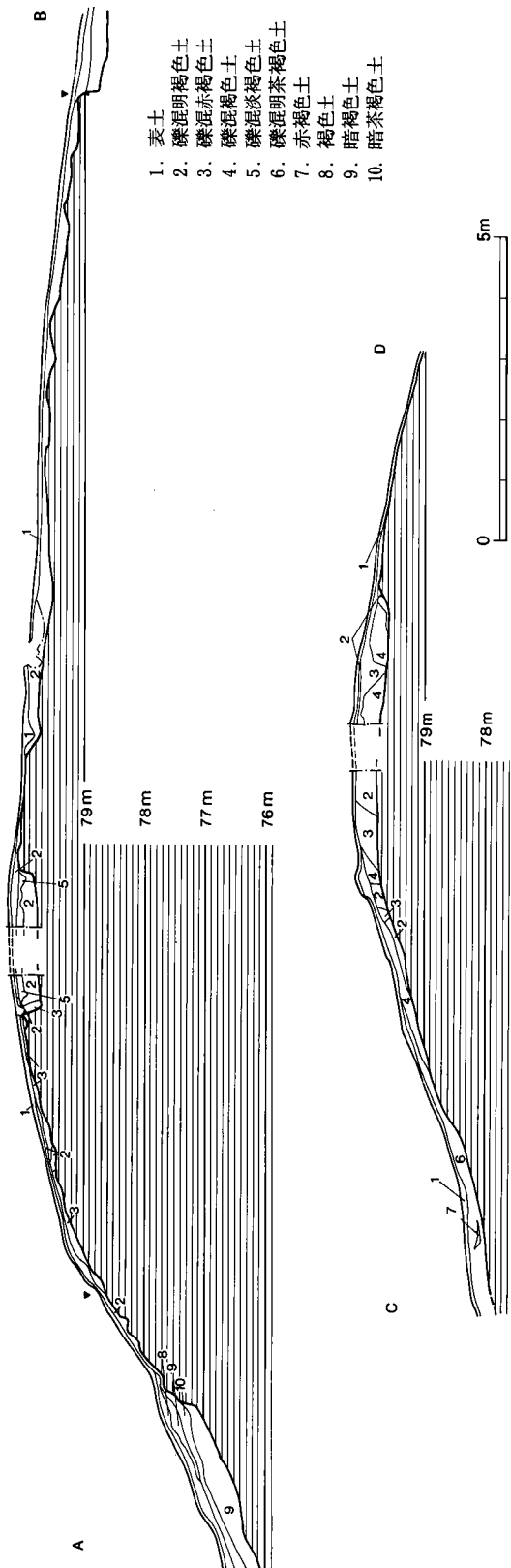
第35図 古寺4号墳墳丘測量図（調査前、1/200）

盛土を除去した後の状況と土層図から、本墳は不整形な形状ではあるが東面する前方後円墳だと考えられる。地山を整形した範囲内の後円部中央と前方部の主軸線に沿った部分に各1基の埋葬施設があり、その配置状況からしても本墳を前方後円墳と考えてよからう。また墳丘主軸の土層図でわかるよう前方部先端と思われる部分は地山をほぼ垂直にカットし、後



第36図 古寺4号墳丘測量図 (調査後、1/200)

円部の墳裾で傾斜が変換する(第37図▼印の範囲)。両▼印の部分を墳裾と推測すると、主軸長20mほどである。後円部径10m、高い1m強、前方長10m、高さ0.8mほどで、地膨れ程度の目立たない古墳である。後円部の北側に造出状のものが存在したが調査の結果、遺構は存在しなかった。また、埋葬に際しての何らかの施設かとも推測されるが、土器片等も検出されなかった。後円部の南側に北西-南東に走る溝を検出した。古墳の裾を巡る状況ではなく、また墳丘の主軸とも斜交する。しかし埋土中から古式土師器が出土し、この時期の遺構が他に認められないので、溝は4号墳と何等かの関係があろうと推測される。



第37図 古寺4号墳墳丘土層図 (1/120)

(2) 埋葬施設 (図版18、第38図)

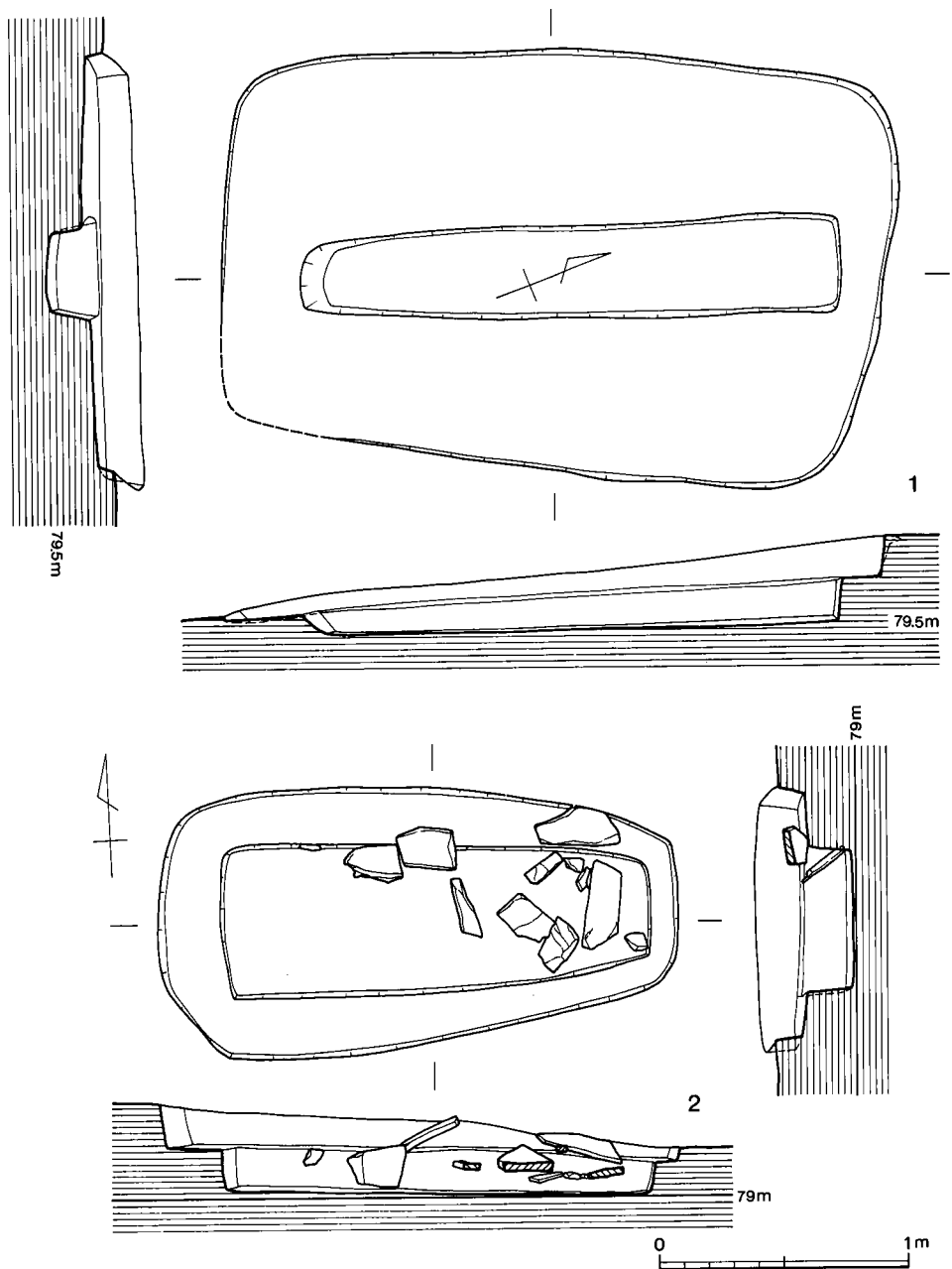
後部部に1基(1号)、前方部に1基(2号)の計2基の埋葬施設を検出した。1号は主軸線に斜交するが2号は主軸線に沿っている。墳丘が削平されているため、遺存状況は極めて悪い。

1号主体 プランが隅円長方形を呈する二段掘の掘り方を検出した。掘り方の規模は一段目が主軸長2.66m、幅1.7m、深さは最深部で16cm、二段目は主軸長2.15m、幅50~40cm、深さは最深部で18cmである。二段目掘り方の床面に木棺の側板を設置する溝の掘り込みはなかった。頭位は北側であろう。副葬品は全く存在しなかった。

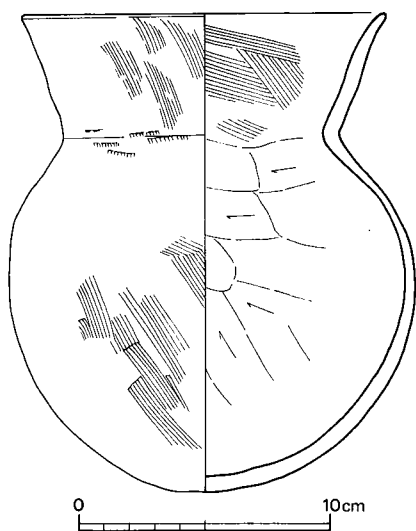
2号主体 略長方形プランを呈する二段掘の掘り方で、一段目は主軸長2.08m、幅1mほど、深さは最深部で18cm、二段目は同じく1.72m、0.6mほど、20cmである。

二段目掘り方内に割れた板石が転落しており、これは棺の石蓋と考えられる。二段目掘り方の床面には木棺の側板を設置する溝は存在しなかった。二段目の掘り方が幅広いことから底板の上に側板を設置した木棺の存在を考慮することもできる。しかし、積極的な根拠はない。頭位は西側であろう。

副葬品は全く存在しなかった。



第38図 古寺4号墳埋葬施設実測図 (1/30)



第39図 古寺4号墳出土土器実測図 (1/3)

(3) 出土遺物 (図版17・37、第39図)

先述したように墳丘南側の溝から土器が出土した。溝底から10cmほど浮いて、横に倒れた状態で検出した。口頸部を一部欠くが、口径14.5cm、器高19.1cm復原できる。体部内面はヘラ削りされるが他の部分はハケ目調整を施す。胎土には1～3mmの砂粒を含み、焼成良好で淡茶色を呈する。

4号墳と溝の関係が今一つ不明確であり、この土器の性格については不明である。

2. 古寺5号墳

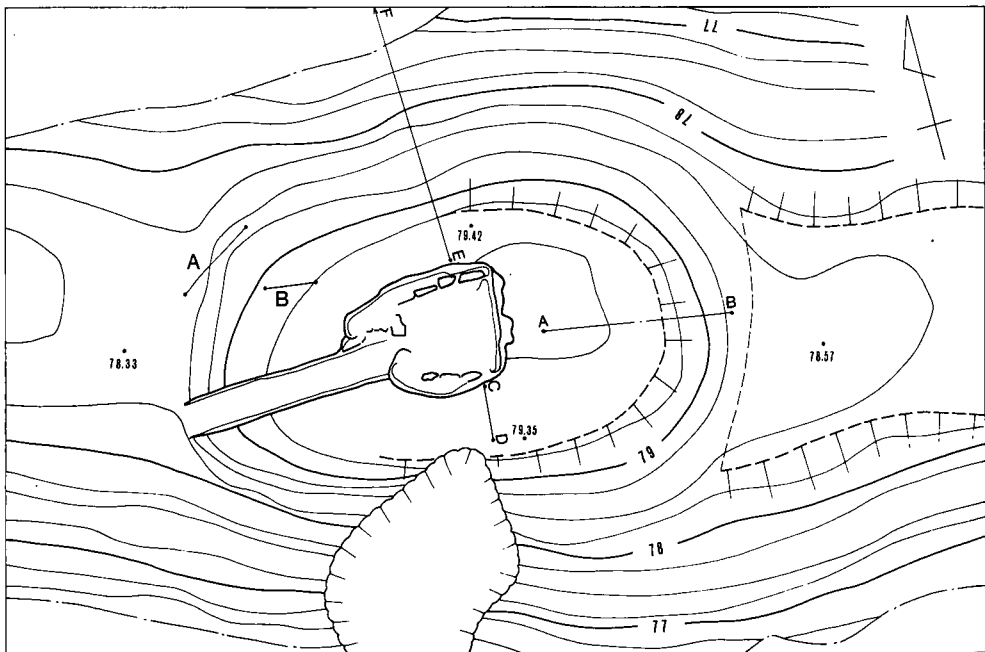
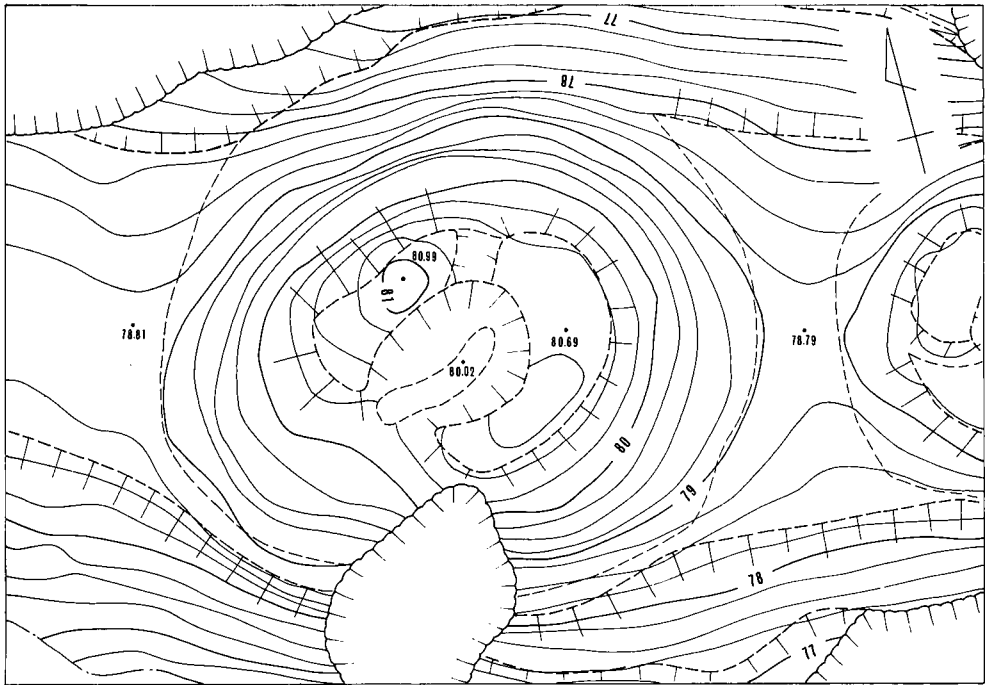
(1) 墳丘 (第40・41図)

樹木の伐採後、7号墳とともに目立った存在であった。細い丘陵の尾根を目一杯に利用して構築されているため盛土は南北の斜面に流出し、古墳自体が斜面を転げ落ちそうに見えた。東隣の6号墳とは2mしか離れておらず、墳裾は接するばかりである。見かけの墳丘は東西径16m、南北径13m、高さ2mほどの円墳であった。墳頂部には径6m、深さ1mほどの盗掘墳が存在した。

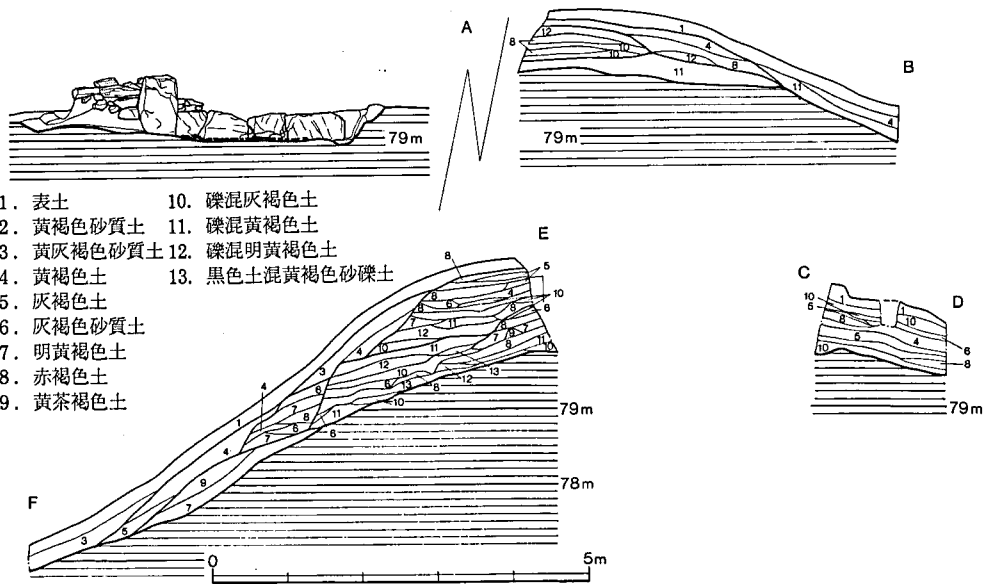
調査は盗掘墳の清掃から開始した。大木の根と転落した大石の除去に苦慮したが石室床面を検出後、墳丘に土層観察用のトレンチを設定し、墳丘の切断を行った。盛土の状況は斜面側では、墳丘の流出を防ぐため丁寧に言い、尾根筋にあたる石室背後のトレンチでの盛土の状況は比較的雑であった。第41図E-Fは石室北側斜面の土層であるが、版築状に丁寧に土盛した状況がわかる。同A-Bは石室背後の尾根筋側の土層であるが、両者の積み方の差は歴然としている。

土層図作成後、墳丘盛土をすべて除去した。その際に墓道の北側に供献土器群を検出した。墳丘盛土除去後に検出した地山整形の状況は尾根筋に沿って、長径15m、短径11m、高さ1mほどの楕円形の削り出しを行い、その中心と石室奥壁が一致するように石室掘方および墓道を掘り込んでいる。

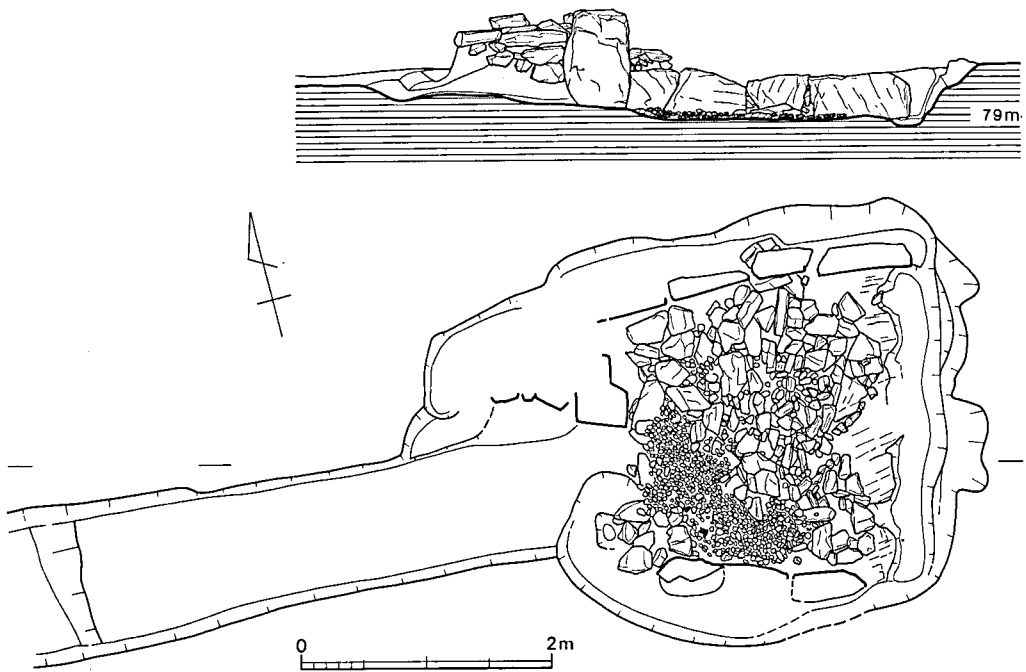
5号墳ではA支群の1・3号墳に見られたような石室掘り方のすぐ外側の列石や石室前面の石垣状の遺構は存在しなかった。



第40図 古寺5号墳丘測量図（上一調査前、下一調査後、1/200、A・Bは供献土器群）



第41圖 古寺5号墳丘土層圖 (1/100)



第42圖 古寺5号墳石室實測圖 (1/60)

(2) 石室 (図版19、第42図)

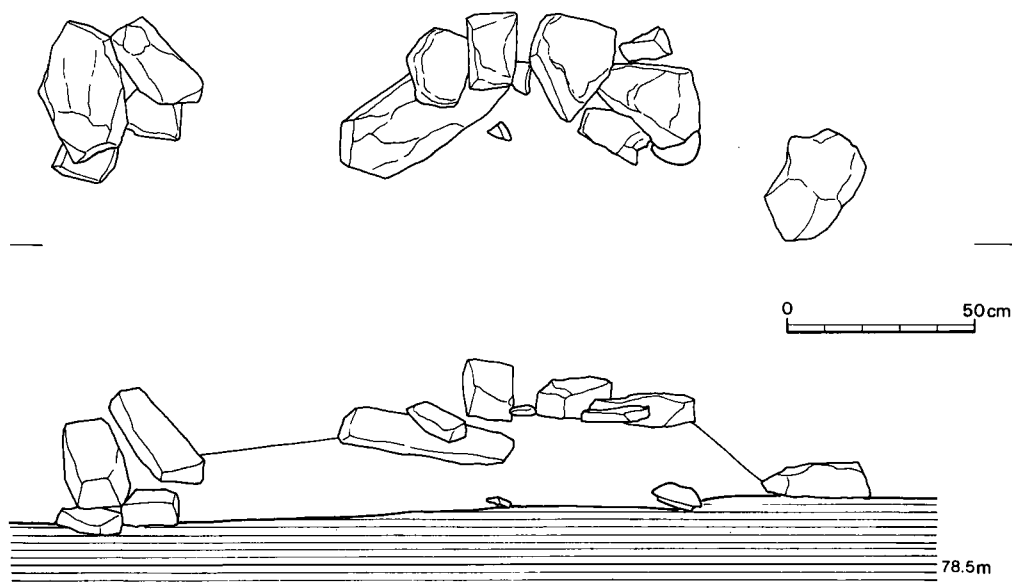
岩盤の地山に穿った掘り方内に構築された単室の横穴式石室である。石材採取により、石室は大きく破壊され玄室の腰石は一部しか遺存しない。床面も荒らされて第一・二次床面の敷石も旧状をたもたない。

腰石の掘り方と腰石から、石室は主軸長3.2m、玄室の主軸長2.05m、同幅2.4m前後を測り、玄室のプランは奥壁側が前壁側よりも広く、正方形に近い羽子板状を呈する。玄門から外側の左壁の石積は羨道というよりも前庭的でやや「ハ」字形に開き、壁の基底部分は地山面から浮いており天井石の架構に耐えない。床面は2層あり、第一次床面は20cm前後の割石を敷きつめ、第二次床面は2～5cmの玉石を第一次床面の直上に敷いている。副葬品はこれら両次の床面から出土するが、床面が荒らされておりどの床面に伴うものか特定できない。

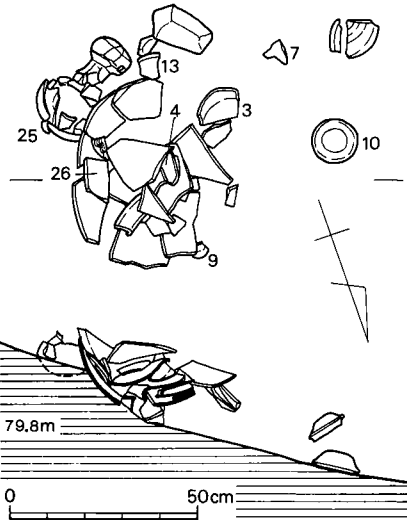
(3) 遺物の出土状態 (図版20・21、第43・44図)

玄室から耳環・玉類の装身具、鉄鏃、刀子等の鉄製品と土器が、墓道北側の墳丘盛土下から供献土器群 (A・B群) が出土している。副葬品については先述のように原位置を移動して玉石間や割石上から不規則的に出土している。

供献土器群はA・B群に分けて図示したが本来はB群にあったものが墳裾部のA群としたところまで転落した可能性が高い。A群周辺で出土した甕の破片がB群の甕と接合するからである。また、整理中に混乱しており、取り上げ時の土器番号が不明なものが存在するので



第43図 古寺5号墳供献土器A群出土状態実測図 (1/20)



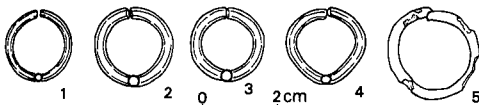
第44図 古寺5号墳供献土器
B群出土状態実測図 (1/20)

以下の説明には限界があり、43・44図に土器実測図番号(第48～50図)を付せないものが含まれる。

供献土器A・B群では原位置を保つものは11個体ある。甕・壺・坏・等である。坏の蓋・身が多く他の器種はおおむね1個体ずつである。A群では甕の南側に置かれた状態で検出した。坏類は甕の南東側(墓道入口側)に置かれていたようである。甕は意識的に破碎されたものではなく二次的な圧力で割れた可能性が高い。

(4) 出土遺物

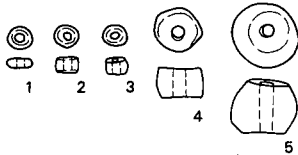
先述のように、装身具(耳環・玉類)、鉄製品、土器が出土しており、以下説明を加える。



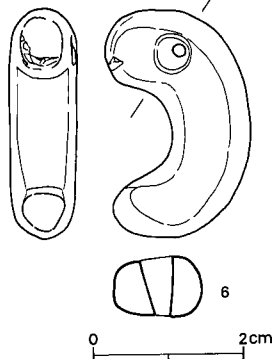
第45図 古寺5号墳出土耳環実測図 (1/2)

装身具 耳環5点、ガラス製小玉多数、硬玉製勾玉1点である。

耳環(図版38、第45図)1～4は銀製の細身の耳環で、5は鉄地の上に銅鍍がふいており、



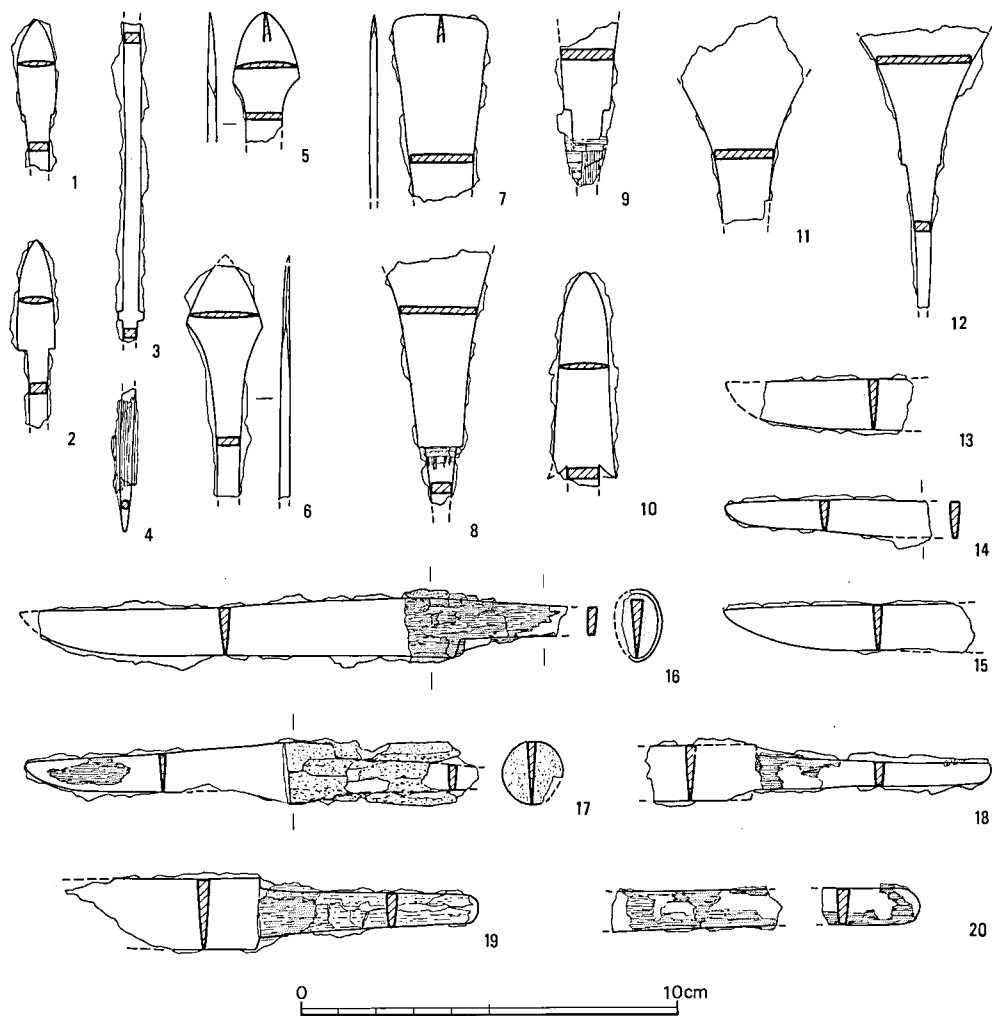
金箔をかぶせていたものと思われる。1は最も細身で外径17mm～19mmで断面は径2mm弱の円形を呈する。2は外径21mmのほぼ正円形で断面は径3mm弱の円形を呈する。3は外径20mmのほぼ正円形で断面は径3mm弱の円形を呈する。4は外径20mm～21mmで断面は径3mm弱である。5は腐食が進行しているが現状で外径25mmほどである。一部に鉄地が見える。



第46図 古寺5号墳出土
玉類実測図 (原寸)

ガラス製小玉(図版38、第46図)径3mm～9mmのものである。コバルトブルーの玉がほとんどであるが、スカイブルーと青緑の玉が1点ずつ出土している。1は径3mm、厚さ1mm強で、スカイブルーを呈する。2は径3mm、厚さ2mm強で青緑色を呈する。3～5と図示していない小玉はすべてコバルトブルーである。3は径3mm、厚さ2mm強、4は径6mm、厚さ4mm、5は径9mm、厚さ7mmである。図示していない玉も大きさは5mm～9mmの範囲に納まる。

硬玉製勾玉(図版38、第46図)長さ31mm、厚さ8mmほどである。頭部に傷がある。穿孔は片方からである。



第47図 古寺5号墳出土鉄製品実測図 (2/1)

鉄製品 破片ではあるが武器として鉄鏃が12点、工具として刀子が8点出土している。

鉄 鏃 (図版39、第47図) 1～4はこの時期に通常見られる実戦用の鉄鏃である。1・2は両丸造りで現存長は4cm、5cmで身の長さはそれぞれ2.5cm、3cmである。3・4の茎は直接的には接合しないが、1・2の鉄鏃のものである。3は長さ8.5cm、4は3.8cmである。5・6は身の形状に相違はあるものの(5は片丸造り、6は両丸造り)、刃の着け方と茎の形状は類似している。現存長はそれぞれ3.5cm、6.2cmである。7～12は大型の鉄鏃である。7・9は同一形式のものと思われ、現存長はそれぞれ5cm、4.4cmで9の茎には矢柄が錆着し桜皮が残る。8は身の先端部を欠くが現存長6.8cmの大型品で茎上端から矢柄が錆着して

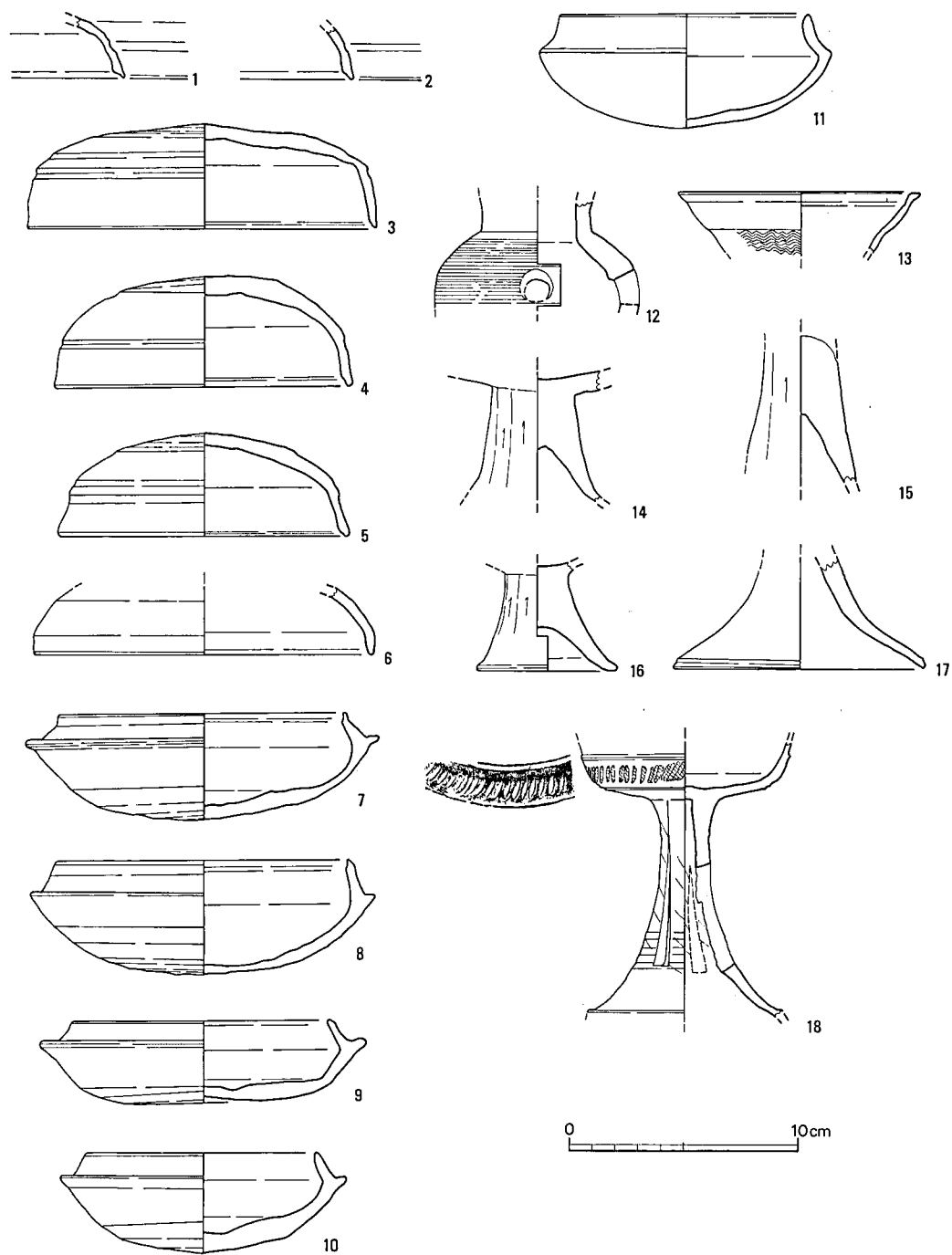
いる。10は鋭利な逆刺を持ち茎が5に似た形状のものである。現存長5.8cmを測る。11・12は同一形式のものであろう。ともに現存長は5.5cm、7.5cmである。これらのうち、茎への木柄の銹着がないので積極的な根拠に欠けるが5・6・10についてはあるいは銚の可能性を残す。刀子(図版39、第47図)13は身の先端部を欠き、現存長4cm、幅1.4cmである。14は現存長5.4cm、幅0.5~1cmであるが、刃が造り出されていない。あるいは茎の可能性を残すが他の品かもしれない。15は現存長6.6cm、幅1.2cmである。16は身の先端部と茎の一部を欠き、現存長14cmを測る。身は11.7cmほどに復原され、身幅は1.2~1.5cmである。木柄を装着し、関部はリング状の鉄板で固定している。17は鹿角製の柄を装着するほぼ完形品で全長12cmを測る。身の先端付近に木質が銹着するが、他の刀子の木柄であろう。刃部は研ぎ減りし関部近くを残して身幅を減じている。身幅は1~1.6cmである。18は身の大半を欠き、現存長9.2cmを測る。鹿角製の柄を装着していたようで、わずかにその痕跡が残る。18は身の大半を欠くが出土品中最大の刀子で、現存長11cmを測る。茎に木柄の一部が銹着する。20は直接には接合しないが同一個体である。

土器(図版40、第48・49図) 盗掘墳と墳丘から出土している。原位置を移動しているものが多く含まれるが、副葬土器と供献土器である。

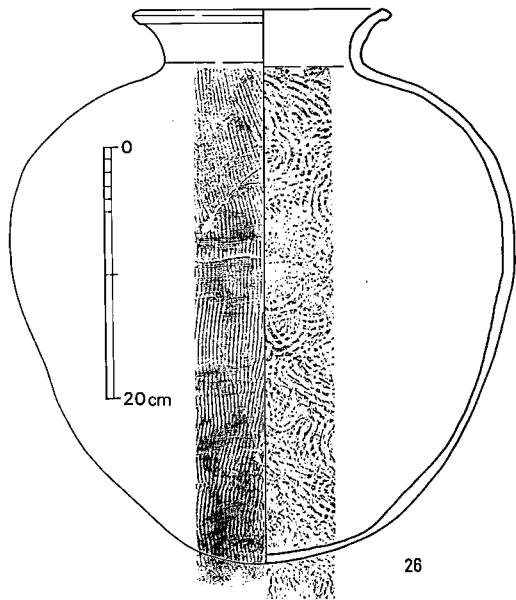
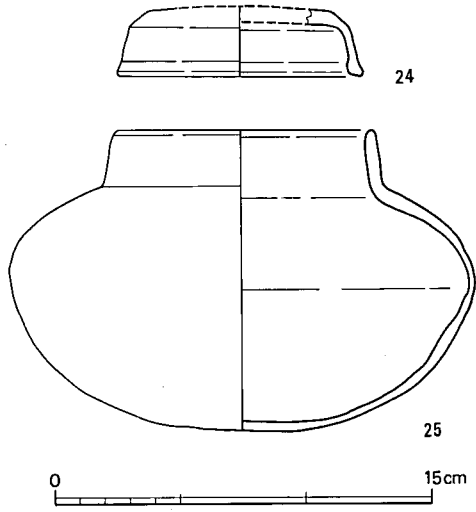
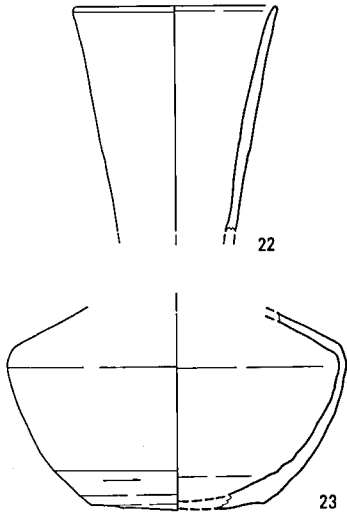
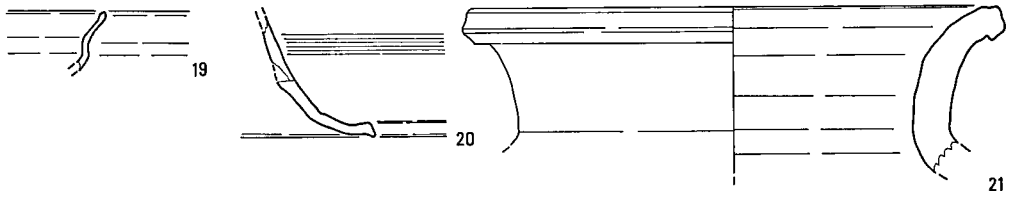
坏(1~11) 8は石室埋土下層から出土し、他は供献土器群である。11は土師器である。1・2は古式の様相を残す坏蓋の小片である。丁寧な作りで焼成も良好である。3は口径15cm、器高4.6cmを測る。天井部は他の坏蓋と違って丸味が少なく平たい。天井部と口頸部の境に浅い凹線を巡らす。大粒の砂粒を含み、焼成良好で灰色~黒灰色を呈する。4は口径12.9cm、器高4.8cmを測る。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色~緑灰色を呈する。5は口径12.5cm、器高4.5cmを測る。胎土に砂粒を多く含み、焼成はあまく黄灰色~灰色を呈する。6は小片の反転図で、復原口径12.6cm、器高2.9cmほどである。7は口径12.6cm、受部径15.3cm、器高4.6cmである。大粒の砂粒を含み、焼成良好で灰色~黒灰色を呈する。8は口径13cm、受部径15cm、器高4.9cmである。砂粒を多量に含み、焼成良好で淡灰色~灰色を呈する。9は底部が上げ底で、口径11.4cm、受部径14.2cm、器高3.6cmである。焼成良好で暗灰色を呈する。10は口径10.3cm、受部径12.5cm、器高4.3cmである。砂粒を多量に含み、焼成良好で暗灰色を呈する。坏の中では11は唯一の土師器で外面に黒色の漆を塗る。口径11cm、器高5cmである。砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

甗(12・13) 12は小片で全形をうかがえない。器肉が非常に厚く、作りは雑である。13は古手で器肉が薄く丁寧な作りである。

高坏(14~18・20) 14~17は土師器である。器面は風化・摩滅しているが14・16の表面には化粧土の痕跡を認めることができる。15・17には化粧土は施されていない。18は現存高12cmである。砂粒を多量に含み焼成良好で淡灰色~灰色を呈する。20は小片のため詳細は不明。



第48图 古寺5号墳出土土器実測図① (1/3)



第49図 古寺5号墳出土土器実測図② (1/3、26は1/6)

鉢 (19) 須恵器の小片で、鉢としたが小片のため詳細は不明である。

壺 (21~26) 21のみ石室埋土下層から出土したが他は供献土器群である。また25は土師器である。21は長頸壺の小片で復原口径8.2cm、現存長8.9cmである。砂粒を多く含み、焼成良好で暗灰色~暗緑灰色を呈する。22は反転図で胴部最大径13.6cmに復原され、現存高は7.8cmである。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で灰色~灰黄色を呈する。23は反転図で口径21.2cmに復原される。焼成は普通程度で淡茶灰色~茶灰色を呈する。24は短頸壺の蓋であるが、短頸壺そのものは検出していない。25は口頸部がほぼ直立する壺で若干破損するが、口径10.3cm、胴部最大径18.4cm、器高11.9cmに復原される。口頸部内外面はヨコナデ調整されるが他の部分は器面が摩滅しており調整は不明である。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で淡褐色~暗褐色を呈する。

甕 (26) B群供献土器の中心的存在で、意識的に破砕された状態で出土した。口径21cm、胴部最大径41cm、器高44cmである。体部内外面にはタタキ目と当て具の痕跡が明瞭にのこる。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で暗灰色を呈する。

3. 古寺6号墳

(1) 墳丘 (図版22、第50・51図)

5号墳のすぐ東側にあたかも墳裾を接するばかりに構築されている。樹木の伐採後の見かけの形状はわずかに地膨れしたほどのものであり、6号墳盗掘時の排土かと考えた。しかし中央に盗掘壊らしきものが認められ、古墳か否かの確認調査を実施することにした。

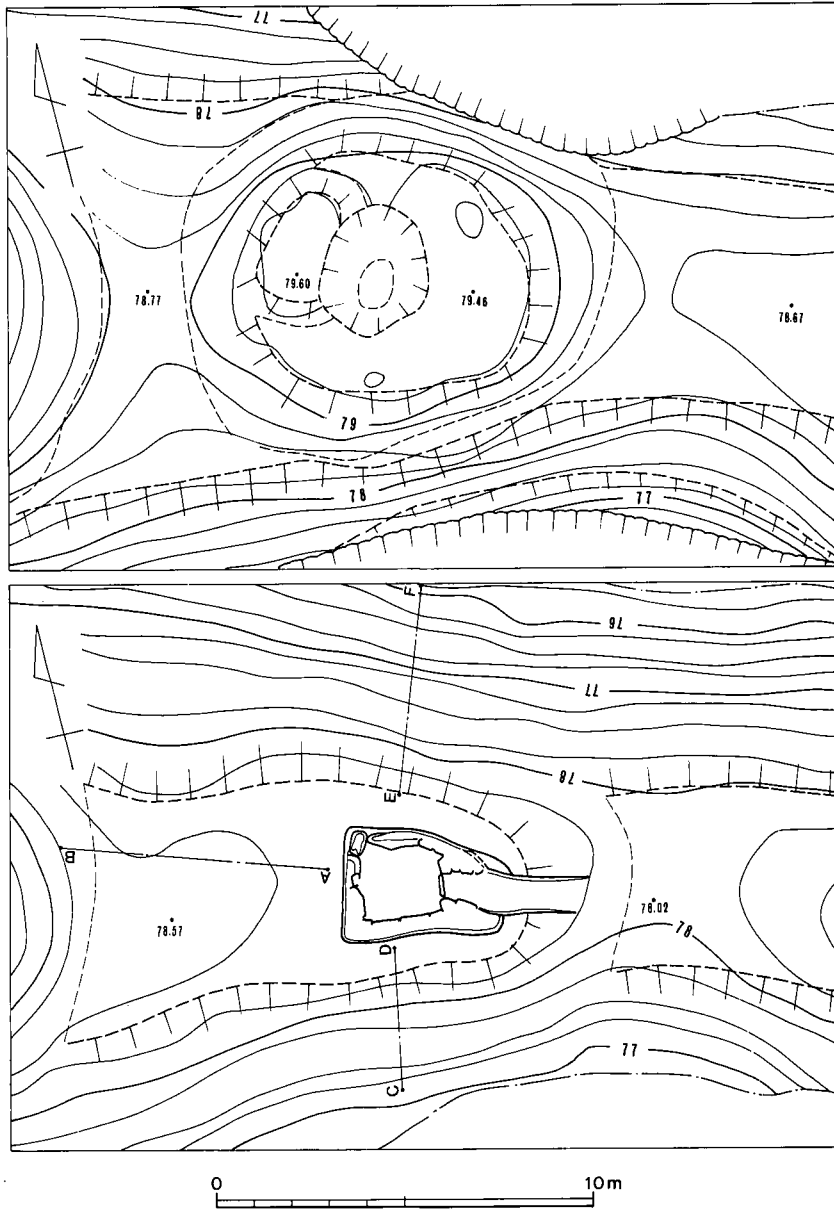
調査は盗掘壊状くぼみの清掃から開始した。一気呵成に掘り進んだところ、石材が始め、これを取り除いてさらに掘り下げて床面に到達した。玄室の床面を掘り広げ、石室のプランを確認した後、墳丘の盛土観察用のトレンチを設定し、墳丘の切断作業に入った。土層図作成後に墳丘の盛土をすべて除去した。

本墳の調査前の規模は径11m、高さ1m弱であった。厚さ1m弱の盛土をすべて除去した後の状況は5号墳側(西側)から舌状に張り出したように整形している。その中央に石室の掘り方を穿っている。墳丘完成後の古墳の中心は玄室のほぼ中央付近に相当する。

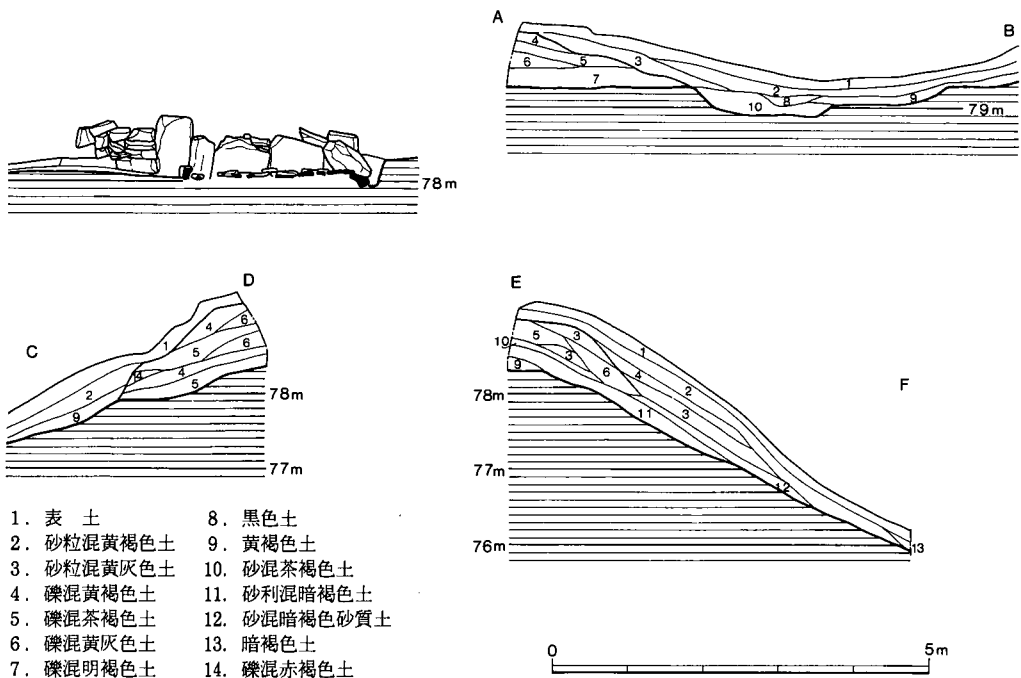
南北斜面側の土層面から見る墳丘の盛土の状況は6号墳ほどには念入りに行われない。よって盛土の流出がはげしく、墳丘がそれほどには目だたなかったのであろう。

(2) 石室 (図版22、第52図)

岩盤の地山に穿った掘り方内に構築された単室の横穴式石室である。石材採取により、石



第50図 古寺6号墳丘測量図（上一調査前、下一調査後、1/200）



第51図 古寺6号墳墳丘土層図 (1/100)

は大きく破壊され玄室の腰石は一部しか遺存しない。床面も荒らされて副葬品も原位置を保たない。玉石は存在しなかったので床面は一枚だと思われる。床石は他の古墳同様に20cm前後の大きさの割り石を敷き、間に小石を詰める。

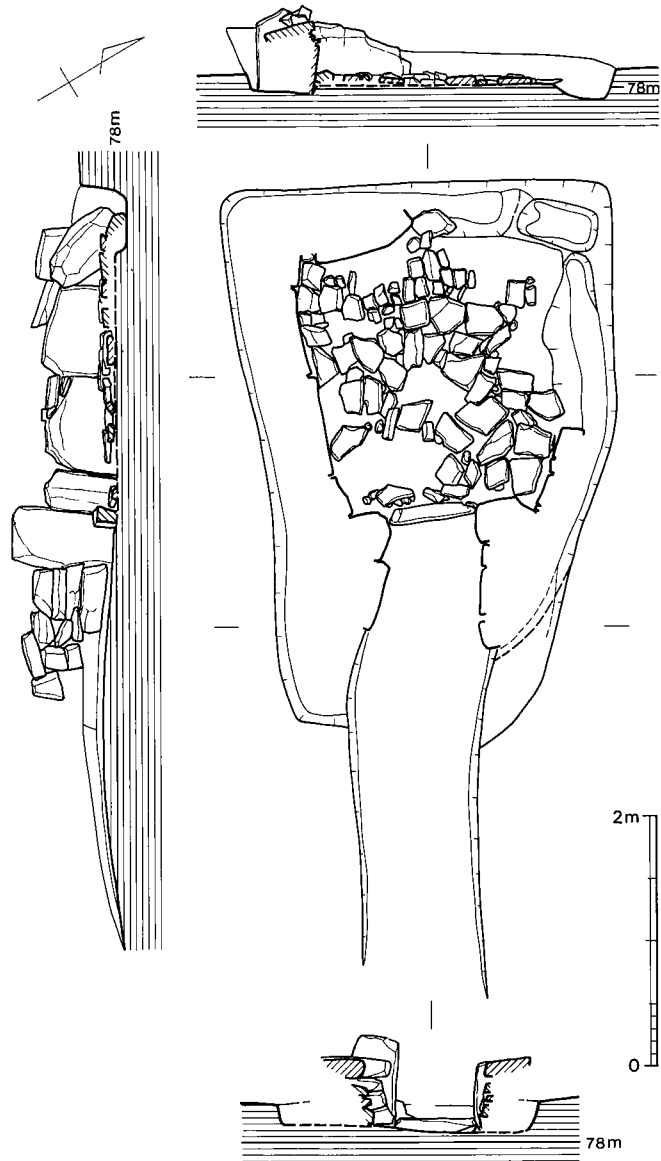
腰石の掘方と腰石の配置状況から石室は床面で主軸長3.1m、玄室の主軸長2.12m、同幅2m前後を測り、玄室のプランは奥壁側が前壁側よりも広く、正方形に近い羽子板状を呈する。玄門は幅0.6m、現状で高さ0.65mである。玄門から外側の石積は羨道というよりも前庭的でやや「ハ」字形に開き、壁の基底部は地山面から浮いており天井石の架構に耐えない。

(3) 遺物の出土状態

玄室内から鉄製品と土器（第52図-26）が、墓道南側から供献土器が出土している。

鉄製品は原位置を保つものはほとんどなく、5を除いて床面から浮いており玄室埋土下層から出土した。5は床石と右壁腰石の間から出土し、唯一原位置を保つ可能性があるものである。装身具やそのほかの副葬品は残念ながら出土していない。

土器は墓道の左（南）側に供献されたもので、墳丘の流出とともに斜面に落下したものであろう。小片になったものが多く、供献土器として図示できるのではない。



第52図 古寺6号墳石室実測図 (1/60)

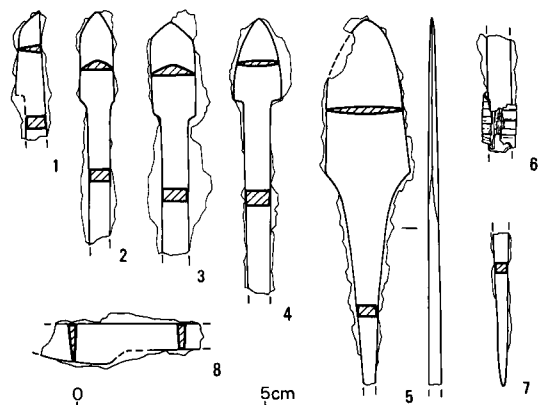
1は弥生土器で本墳には伴わない。しかし、この丘陵を全面発掘したがこの土器に伴う遺構は存在しなかった。

(4) 出土遺物

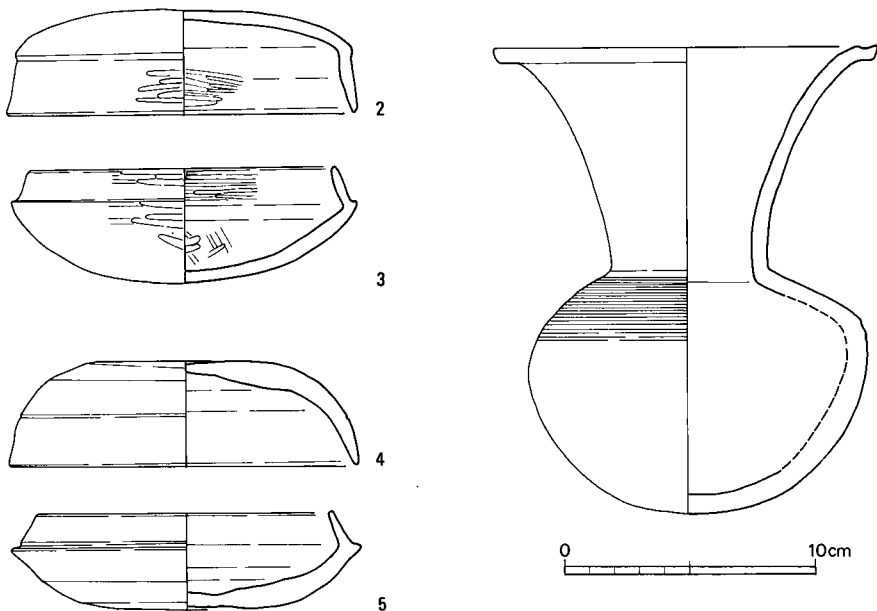
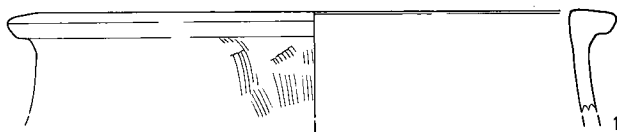
鉄製品8点と供献土器および弥生土器である。

鉄製品（図版41、第53図） 鉄鏃として説明するが、8はやや不明な部分を残す。

鉄 鏃（1～8） 1～4は小型の通常にみられる鉄鏃である。1は平造り、片刃の鉄鏃で現存長3.5cmを測る。逆刺は錆のため正確ではない。2は片丸造りの鉄鏃で現存長6.2cmを測る。3も2と同様に片丸造りの鉄鏃で現存長6.2cmを測る。4は薄い両丸造りの鉄鏃で、現存長7.4cmを測る。5は大型品で現存長9.7cmを測る。身は薄い両丸造りである。6・7の茎片は小型の鉄鏃のものであろう。6は矢柄の一部と桜皮が錆着している。8は茎の厚味が普通の鉄鏃とは異なり、身の背部とほとんど同じである。鉄鏃とは違って、工具の可能性も考えられる。



第53図 古寺6号墳出土鉄製品実測図 (1/2)



第54図 古寺6号墳出土土器実測図 (1/3)

土器 (図版41、第54図) 坏・壺と弥生土器の甕である。

甕(1) 弥生土器の小片で、口径24.2cmに復原され現存高4.1cmを測る。胎土には石英・雲母等多量の砂粒を含み、焼成良好で茶褐色を呈する。

坏(2～5) 2・3は土師器、4・5は須恵器である。互いにセットの可能性がある。2は口径13.8cm、器高4.1cmを測る。天井部分外面全体はヘラ削りされ口頸部内外面はヘラ磨きされる。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で褐色を呈する。3は口径12.1cm、受部径13.6cm、器高4.6cmを測る。内外面はヘラ磨きされる。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で褐色を呈する。4は口径13.9cm、器高4.1cmである。胎土に多量の砂粒を含み焼成良好で茶褐色を呈する。5は口径11.9cm、受部径13.9cm、器高3.8cmを測る。胎土に多量の砂粒を含み焼成良好で暗褐色を呈する。

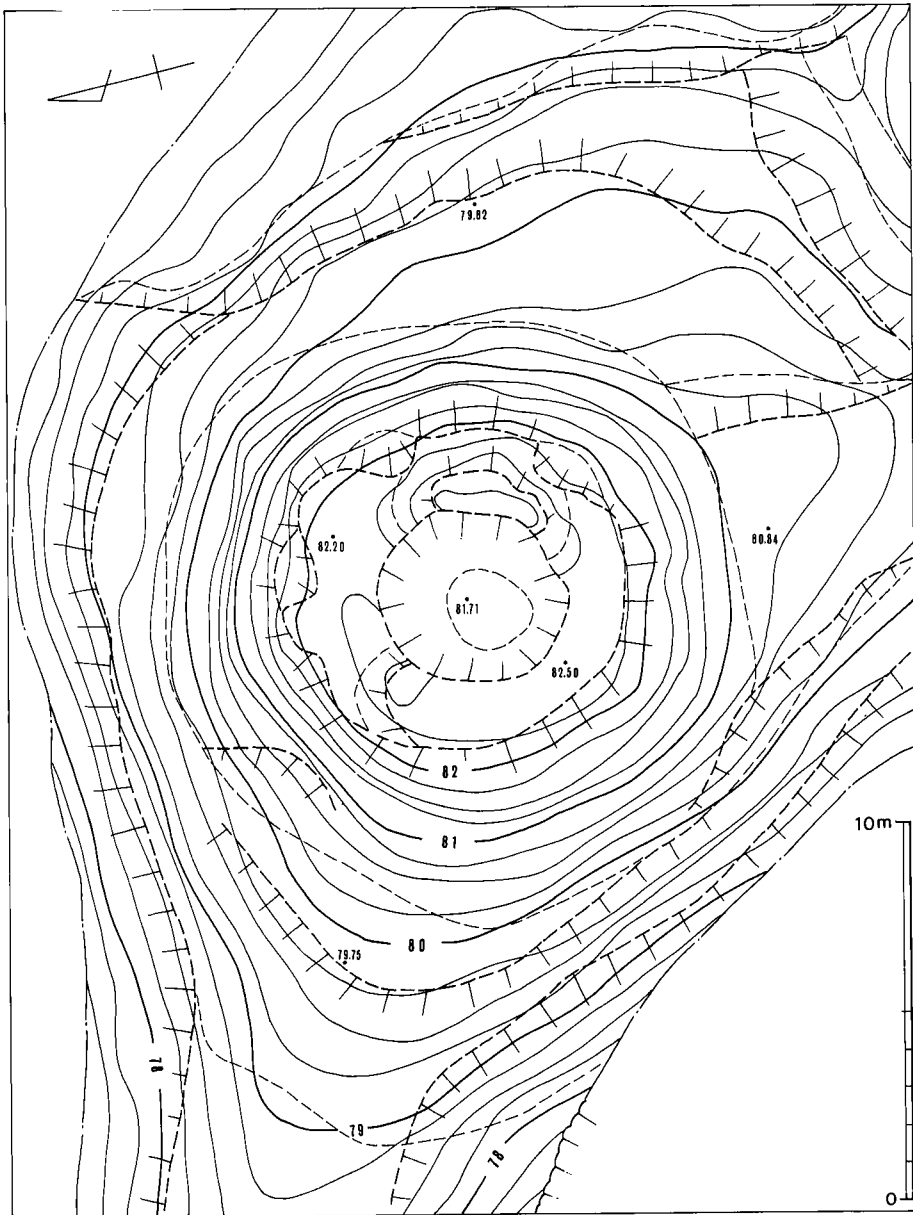
4. 古寺7号墳

(1) 墳丘 (図版24、第55～57図)

B支群の中で墳丘がひときわ目立つ古墳である。丘陵の奥まったところに構築されているが六世紀代の古墳のうち、墳丘の規模からみて中心的な古墳である。7号墳の立地する部分は丘陵の尾根幅が一番広いところであり、4号墳を除いて古墳を構築するには最も有利な地形である。後述するが、古墳構築に先立つ地山整形においても他の古墳とは異なった様相を見ることができる。

樹木伐採後の見かけの墳丘は径16mほど、高さは最も比高差のある西側の部分で2.5mほどであり、墳丘の東半部は墳裾から幅2～4mのテラス状のものが認められた。よって、墳丘構築に先立つ地山整形は他の古墳と違ってかなり広い範囲にわたって行われたと想定された。墳丘の中心部には径4m、深さ0.8mほどの盗掘壙が認められた。よって、調査はこの盗掘壙の清掃から開始した。

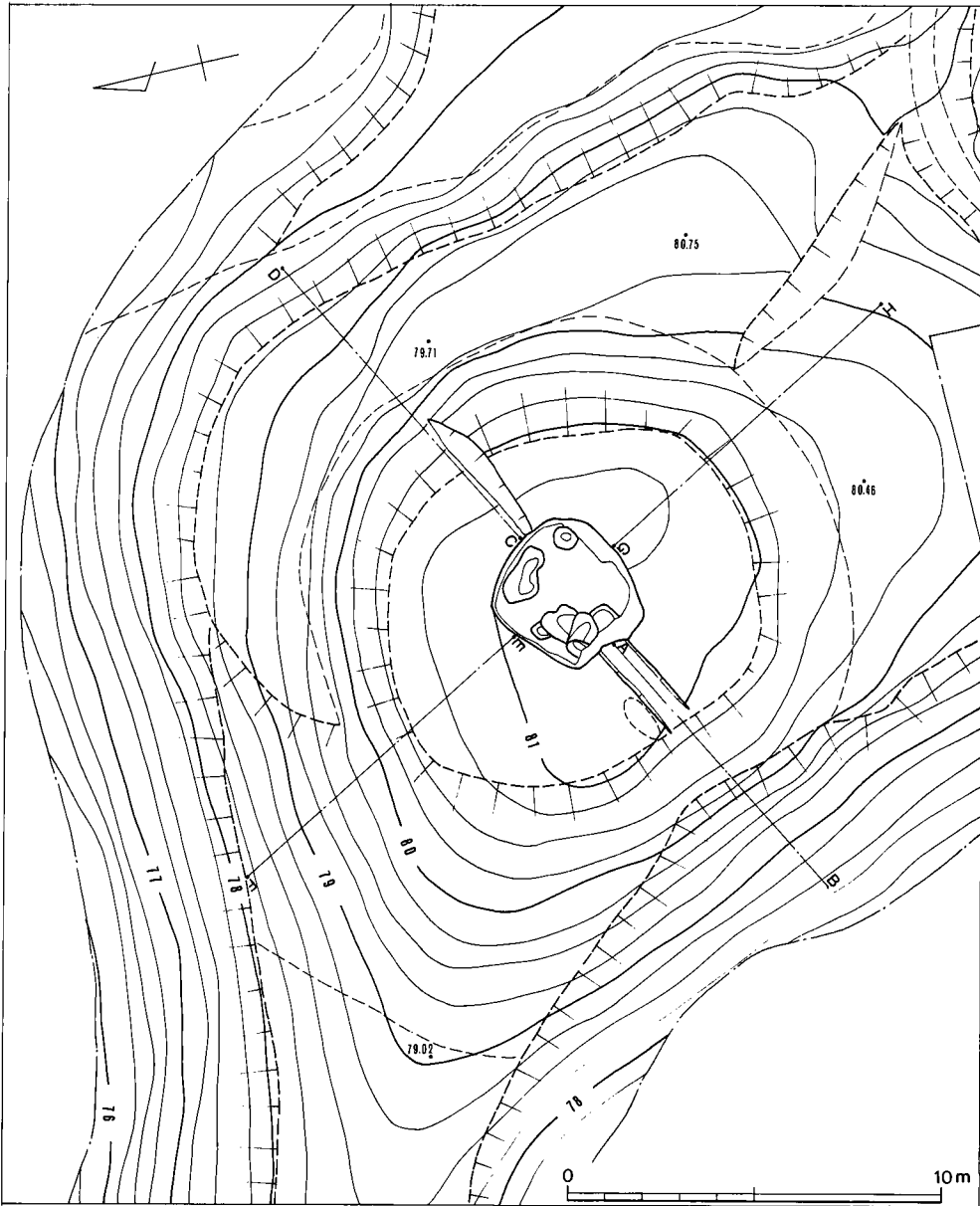
古墳の規模が大きいためか盗掘壙の調査はかなり手間取り、2m余も掘り下げた。しかし、石室の遺存状態は他の古墳と比べて極端に悪く、原位置を移動した床面の敷石がわずかに残るだけで石室壁体の石材は全く遺存しなかった。見事に石材を抜かれていた。結局は石室の掘り方を確認したに過ぎず、その後、十文字にトレンチを設定して墳丘盛土の調査を行った。南西側トレンチ(A-Bトレンチ)が偶然にも羨道・墓道の主軸線に添って入った。土層図作成後、墳丘の盛土をすべて除去した。調査の結果、墳丘構築に先立つ地山の整形はかなり入念に行われており、古墳の東半部は幅3mほどのテラスが削り出されていた。墳丘本体の削り出しは径14～15m、高さは最も比高差のある西側で1mほどであった。石室掘方の床面の岩盤と西側の地山削り出し面の比高差は0.7mほどで石室掘方床面の方が高く、他の古墳



第55図 古寺7号墳墳丘土層図（調査前、1/200）

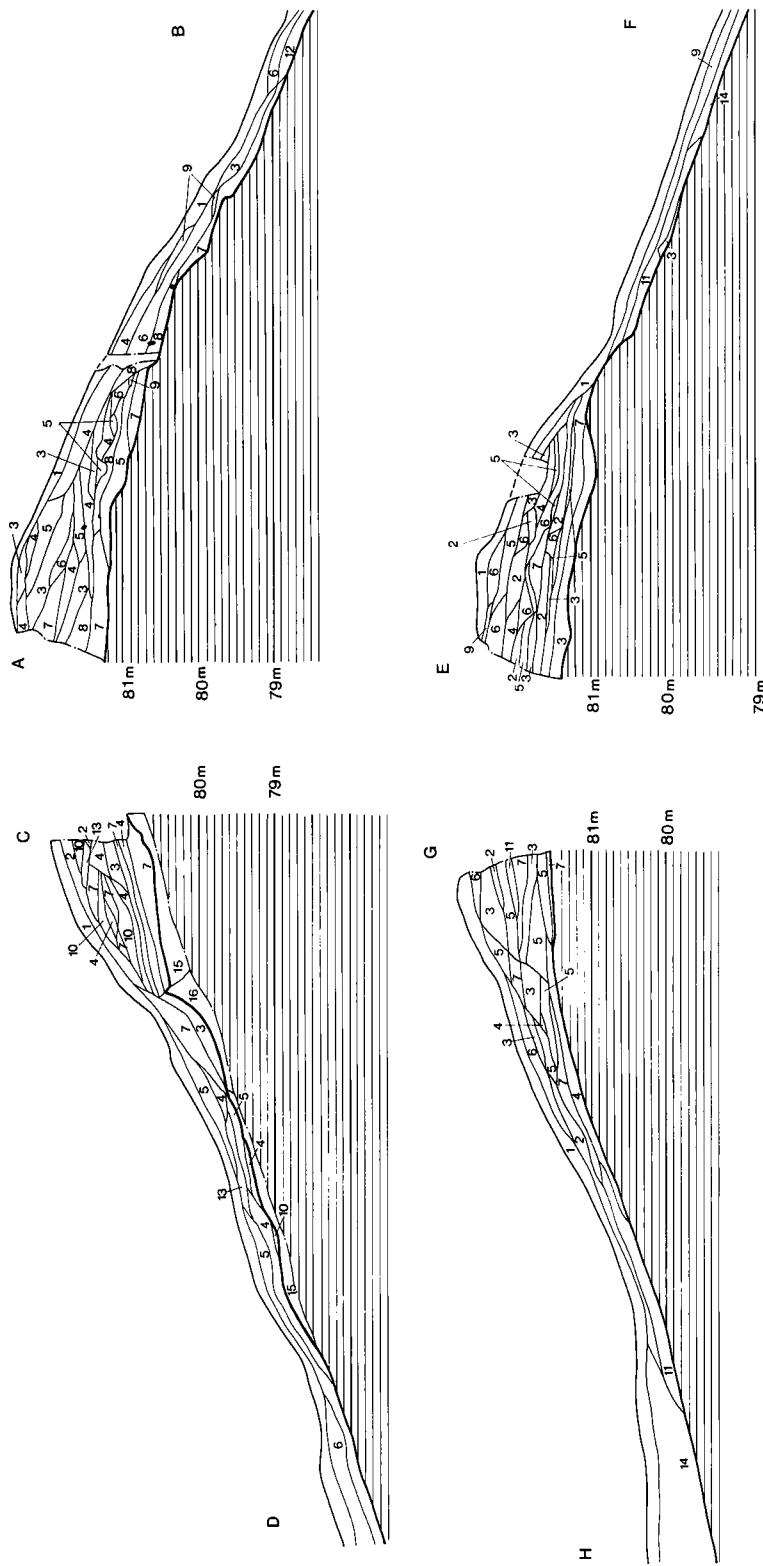
と異なっている。

トレンチ調査による墳丘の盛土の状況は、5号墳の斜面側の盛土に見たように、極めて丁寧盛られている。比較的粘質の高い土を多用し第一次墳丘の盛土はしっかりと締まっている。第一次墳丘の形成時に何らかの祭祀行為を行ったようで、墓道の西（左）側から供献土



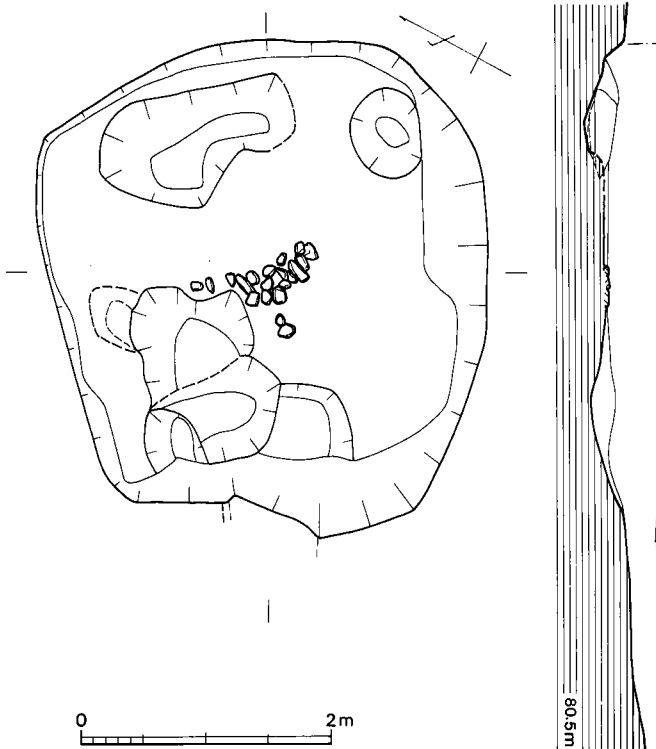
第56図 古寺7号墳墳丘測量図（調査後、1/200）

器が出土している。その後、当初から予定の範囲に盛土を行い、墳丘を最終的に構築したようである。



- 1. 表土
- 2. 暗褐色砂質土
- 3. 礫混赤褐色土
- 4. 礫混暗褐色土
- 5. 礫混黃褐色土
- 6. 茶褐色土
- 7. 礫混灰褐色土
- 8. 礫混茶灰色土
- 9. 暗褐色土
- 10. 灰褐色土
- 11. 黃褐色土
- 12. 灰褐色土
- 13. 黑色土
- 14. 赤褐色土
- 15. 礫混暗灰褐色土
- 16. 礫混赤褐色粘質土

第57図 古寺7号墳填丘土層図 (1/100)



第58図 古寺7号墳石室実測図 (1/60)

(2) 石室

(図版24、第58図)

石材は遺存せず、現状では石室というも恥ずかしいほどのものである。原位置を移動した玄室床面の敷石がわずかに残るのみである。玄室部分の掘方は正方形に近いプランを呈し、上端で南北4m弱、東西3.6mほどである。これに接続する墓道の遺存状態から判断して単室の横穴式石室であろうと思われる。石室の掘り方は上端で主軸長(南北)3.6m~4m、幅(東西)3.5m前後である。よって、この掘方の中に構築される石室もおのずと規模に制限があり、玄室は床面で主軸長2.5m幅2mを大きく超えることはなからう。

(3) 遺物の出土状態

盗掘墳から耳環・鉄製品が、墓道西側から供献土器が出土した。盗掘墳から出土した副葬品は石材採取の折に徹底的に攪乱されており、石室の堀方床面から20cm~1mほど浮いて出土している。供献土器も原位置を保たずに散乱していた。



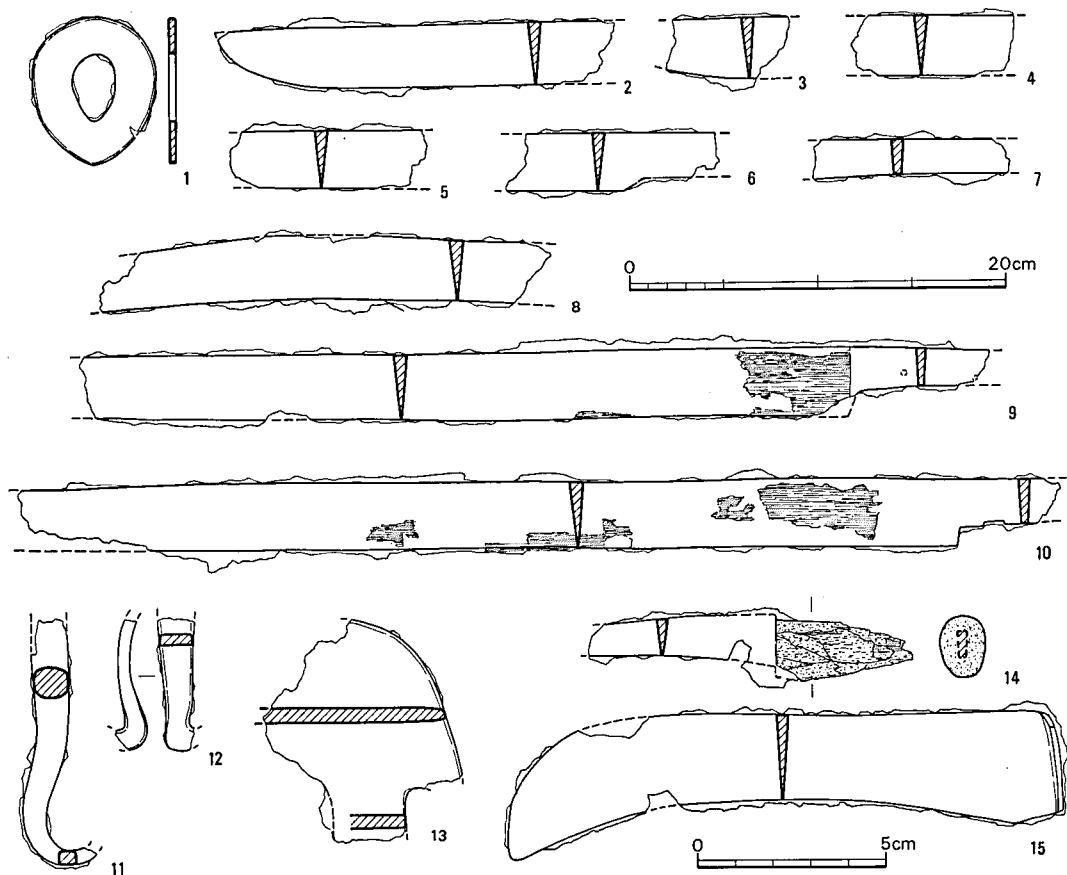
第59図
古寺7号墳
出土耳環実
測図 (1/2)

(4) 出土遺物

装身具 (図版43、第59図) 外径22mm~24mmの耳環で、破損が激しく表面の金箔がかなり剥落し、一部に鉄地が見える。

鉄製品 (図版42、第60図)

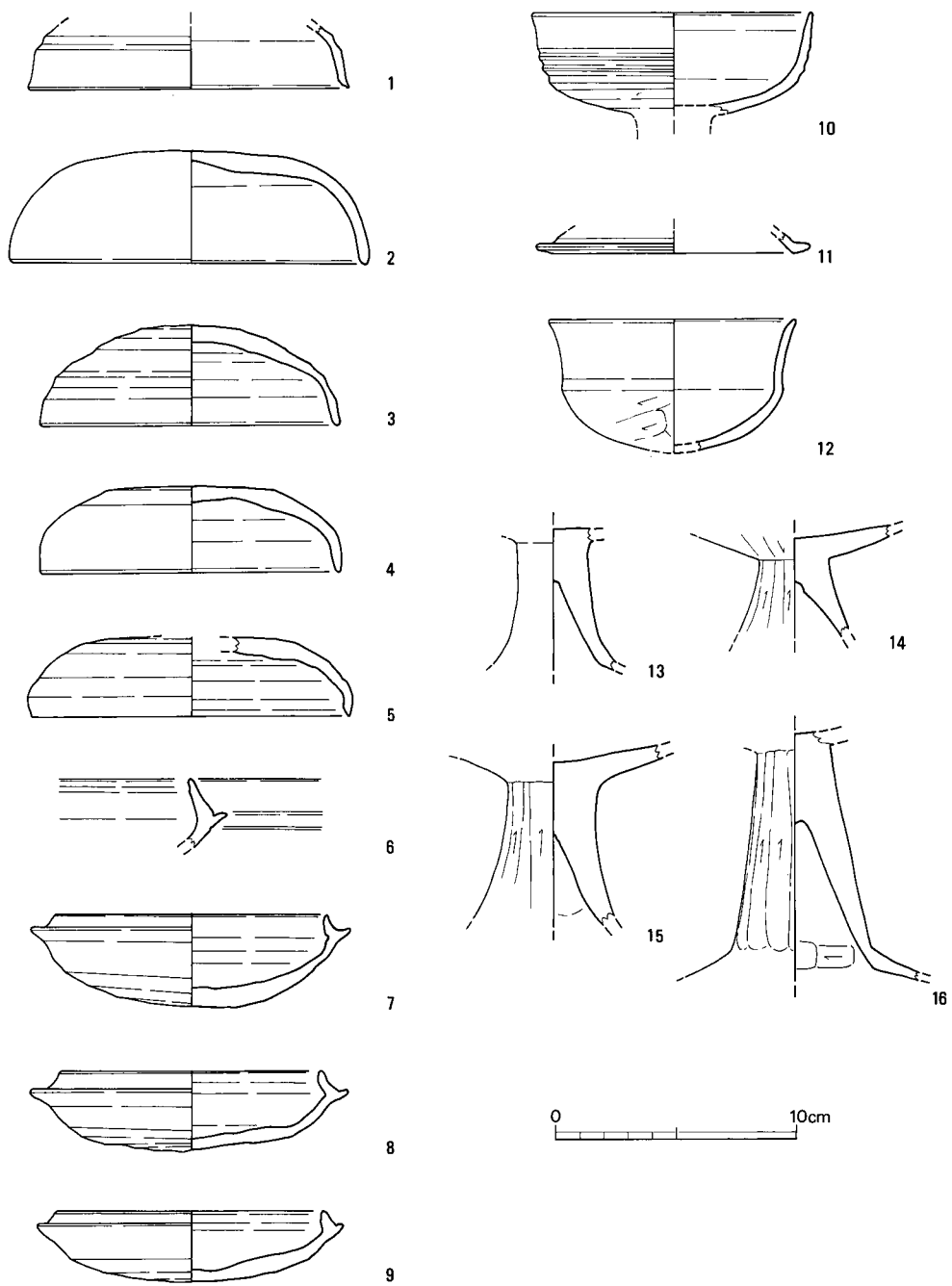
鍔(1) 倒卵形の完形品で長径7.9cm、短径6.6cmを測る。孔は長径3.6cm、短径2.3cmである。厚さは4mmで下方に向かってやや薄くなる。



第60図 古寺7号墳出土鉄製品実測図 (1~10は1/4、11~15は1/2)

刀(2~10) 切先部およびそれに近いもの(2・3)、関部(6・9・10)、茎(7)から判断して少なくとも3振存在したことがわかる。これらは互いに接合しないので長さについては不明である。最長の10は、現存長56cm、同刃部長50.5cm、刃部幅3.6cmで明確に関が認められる。銹のため明瞭ではないが茎の刃部側に関部から1.3cm茎尻側に幅1cm、深さ4mmほどの剝込がありそうである。次に長い9は現存長49cm、同刃部長41cmほど、刃部幅3.6cmで関の部分は破損している。切先部の2は現存長21.2cm、幅3.3cmである。

不明鉄製品(11~13) 11・12は馬具であろうと推測する。後述する8号墳の轡にこれと類似したものが着いており、その可能性は高いと思われる。11は現存長6.6cmで下部は細くなり、輪を作る。断面形は軸部は方形に近い円形、下部は長方形である。12は断面形が台形を呈し、形状も11とやや違う。現存長3.5cm、幅9mm、厚さ3mmほどである。13は厚さ現存長5.9cm、幅5cm、厚さ4mmである。全形がわからず、用途も不明である。



第61图 古寺7号出土土器实测图 (1/3)

刀子 (14) 身の先端を欠失し、茎は柄に覆われてその形状は不明である。遺存状態から判断して両関である。柄は鹿角製で断面は推定復原図である。現存長8.7cm、刃部長5cm、同最大幅1.4cmである。刃部は研ぎ減りしており、先端に向かってわずかに弧を描きながら細くなり、内反りの印象を与える。

鎌 (15) 背部と刃部の一部を欠失するが全形を窮うに支障はない。全長14.8cm、身幅2.3cm～2.6cmである。

土器 (図版43、第61図)

坏 (1～9) 図示できるのは蓋6個体、身4個体分である。1は本墳出土品の中では最古式の須恵器で古墳の構築時期を示す資料である。小片ではあるが口径13.3cmに復原され、現存高2.7cmである。胎土に小砂粒を多量に含み焼成良好で淡灰色～灰色を呈する。2は口径14.9cm、器高5cmを測る。焼成が悪く軟質で器面が風化している。胎土に小砂粒を多量に含み淡褐色を呈する。3は口径12.4cm、器高4.2cmを測る。天井部外面のヘラ削りの範囲は狭い。わりと大粒の砂粒を含み焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。4は口径12.6cm、器高3.6cmを測る。天井部は平坦でヘラ削りの範囲は狭い。砂粒を多く含み焼成良好で暗灰色を呈する。5は口径13.3cm、器高3.23cmに復原される。砂粒を多量に含み焼成良好で暗灰色を呈する。6は極小片のため口径は出せない。胎土に小砂粒を多量に含み焼成良好で灰色を呈する。7は口径10.3cm、器高13.3cmである。底部のヘラ削りの範囲はわりと広い。わりと大粒の砂粒を含み焼成良好で青灰色～暗灰色を呈する。8は口径11cm、器高3.4cmを測る。大粒の砂粒を含み焼成良好で鼠色を呈する。9は口径11.4cm、器高3cmを測る。大粒の砂粒を含み焼成良好で青灰色～暗灰色を呈する。

高坏 (10・11・13～16) 10・11は須恵器、ほかは土師器である。11・12は互いに接合しないが同一個体と思われる。10は口径11.6cm、現存長4.3cmを測る。体部下半に3条の凹線を巡らせ、その下はヘラ削りを行う。胎土に砂粒を多量に含み焼成良好で赤灰色～茶灰色を呈する。赤色顔料を塗布した可能性がある。11は極小片で裾部の径は正確ではないが、11.3cmほどである。土師器は脚部の破片で詳細を知りえない。13は器面が摩滅しており調整は不明であるが14～16は脚部を縦位のヘラ削りを行う。13・15・16は長脚の高坏で14は短脚である。ともに胎土に多量の砂粒を含み14・15は焼成良好であるが、13・16は焼成は不良である。14は淡褐色～肌色を呈するが13・15・16は黄褐色を基調とする。

埴 (12) 口径10.3cm、器高5.6cmに復原される。上半部内外面はヨコナデされ、下半部内面はヨコナデ、外面はヘラ削りを行う。胎土に砂粒を含み焼成良好で褐色を呈する。

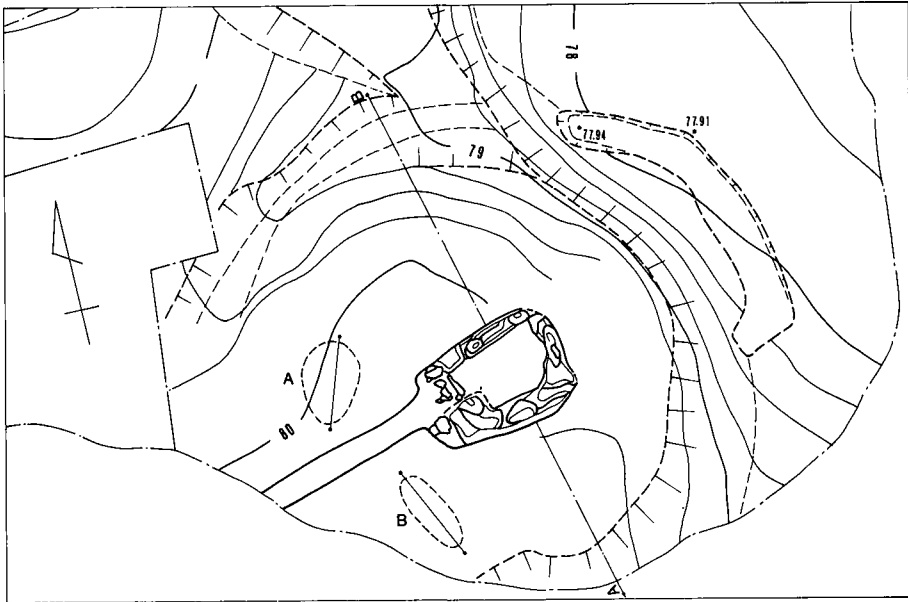
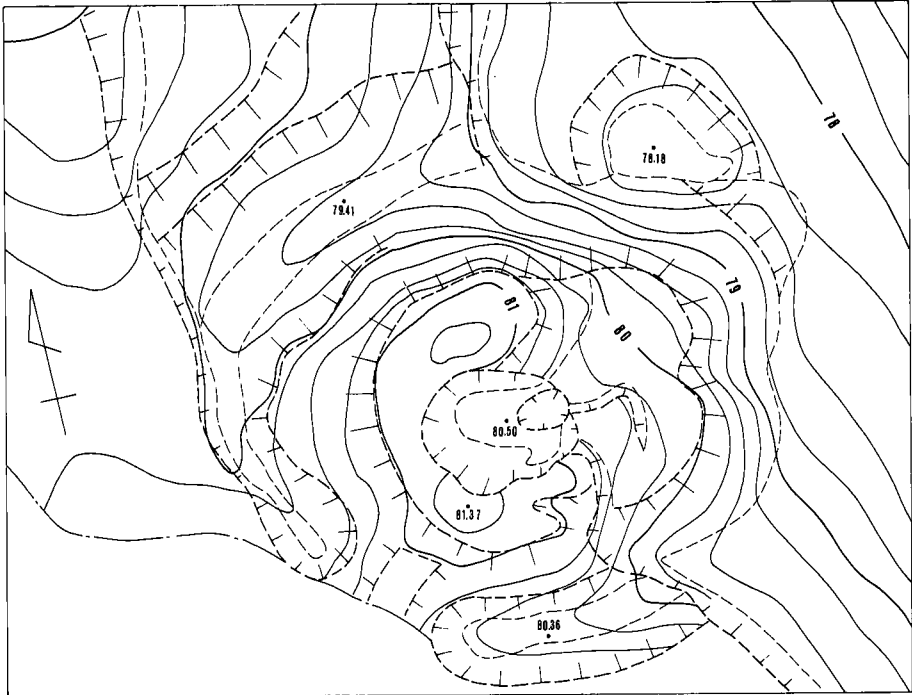


図62図 古寺8号墳丘測量図 (上一調査前、下一調査後、A・Bは供献土器群を示す。1/200)

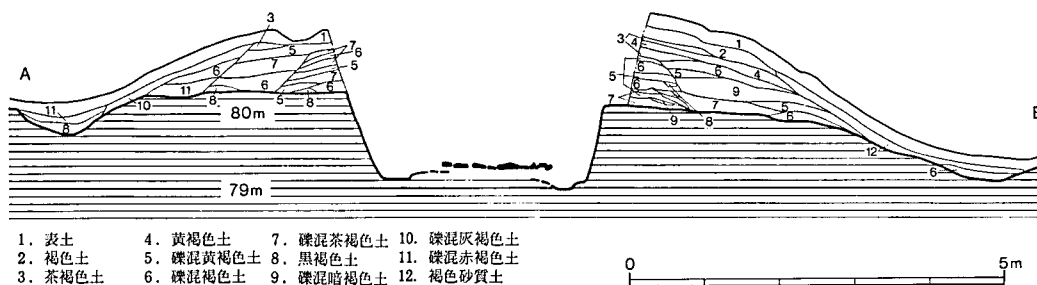
5. 古寺8号墳

(1) 墳丘 (図版25、第62・63図)

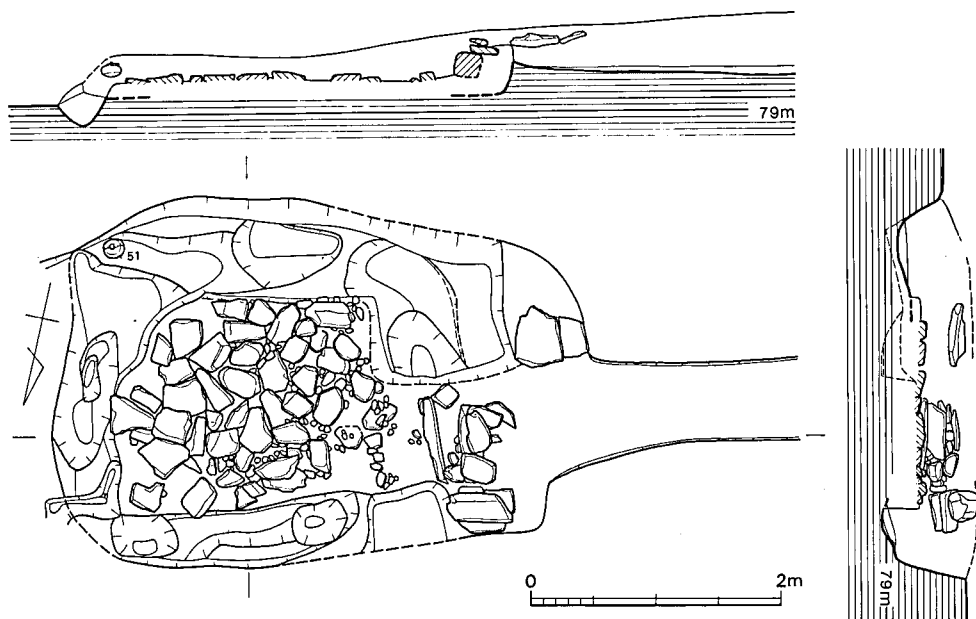
7号墳の南東側に構築された円墳で調査区内では最も東に存在する。樹木伐採後の状況では古墳の西・南側に周溝が認められた。また、墳頂部に径3m～4m、深さ0.8mほどの盗掘堀がありその廃土が墳丘の北側に放置され、盗掘堀の状況から石材採取を目的とした盗掘は墳丘の北側から行われたことがわかる。調査前の墳丘の規模は、径10m、最も比高差のある部分で高さ2.5mほどである。周溝の幅は西側が5m、南側が3m、深さは0.5mほどである。また、南西側で周溝が途切れている。

調査は他の古墳と同様に盗掘堀の整掃から開始した。本墳においても石室の石材は床面の敷石を除いてそのすべてが持ち去られていた。床面の敷石を検出した後、四方に掘り広げ石室掘方及び玄室腰石の掘方とを検出した。石室の主軸を確認後、墳丘盛土の状況を確認する目的でトレンチを設定し墳丘の切断を行った。ただし、盗掘堀は墳丘の東側にまで及びこの部分には溝状の陥没があって、当初は石室の開口方向を東だと誤認して調査を行ったので、この部分は土層図を作成できなかった。調査の結果、墳丘の一部が西および南側の路線外に延びており、墳丘全体を検出できなかったが、径15mほどの円墳で、周溝については南側と北西側で一部しか検出できなかった。

墳丘は古墳構築に先立って地山整形された平坦部を中心に盛土を行い、最も厚い部分で1.3mほど遺存していた。当然ながら、盛土は石室構築の各段階に対応してなされているが第一次墳丘から判断して玄室の天井部高さは2mを大きく超えることはなかったであろう。



第63図 古寺8号墳墳丘土層図 (1/100)



第64図 古寺8号墳石室実測図 (1/60)

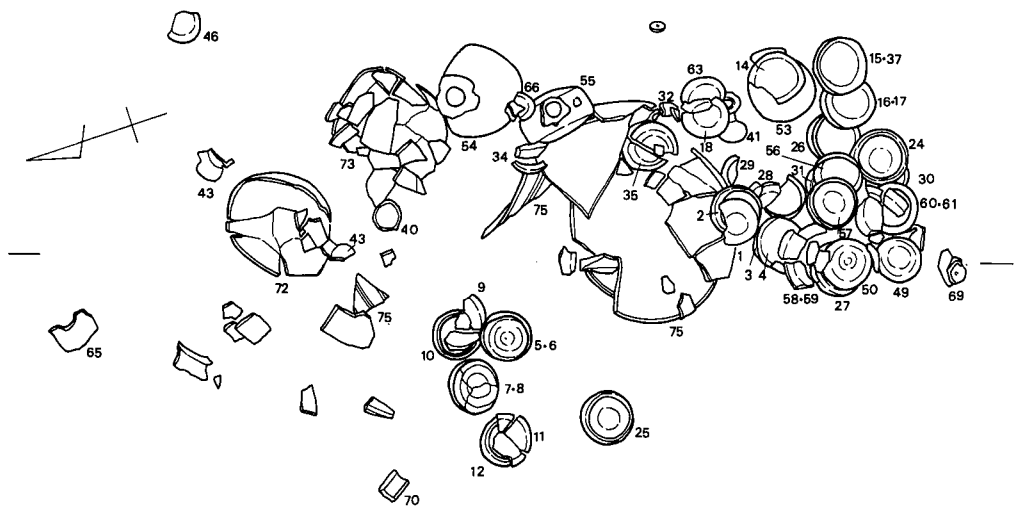
(2) 石室 (図版68・第64図)

玄室は床面の敷石が残るだけで、20cm大の割石とわずかに玉石が依存する。1・5号墳の例から判断して床面は割石だけを敷いた第一次床面と、その上に玉石を敷いた第二次床面が存在したと推測される。腰石の掘り方等と依存する仕切石から判断して、玄室は床面で主軸長2.5m以内、幅2mほどと思われる。天井までの高さは先に推測したように2mを大きく超えることはなかろう。依存状態は極めて悪いが、玄門の外側は羨道よりも前庭部と考えたほうがよい石積で、基底部は地山から浮いており天井石の架構は考えられない。地山面での計測値であるが、前庭部から墳裾に向かって幅60cm、深さ40cmほどの素掘りの墓道が取りつく。

(3) 遺物の出土状態 (図版27~31、第62・65図)

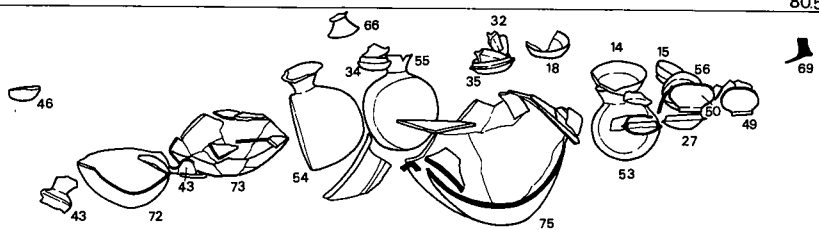
石室の床面から原位置を移動して装身具類、鉄製品等の副葬品が、墓道の両側から供献土器群(A・B群)が出土している。他に石室掘り方の北東隅に壺(51)が出土した。供献土器群は第一次墳丘の裾部で検出した。石室構築後の祭祀に関するものであろう。

墓道西側のA群では須恵器の坏身と中心に壺・甕・提瓶・甗、土師器の坏身と蓋と高坏とともに滑石製紡錘車が出土している。大甕を中心にして北側に甕や大型の提瓶等を、北西・南側に坏を中心として高坏・壺・甗や小型の提瓶等を配置している。提瓶55は口縁部を打ち欠き、大甕は体部上半部を意識的に破碎しその破片が散乱している。坏は蓋がかぶさった状態で出土し、セット関係が明確なものが多い。また、破碎された大甕75の上に置かれた状態



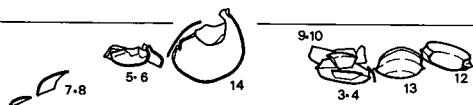
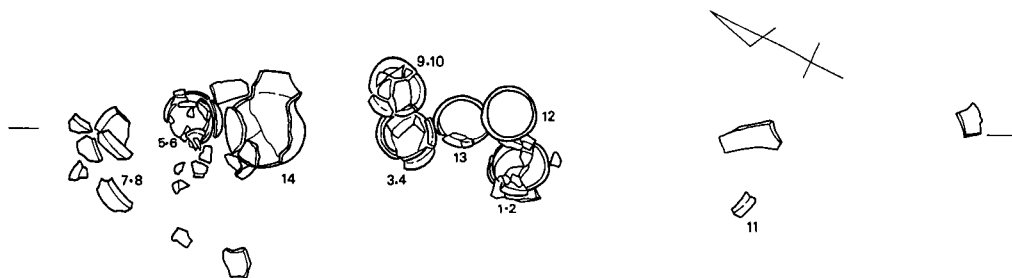
供献土器A群

80.5m



供献土器B群

80.6m



第65图 古寺8号墳供献土器A・B群出土状态实测图 (1/20)

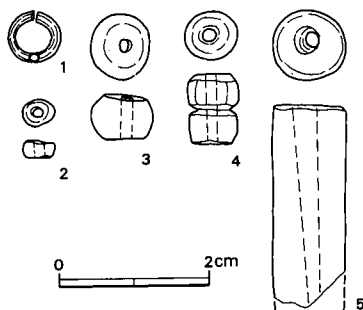
で坏1・2・35が検出され、A群ではこの大甕を据えて破碎した後に小型の土器を置いた可能性が強いと思われる。散乱する供献土器群の中に弥生土器片(70・71)を検出した。

墓道東側のB群は小型品が主体で、壺14を中心として南北に土師器の坏セットを主体に供献されている。検出した時点では土圧により割れていたが、当初は完形品のまま置かれていたようである。A群に置いても小型品の坏類は意識的に破碎された状況ではなく、A・B群とも供献土器群における小型品の取り扱いが共通している。

第一次墳丘形成後に供献された土器類の出土位置は、これまでの説明のように本墳古墳群では石室に向かって墓道の左側であったが、本墳のように墓道の両側において供献土器が検出されたのは異例のことである。

(4) 出土遺物

耳環・玉類の装身具、鉄製品、紡錘車、土師器・須恵器等の土器類が出土している。



第66図 古寺8号墳出土装身具実測図
(1は1/2、他は原寸)

装身具(図版、第66図) 耳環・ガラス玉・土玉・碧玉製管玉が出土している。

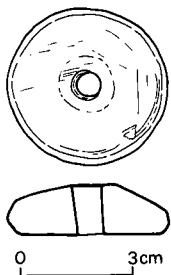
耳環(1) 銀製の外径14mmを測る小型の耳環で、本古墳群で出土した耳環の中でも最小である。

玉類(2～5) ガラス製小玉は2個検出した。2は径3mm～4mm、厚さ2mmほどで色調はスカイブルーである。3は径8mm前後、高さ6mm前後で色調はコバルトブルーを呈する。4は黒灰色を呈する二連の土玉が出土している。4はこの状態で径7mm前後、高さ9mmを測る。他の土玉は4とはほぼ同大であるが接続せず

に一個で径9mm、高さ7mmの大型品も含まれる。5は碧玉製管玉で径9.5mm、現存長22mmほどである。作りは粗雑で濃緑色を呈する。

紡錘車(図版、第67図) 供献土器A群の墓道寄りで検出した。滑石製の完形品で径42.5mm、高さ13mmである。

鉄製品(図版、第68図) 副葬品として本来はかなりの数量の鉄製品が存在したと思われるが検出したのは馬具1点だけである。大きな立聞のつく素環の鏡板で、衝あるいは引手の一部が鑲着す



第67図 古寺8号墳出土
紡錘車実測図 (1/2)

る。鏡板の素環部は外径で長径5.8cm、短径3.7cm、立聞は横幅3.4cm、高さ2cmで頂部はわずかに弧を描き、両角は丸味を有する。方形の透は長辺2.4cm、短辺5mm～6mmで上辺はわずかに弧を描く。鑲着した衝あるいは引手は断面が径5mm前後の稜をもつ円形状のもの一方を

素環部に巻き付け、他方は細くなり曲げている。曲げた方の端部は錆のためはっきりしないが破損しているように見受けられる。

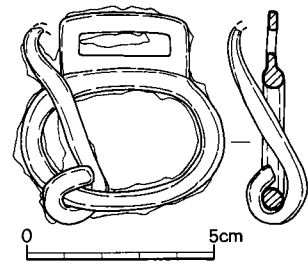
土 器 (図版44～49、第69～77図)

A・B 供献土器は別々に説明する。石室堀方出土土器もA群とともに説明し、まずA群から説明を加える。

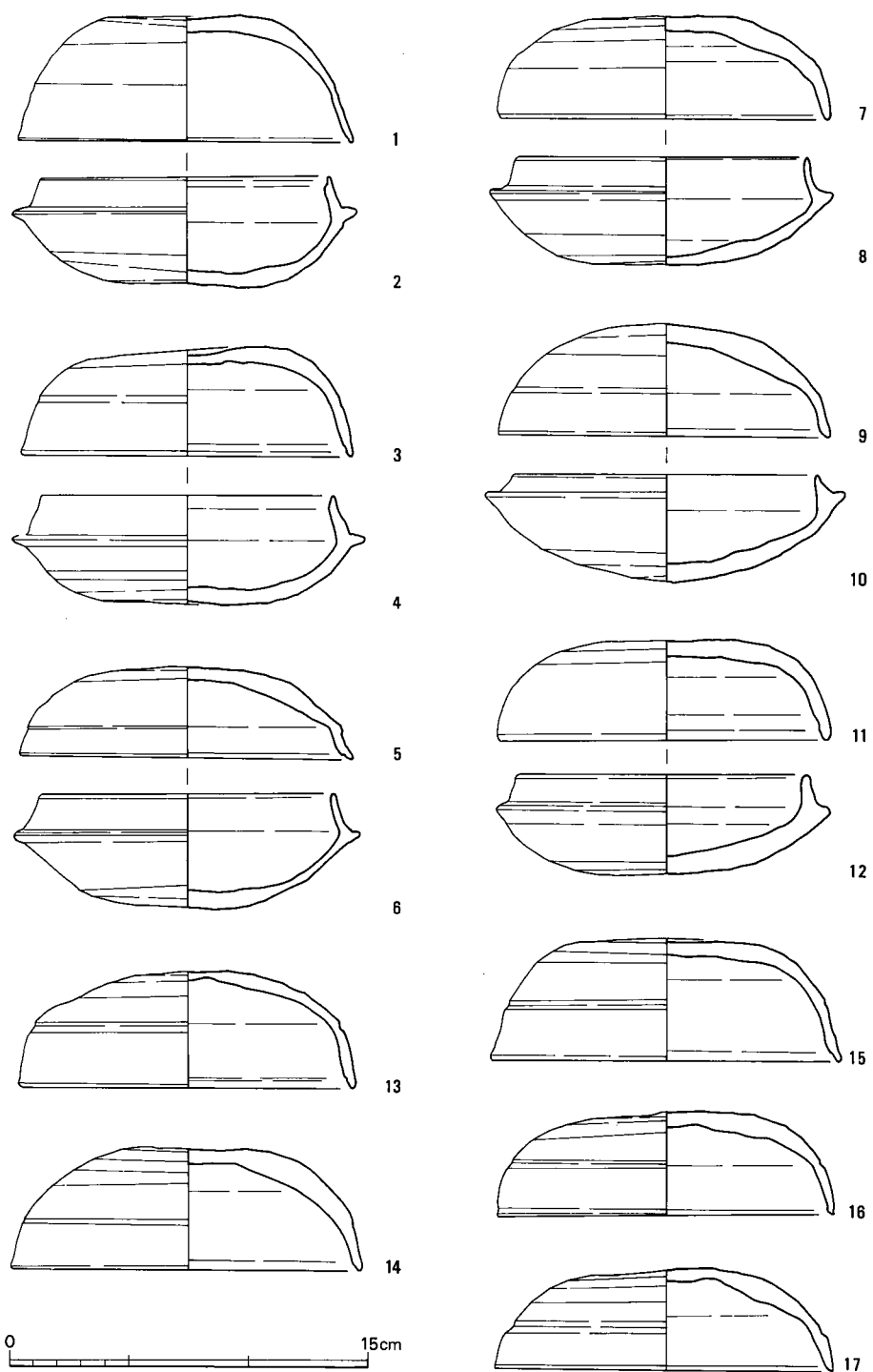
坏 (1～39・57～64) 1～39は須恵器、57～64は土師器である。須恵器は少なくとも3時期にわかれそうであるが出土状態から供献行為が数回にわたって行われたとは考えにくい。

1～12はセット関係にある。この6セットのうち、1～4の2セットは大甕75のすぐ南側に、5～12の4セットは大甕75からやや離れて北西側に供献されていた。1は口径14cm、器高5.3cmを測る。ヘラ削りの範囲は身2よりも狭い。大粒の砂粒を含み、焼成良好で暗灰色～黒灰色を呈する。2は口径12.2cm、受部径14.4cm、器高4.5cmを図る完形品である。口縁部に古式のクセを残す。大粒の砂粒を含み、焼成良好で小豆色～灰色を呈する。4は口径14cm、器高4.6cmを計る完形品である。口縁部内側に古式のクセを残し天井部と口縁部の境に浅い凹線が巡る。ヘラ削りの範囲は広い。胎土に大粒の砂粒を含み、焼成良好で暗灰色～灰色を呈する。4は口径12.4cm、受部径は14.9cm、器高4.5cmを図る完形品である。口縁部は高く、底部のヘラ削りの範囲は広い。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で暗小豆灰色～灰色を呈する。5は低平の坏蓋で口径14cm、器高3.8cmを測る完形品である。天井部と口縁部の境は段をなし、口縁部は外開きで端部は古式のクセを残す。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で暗茶灰色～黒灰色を呈し外面に自然釉がふいている。6は口径12.4cm、受部径14.4cm、器高4.8cmを測る完形品である。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で暗小豆灰色～灰色を呈する。7は口径14cm、器高4.3cmを測る完形品である。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で灰色～黒灰色を呈する。8は口径12.4cm、受部径14.4cm、器高4.5cmを測る完形品である。胎土に大粒の砂粒を多量に含み、焼成良好で暗灰色～黒灰色を呈する。9は口径14cm、器高4.7cm、を測る略完形品である。小粒の砂粒を多量に含み、焼成はやや甘く、淡青灰色～淡灰色を呈する。10口径13cm、受部径15.2cm、器高4.5cmを測る完形品である。口縁部は低い分厚い。胎土に大粒の砂粒を多量に含み、焼成は良好で灰色～黒灰色を呈する。11は口径13.9cm、器高4.2cmを測る略完形品で全体に分厚い。大粒の砂粒を多量に含み、焼成はやや甘く、褐色～淡褐色を呈する。12は口径12.4cm、受部径14.1cm、器高4.2cmを測る完形品で全体に分厚い。大粒の砂粒を多量に含み、焼成はやや甘く、淡褐色～淡黄色を呈する。

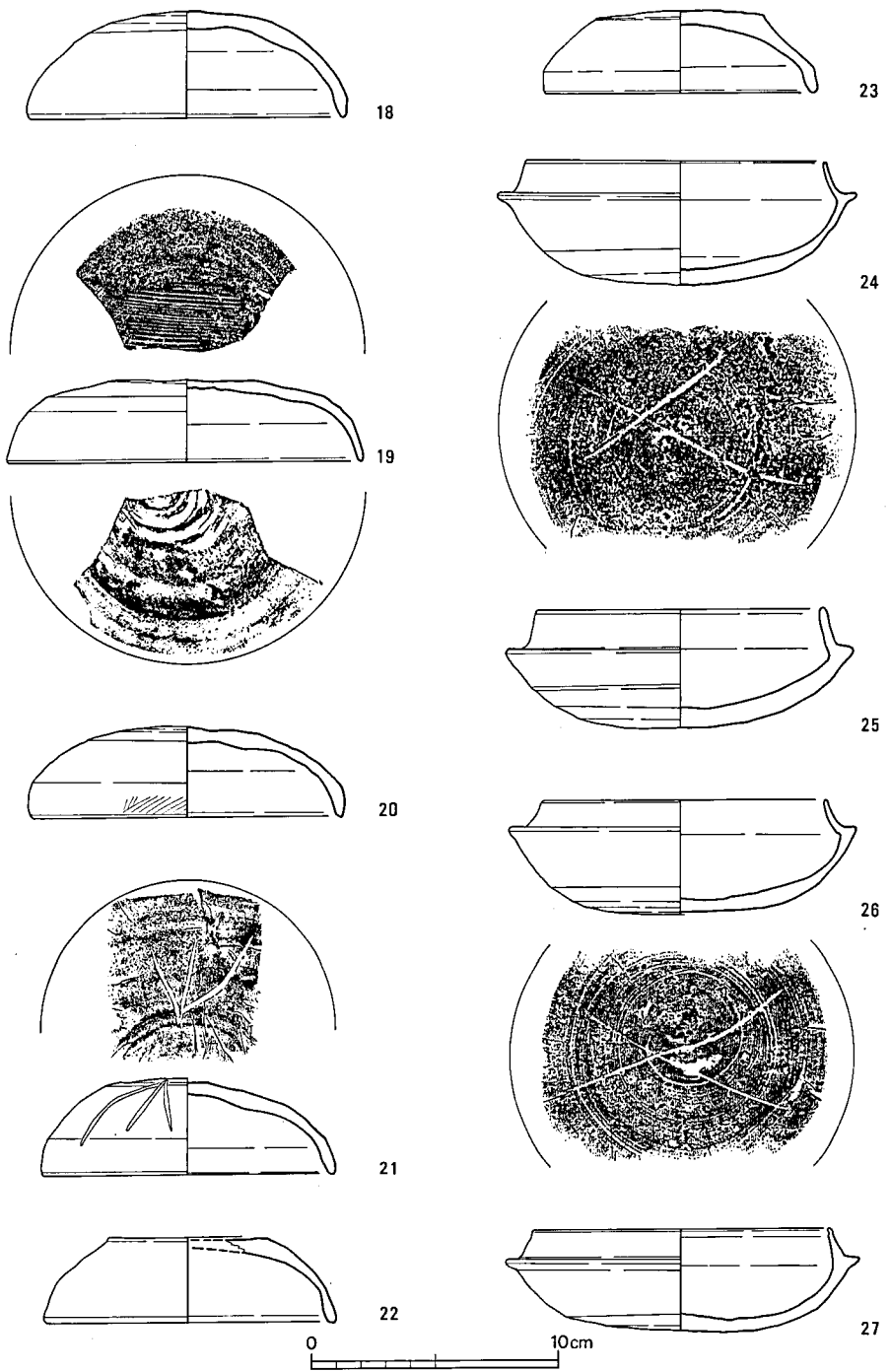
以下に説明する13～39はセット関係が不明である。13は口径14.1cm、器高4.9cmを測る略完形品で、天井部と口縁部の境に凹線を巡らし、口唇部に古式のクセを残す。大粒の砂粒を多



第68図 古寺8号墳出土馬具
実測図 (1/2)

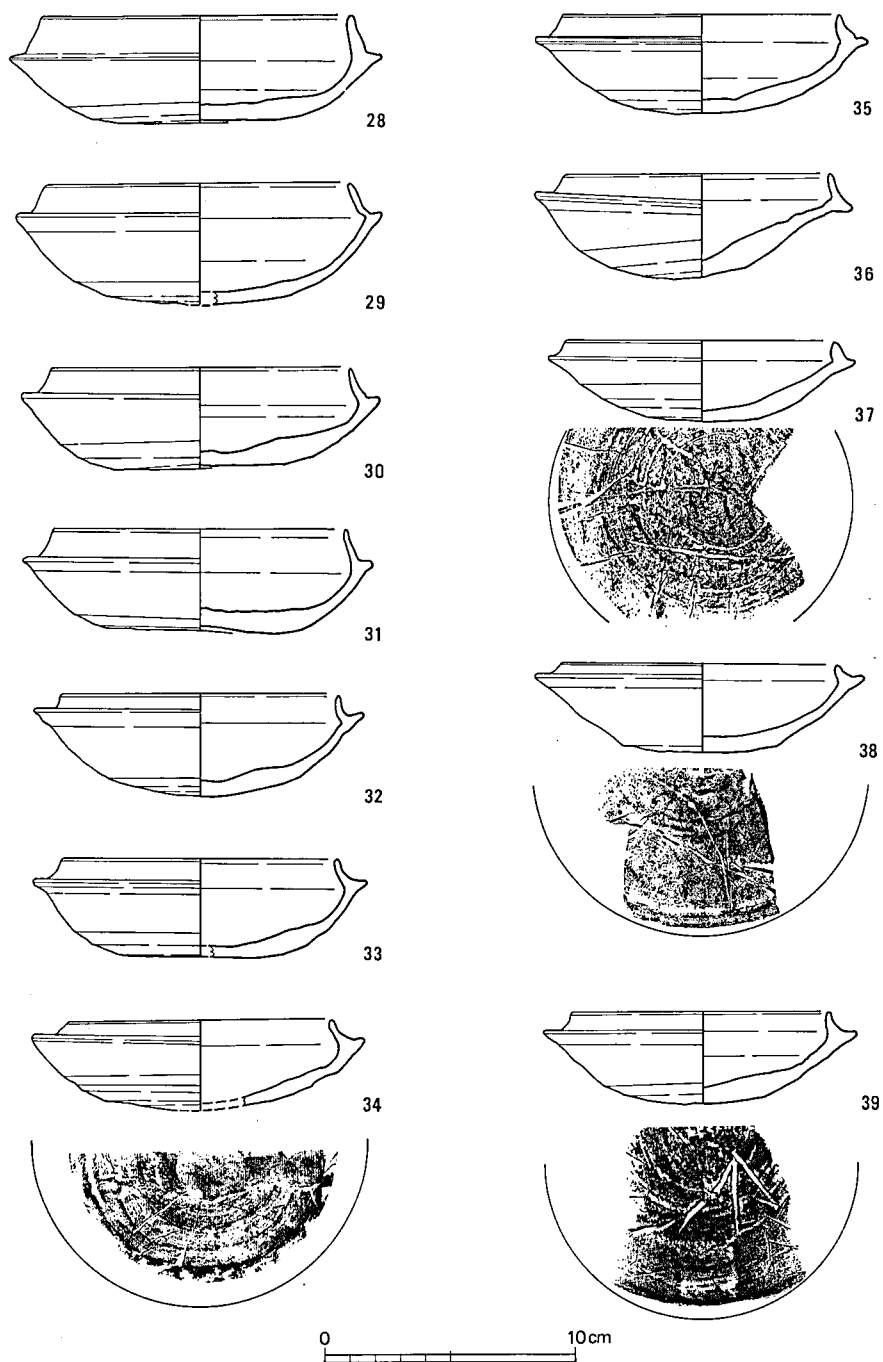


第69图 古寺8号墳出土A群供献土器实测图① (1/3)



第70图 古寺8号墳出土A群供献土器实测图② (1/3)

量に含み、焼成良好で、暗灰色～鼠色を呈する。14は提瓶53の上に検出した。口径14.7cm、器高4.4cmを測る略完形品で全体に分厚い。15は口径14.8cm、器高5cmを測る大振りの蓋である。天井部と口縁部の境に凹線を巡らし、口唇部に古式のクセを残す。砂粒を多量に含み、生焼けで茶色～暗茶色を呈する。提瓶53の南側で検出した。16は15の西側で検出した。口径14.1cm、器高4.4cmを測る完形品で、天井部と口縁部の境に凹線を巡らし、口唇部に古式のクセを残す。砂粒を多量に含み、焼成良好で赤茶灰色～黒灰色を呈する。17は16の下に検出した。口径14.1cm、器高4.3cmを測る略シンポジウムげ、天井部と口縁部の境に凹線を巡らし、口唇部に古式のクセを残す。砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色～黒灰色を呈する。18は甗41の上で検出した。口径13cm、器高4.4cmを測る略完形品である。砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。19は口径14.4cm、器高3.3cmを測る略完形品である。天井部外面部には板目状の圧痕が、暗灰色を呈する。20は口径12.7cm、器高3.7cmに復原される。口縁部は分厚くつくり外面にハケ目を施す。砂粒を多量に含み、焼成良好で暗灰色を呈する。21は口径12cm、器高4cm、に復原される。略完形品である。天井部にはへら記号がある。砂粒を多量に含み、焼成良好で暗灰色～黒灰色を呈する。22は口径11.9cm、器高3.5cmに復原される破片資料で、天井部はへらによる切り離しのままの状態である。大粒の砂粒を多量に含み、焼成良好で青灰色～黒灰色を呈する。23は口径11.1cm、器高3.4cmで、天井部は切り離しのままの状態である。焼成良好で暗赤青灰色～黒灰色を呈する。24は16の西側に検出した。口径12.3cm、受部径14.7cm、器高5.1を測る略完形品である。蓋とかぶせて焼いており、蓋の一部が受部に付着する。天井部外面にはへら記号がある。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。25は口径11.9cm、受部径14.2cm、器高4.9cmを測る完形品である。全体に分厚くしっかりと作っている。胎土に大粒の砂粒を含み、生焼けで淡茶褐色を呈する。26は24とほぼ同様な作りでへら記号についても同じものが認められる。口径11.6cm、受部径14.1cm、器高4.8cmである。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。27は短頸壺50の下に検出した。口径12.2cm、受部径14.4cm、器高4.3cmを測る完形品である。砂粒を多量に含み、焼成良好で暗灰色～緑灰色を呈する。28は坏身2の南下に検出した。口径12.5cm、受部径14.9cm、器高4.4cmを測る略完形品である。胎土に大粒の砂粒を多量に含み、生焼けで淡茶色を呈する。29は坏身2の東下に検出した1/3ほどの破片である。口径12.2cm、受部径14.8cm、器高4.8cmほどに復原される。砂粒を多量に含み、焼成良好で暗灰色を呈する。30は坏身24の下に検出した。口径12cm、受部径14.3cm、器高4.1cmを測る略完形品である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。31は28の南に検出した。口径11.8cm、受部径14cm、器高4.2cmを測る。砂粒を多量に含み、焼成良好で暗灰色を呈する。32は甗75の東に検出した。口径11.2cm、受部径13.1cm、器高4.2cmを測る略完形品である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で淡灰色～暗灰色を

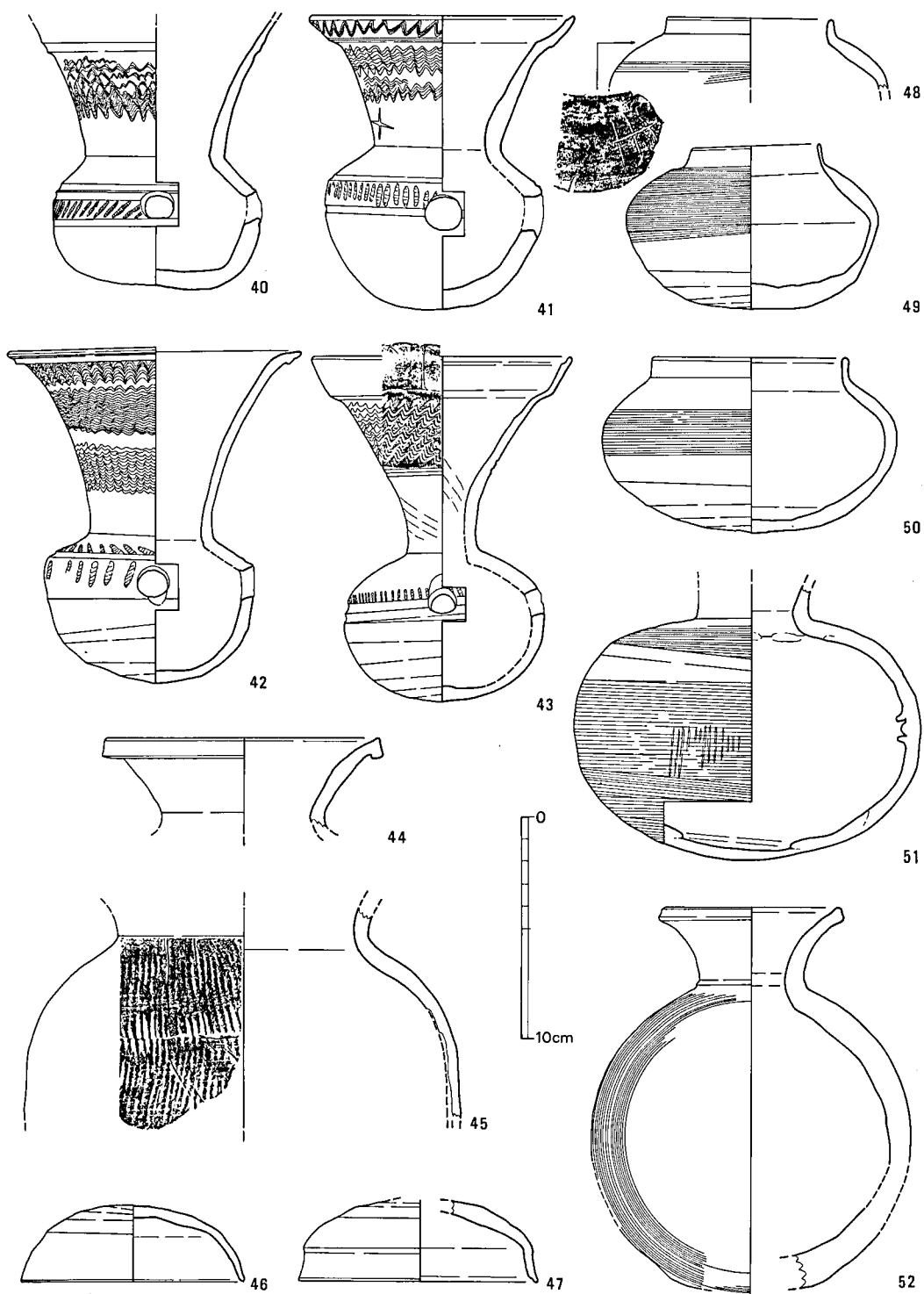


第71图 古寺8号墳出土A群供献土器实测图③ (1/3)

呈する。33は1/4ほどの破片である。口径11.2cm、受部径13.4cm、器高3.9cmほどに復原される。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色～黒灰色を呈する。34は提瓶55の西、大甕75口縁部の上に検出した1/3ほどの破片である。外底面にヘラ記号がある。口径10.7cm、受部径13.3cm、器高3.7ほどに復原される。砂粒を多量に含み、焼成良好で暗灰色～黒灰色を呈する。35は大甕75口縁部の上に検出した。口径11.2cm、受部径13.4cm、器高4cmを測る完形品である。砂粒を多量に含み、焼成良好で淡黄灰色～暗灰色を呈する。36は口径10.8cm、受部径12.3cm、器高4.2cmを測る略完形品で焼成の際に歪んでいる。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。37は坏蓋15の下に検出した2/3ほどの破片である。口径11cm、受部径12.3cm、器高3.3cmほどに復原される。外底面にヘラ記号がある。砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。38は小破片である。底面はヘラで切り離れたままの状態未調整である。口径11.2cm、受部径13.3cm、器高3.6cmほどに復原される。外底面にヘラ記号がある。砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。39は口縁部を1/3ほど欠く。口径10.4cm、受部径12.6、器高3.9cmほどに復原される。砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。外底面に坏蓋21と同じヘラ記号がある。

以下に説明する56～63は土師器で、56、57、58、59、60、61は各々セット関係にある。56・57は31の上に検出した。蓋を被せた状態ではなく身の下に蓋を検出した。蓋56号は口径13.6cm、器高5cmを測る完形品である。身57も口径11.9cm、受部径13.3cm、器高4.8cmを測る完形品である。ともに、胎土には小砂粒を含み、焼成良好で茶褐色～褐色を呈する。器面が風化しているが、ヘラ磨きの痕跡が残り、黒漆を塗布していたようである。58・59は4・27の上に検出した。検出した当時から割れており、残存状態は悪かった。蓋・身ともに小破片の反転復原図である。蓋58は口径14cm、現存高4.5cm、身59は口径12.3cm、受部径13.4cm、現存高4.6cmである。口縁部を除いて外面はヘラ削りされ、内外面に黒漆を塗布している。ともに、胎土には小砂粒を含み、焼成良好で茶褐色～褐色を呈する。60・61は短頸壺49と坏24の間に検出した。蓋60は口径13.3cm、器高4.4cm、身61は口径10.8cm、受部径13.3cm、器高4.8cmを測り、ともに完形品である。内外面とも黒漆を塗布している。ともに、胎土に小砂粒を含み、焼成良好で茶褐色～暗茶褐色を呈する。61は小破片の反転復原図である。口径14.2cm、現存高4.3cmである。天井部外面はヘラ削りの上にヘラ磨きの痕跡がある。内外面とも黒漆を塗布している。胎土には小砂粒を含み、焼成良好で褐色を呈する。63は坏18の下に検出した。一部を欠損するが口径13.3cm、器高5.4cmを測る。内外面とも黒漆を塗布している。胎土には小砂粒を含み、焼成良好で淡褐色を呈する。

虜(40～43) 40は甕73の西に検出した。口縁部を欠き、現存高12.3cm、胴部最大径9.5cmを測る。頸部上半に波上文を、胴部中位に刻目を施す。砂粒を多量うに含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。41は坏18の下に検出した。口径12cm、器高13.4cm、胴部最大径9.9cmを

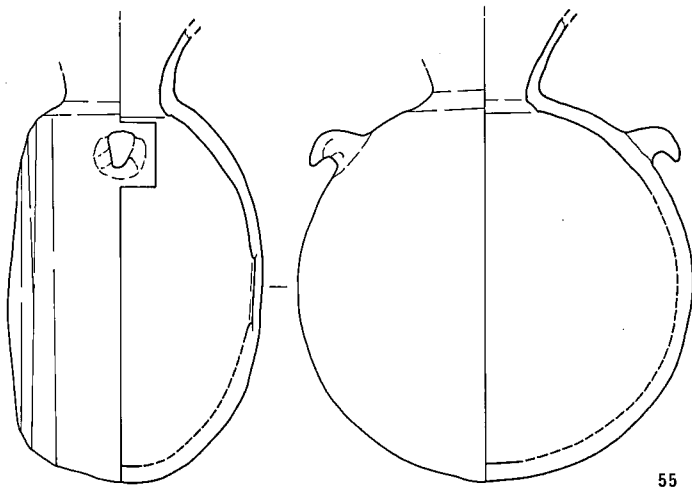
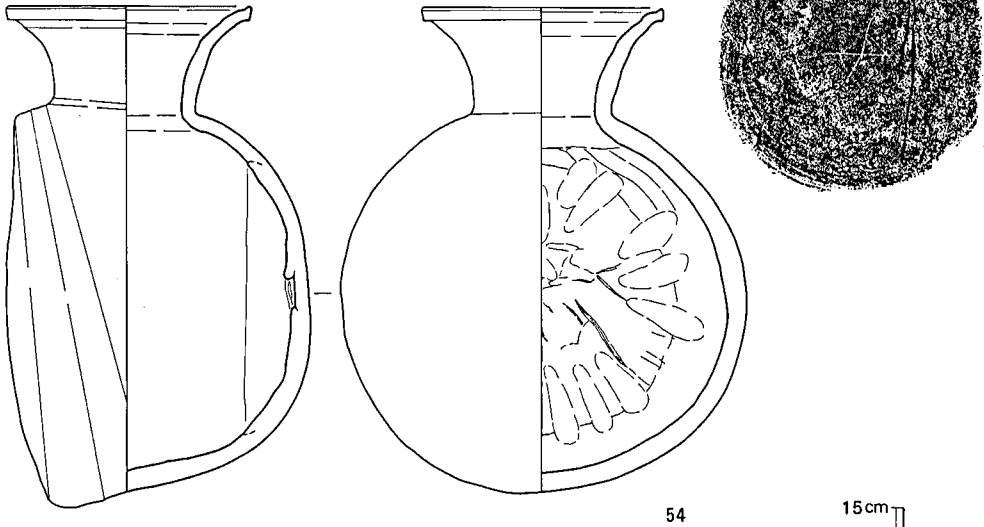
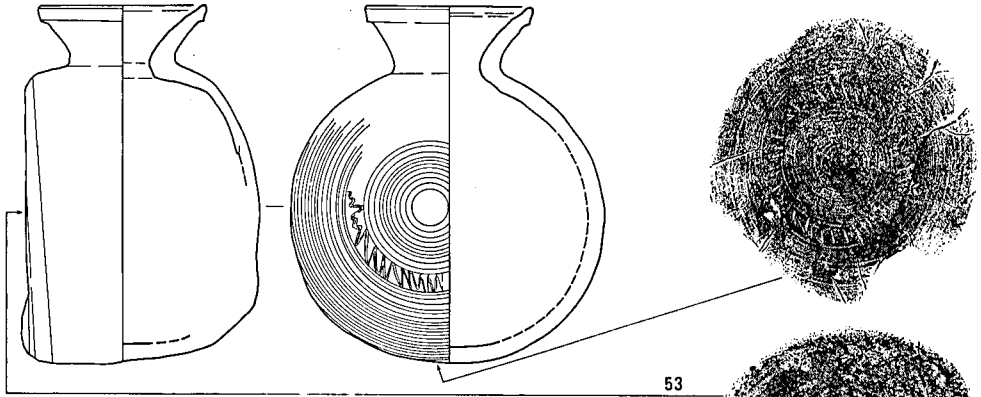


第72图 古寺8号墳出土A群供献土器实测图④ (1/3)

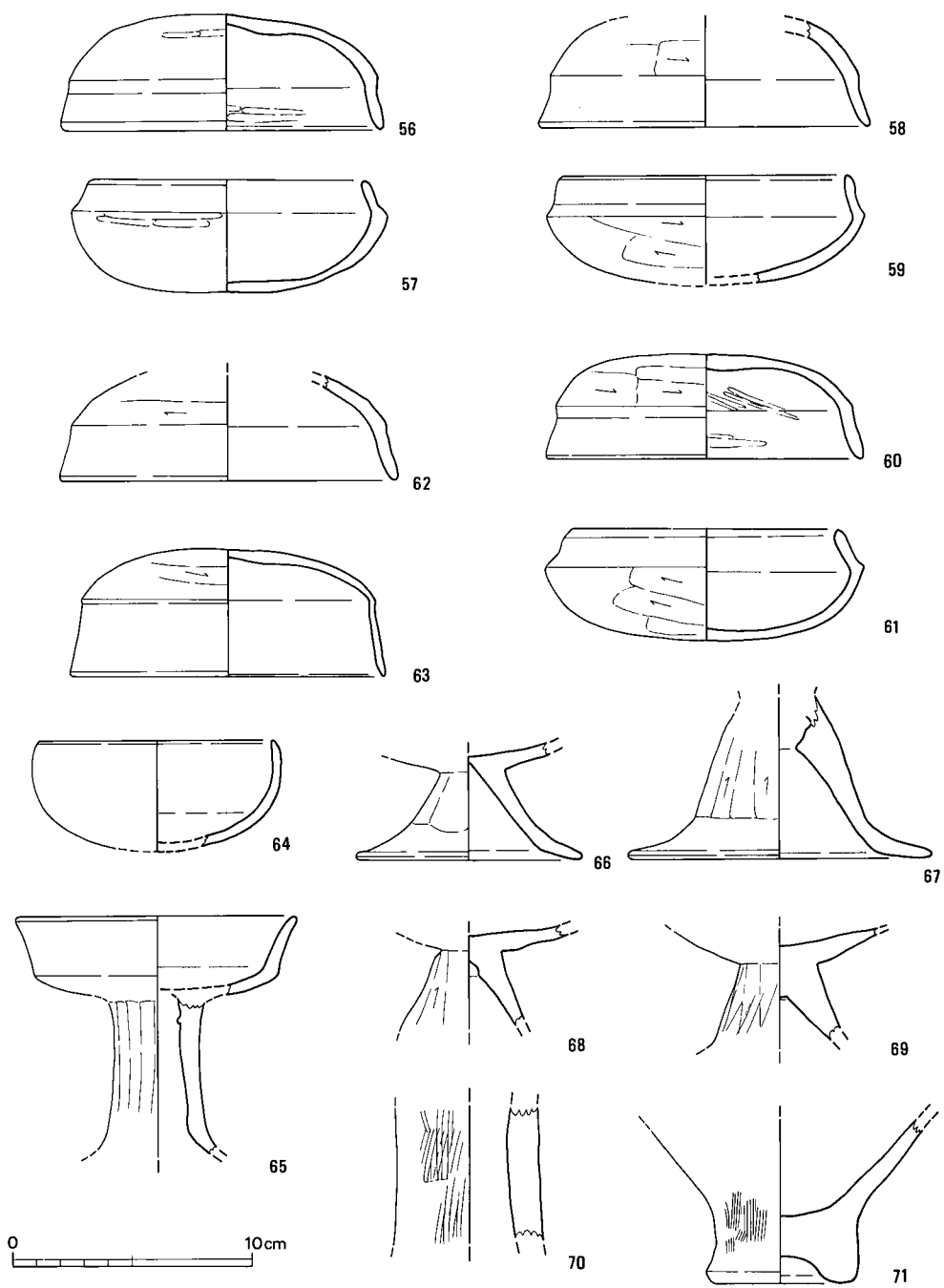
測る。口縁部と頸部上半に波状文を、胴部中位に刻目を残す。頸部下半にヘラ記号がある。砂粒を多量に含み、焼成良好で淡灰色～暗灰色を呈する。42は口径13.3cm、器高15.3cm、胴部最大径9.5cmを測る。口頸部上半に波状文を、胴部上半に二段にわたって刻目を施す。砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色～黒灰色を呈する。43は甕72の上に検出した。口径11.9cm、器高15.8cm、胴部最大径9.3cmを測る。頸部上半に波状文を、胴部中位に刻目を施す。大粒の砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。

壺（46～51）46・47は短頸壺の蓋である。46は口縁部をわずかに欠くが口径10cm、器高3.5cmを測る略完形品である。砂粒を多量に含み、焼成良好で緑灰色～暗灰色を呈する。47は小破片で口径10.9cmに復原され現存高3.7cmである。外面は灰を被っている。焼成良好で短灰色～暗灰色を呈する。48～50は短頸壺である。48は小破片で口径7.7cmに復原され現存高3.2cmである。蓋を被せて焼いており、カキ目の直上から口縁部にかけては灰色でそれ以下は黒色を呈する。蓋の口径10.5cmほどである。また、肩部にはヘラ記号がある。胎土に多量の砂粒を含み、焼成は良好である。49は短頸壺50と並んでともに倒立した状態で出土した。口縁部を2/3ほど欠くが口径6cm、に復原され、器高7.5cmを測る。底部を分厚く作り、安定感がある。胴部上半は細かいカキ目調整を行う。胎土に多量の小砂粒を含み、焼成は良好で短灰色～灰色を呈する。50は49に北接して倒立した状態で出土した。口縁部を一部欠くが口径9.1cm、器高8cmを測る略完形品である。51は石室堀方の北東済の底面近くに検出した長頸壺である。石室に副葬されたものであろう。底部は提瓶の背分のように後で粘土を塗りつけて作っている。また、胴部中位の内面は竹管の圧痕が残る。一部にタタキ目残り、カキ目調整後に肩部にヘラ削りを施している。現存高12.5cm、胴部最大径15.9cmである。胎土に多量の砂粒を含み焼成良好で暗灰色～黒灰色を呈する。

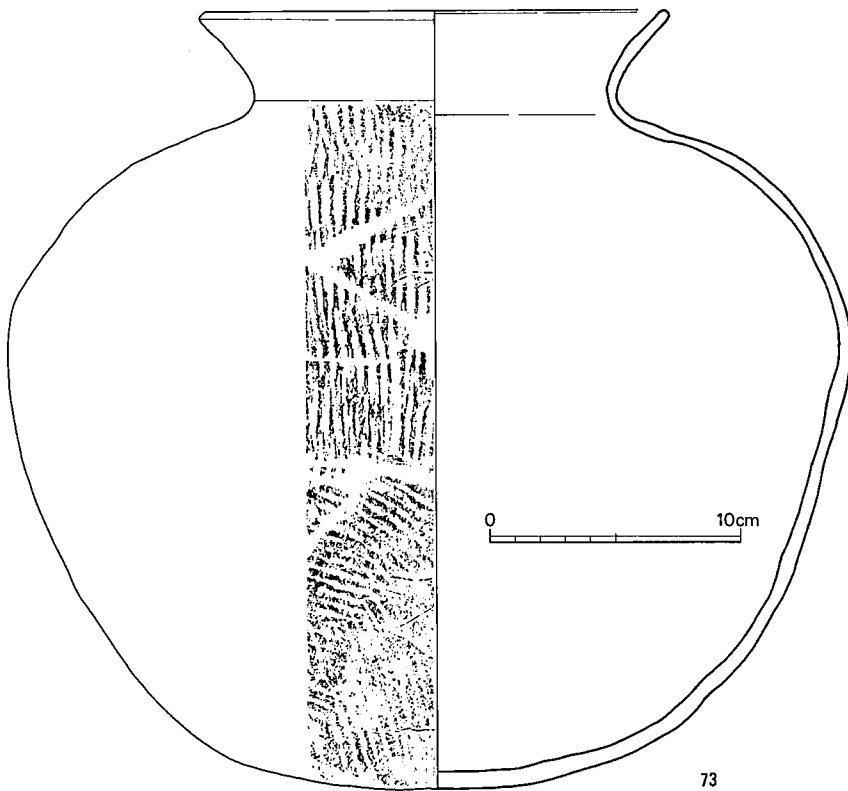
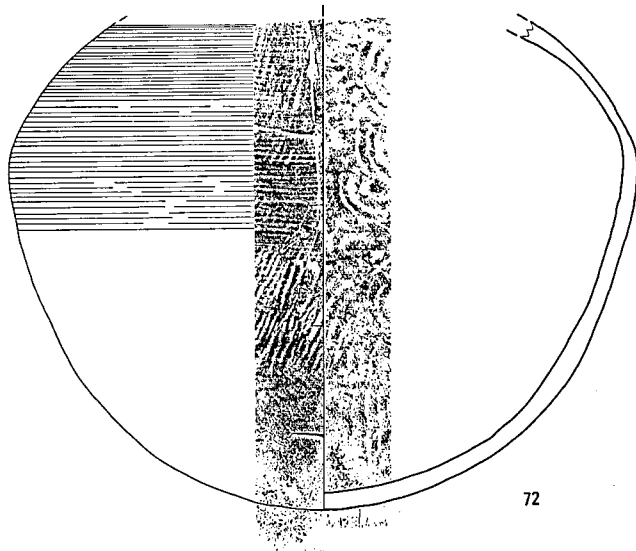
提瓶（52～55）51は1/4ほどの破片の反転図である。残り具合が悪いため一方向からだけの図しか掲載できない。口径8.3cmに復原され現存高17.6cmを測る。胎土に大粒の砂粒を含み、焼成良好で暗灰色～黒灰色を呈する。53は坏14の下に検出した。口径9.1cm、器高24.1cm、胴部最大径16.9cm、胴部と背部の最大幅12.5cmを測る完形品である。背部はカキ目調整を施し、中程に波状文で加飾する。腹部にはヘラ記号がある。胎土にわりと大粒の砂粒を多く含み、焼成良好で淡黄灰色～黒灰色を呈する。54は甕73の南側で甕に立てかけた状態で検出した。口縁部の一部を打ち欠いている。口径13cm、器高26cm、胴部最大径21.6cm、腹部と背部の最大幅16.2cmを測る略完形品である。背部は指によりナデつけられた痕跡が残る。大粒の砂粒を含み焼成はおおむね良好だが底部に生焼けの部分があり、灰色～暗灰色を呈する。55は提瓶54の南に並んだ状態で検出し、大甕75の体部破片に立てかけられていた。他の提瓶にはなかった把手がある。また口縁部を完全に打ち欠いている。現存高25.1cm、胴部最大径21cm、腹部と背部の最大幅13.6cmを測る。大粒の砂粒を含み、焼成良好で淡灰色～茶灰色を呈する。



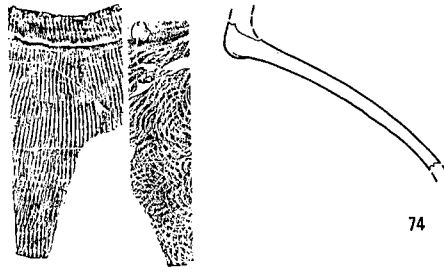
第73图 古寺8号墳出土A群供献土器实测图⑤ (1/4)



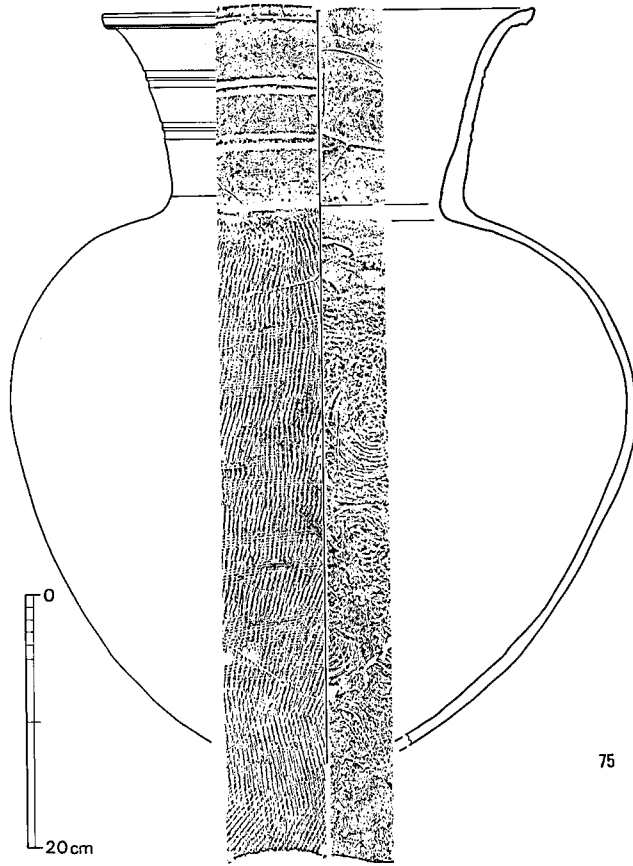
第74图 古寺8号墳出土A群供献土器实测图⑥ (1/3)



第75図 古寺8号墳出土A群供献土器実測図⑦ (1/3)



74



75

第76图 古寺8号墳出土A群供献土器実測図⑧ (1/6)

埴 (64) 墳丘西側のトレンチで検出した土師器の埴で、本来的には供献土器 A 群に伴うと思われる。小破片で、口径10cmに復原され、現存高4.4 cmである。小砂粒を多量に含み、焼成は普通程度で淡褐色を呈する。

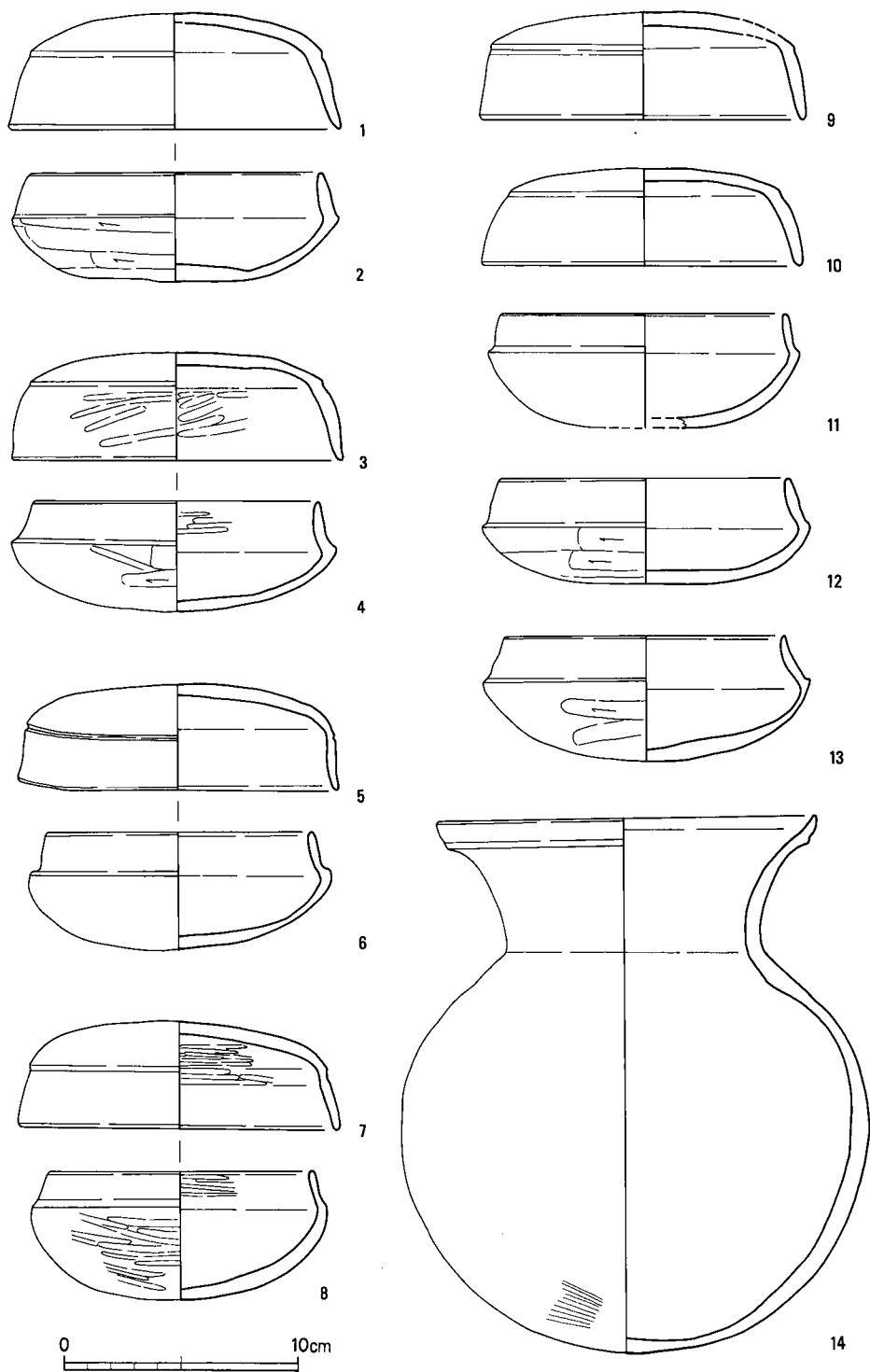
高 坏 (65~69) 土師器で、破碎されているため全形を知りえない。65は甕72の北東側で検出した。坏部と脚部は接合しないが、おおむね口径12cm、現存高10cmほどを測る。小砂粒を多量に含み、焼成良好で淡褐色を呈する。66は提瓶54・55の上に検出した。坏部を欠くが脚裾部径9.5cm、現存高4.9cmを測る。小砂粒を多量に含み、焼成は普通程度で褐色を呈する。67は出土品中では大型の高坏である。坏部を欠き、脚裾部径12.8cm、現存高6.2cmを測る。小砂粒を多量に含み、焼成は普通程度で淡褐色を呈する。68は大甕75の横で検出した。坏部・脚部の大半を欠く。小砂粒を多量に含み、焼成は普通程度で淡褐色を呈する。69は供献土器群の南端の短頸壺49の南側で倒立した状態で検出した。坏部・脚部の大半を欠く。小砂粒を多量に含み、焼成は普通程度で淡褐色を呈する。

甕 (72~75) 72は供献土器群の北側に破碎された状態で検出した。肩部から上を打ち欠いており口縁部は見つからなかった。現存高19.5cm、胴部最大径25.2cmを測る。小砂粒を多量に含み、焼成は甘く茶灰色を呈する。73は甕72の南に破碎された状態で検出した。口径18.8cm、器高31.1cm、胴部最大径33.6cmを測る。かなり大粒の砂粒を多く含み、焼成は甘く軟質で淡褐色を呈する。74は大甕の破片である。75は底部と口縁部を打ち欠いているが口縁部は体部の横に割られたままの状態出土した。供献土器群の中心となる祭器である。口径34.3cm、現存高58.8cm、胴部最大径48.6cmを測る。口縁部は2条一単位の凹線を二段に入れて3分割し、分割された上二段を波状文で加飾する。胎土に大粒の砂粒を多量に含み、焼成良好で灰色~暗灰色を呈する。

弥生土器 (70・71) 供献土器 A 群に混じって弥生土器 2 点が出土している。70は高坏の脚部、71は甕の底部の破片である。この周辺に弥生時代の遺構がかつて存在した可能性がある。

以上が A 群供献土器と石室掘り方内出土品等である。以下、B 群供献土器について説明する。B 群供献土器は先述のように小型品で占められる。B 群では小型の甕14が唯一の大型品でかつ須恵器である。

坏 (1~13) すべて土師器である。1・2、3・4、5・6、7・8は各々でセット関係にある。1・2は蓋1が土圧により壊れた状態で検出した。蓋1は口径14.2cm、器高5cm、身2は口径12.6cm、受部径14cm、器高14.8cmである。蓋1の天井部外面はヘラ磨きの痕跡がわずかに残るが身2の底部外面はヘラ削りのままである。ともに胎土に砂粒を含み、焼成良好で淡褐色~褐色を呈する。3・4も1・2とほぼ同様な出土状態を示している。蓋3は口径14.2cm、器高4.7cm、身4は口径12.2cm、受部径13.9cm、器高4.8cmを測る。ともに内外面を



第77图 古寺8号墳出土B群供献土器実測図 (1/3)

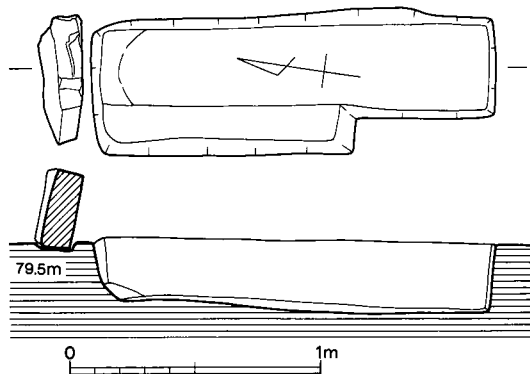
へら磨きする。胎土に小砂粒を多量に含み、焼成良好で淡褐色～褐色を呈する。5・6は甕14の北側に検出した。破片が散乱しているので割られた可能性がある。蓋5は口径13.8cm、器高4.6cm、身6は口径11.5cm、受部径13cm、器高5.1cmである。蓋5の天井部外面はへら磨きの痕跡がわずかに残るが身6の底部外面は風化しておりへら削りの痕跡だけが見える。ともに胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色～褐色を呈する。7・8はこの供献土器群の北端に割られて散乱した状態で検出した。内外面ともへら磨きを行う。蓋7は口径13.5cm、器高4.6cm、身8は口径11.5cm、受部径12.7cm、器高5.5cmである。この身は他の身と違って器高が高く壙状を呈する。ともに胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で淡褐色を呈する。9は10とともに3・4の東側に検出した。蓋9は口径14.1cm、器高4.6cmを測る略完形品である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で淡褐色を呈する。風化しているため調整痕が残らない。蓋10は口径13.5cm、器高4.2cmを測る略完形品である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で淡褐色～褐色を呈する。風化しているため調整痕が残らない。身11は供献土器群の南端に割れた状態で検出した破片である。口径12.4cm、受部径13.3cm、器高5cmほどに復原される。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で淡褐色を呈する。身12は1・2の東に検出した完形品である。口径12.6cm、受部径14.1cm、器高4.7cmを測る。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で褐色を呈する。身13は身12と一部重なって12の北側に検出した。口径11.2cm、受部径14cm、器高5.4cmを測る完形品である。大粒の砂粒を多量に含み、焼成良好で淡茶褐色～褐色を呈する。

壺(14) 5・6の南側に検出した須恵器の生焼けの壺である。口径16.3cm、器高23cmを測る略完形品である。大粒の砂粒を含み、淡灰色を呈する。

6. 土壌墓

(図版31、第78図)

7号墳の南に単独で検出した。4号墳の内部主体として2基の土壌墓は本例だけである。本来は二段掘りであったようだが削平されており、一段目は一部しか残らない。北側に一個の石を立てている。二段目掘り方は主軸長1.62m、幅45cm、深さ27cmほどである。



第78図 土壌墓実測図 (1/30)

7. 小 結

既述のように、菩提寺古寺古墳群B支群においては東西に走る瘦尾根状に7基（4～10号墳）の古墳が存在し、そのうち路線内の5基（4～8号墳）について調査を実施したが4号墳は四世紀の古墳で他は六世紀のものであった。特に後者については2基で対になるような配列を示し、また、墳丘内に供献土器群が検出された。

4号墳については、地山を整形した範囲内の後円部に相当する中央部と前方部に相当する部分の主軸線に沿って各1基の主体部が構築されていることから前方後円墳と考えた。低墳丘で通常見られるような典型的な前方後円墳からかけ離れた形状を呈し、内部主体も堅穴式石室ではなく土壙墓であり、副葬品も伴わない。本古墳群南方約5Kmの神蔵古墳（註13）は堅穴式石室を内部主体とし、三角縁神獸鏡を副葬する主軸長40mほどの帆立貝式前方後円墳であるが、4号墳はこれと比較して内容的に格段の差があり、政治的ヒエラルキーにおける被葬者の質的な差が古墳の内容に明確に反映されている。次に4号墳の南側の溝の方向については、古墳の等高線とは整合せず、4号墳に伴うと判断する積極的な根拠に欠けるが、溝出土の土師器と時期的に近い遺構がほかに存在しないので、消極的な理由から本墳に伴う可能性を考えた。路線の南側が調査される機会があれば、この溝と土器の性格が明確となる。

B支群における六世紀代の古墳（5～8号墳）の配列については、2基一對と見受けられる状態を示している。5・6号墳については墳裾が接近して構築され石室の開口方向は前者が西、後者が東と反対で同一方向に石室の向きを統一できなかった面もあるが、出土土器から5号墳が6号墳に先行して構築されており、墳丘・石室の規模も5号墳が勝る。これらの4基は2基づつが互いに新旧関係になり、後続して構築された6・8号墳はそれぞれ先行する5・7号墳の石室の開口方向を意識しているようである。未調査で内容は不明であるが9・10号墳も互いに接近しており、前記のような関係を想定できそうである。このように、B支群においては一家族が2基づつの古墳を構築したのではないかと推測する。なお、本古墳群の横穴式石室はすべて複次葬である。

5～8号墳は石室奥壁に向かって左側の第一次墳丘裾部において供献土器を検出した。6号墳ではその部分の墳丘が流出しているため正確な位置を確認していないが、盛土除去の作業中に出土した土器は他の3基と同じく石室奥壁に向かって左側の第一次墳丘裾部であった。本古墳群では土器の供献位置に共通性があり、群集墳の送葬儀礼を考える上で供献土器の検討は重要な要素を占めてこよう。

第4章 おわりに

菩提寺古寺古墳群（以下、古寺古墳群と略す）は南北に走る細い谷を挟んで、西側にA支群（1～3号墳）、東側にB支群（4～10号墳）が存在し、そのうち路線外の9・10号墳をのぞいて8基を調査した。前章で説明したように両支群ともほぼ同様な内容の古墳から構成されるが、両支群の四世紀代、六世紀代の古墳を相互に比較すれば、その性格、在り方に相違点を指摘することができる。両支群はほぼ同時期に構築されており、大きく見れば西方の持丸古墳群（註14）とともにひとつの墓地として把握されようが、造墓の母体となった小集団の違いが占地の差となって現れている。すなわち、持丸古墳群・古寺A支群・古寺B支群の3小集団である。群集墳についてはほぼ六世紀中葉をややすぎたところに造墓活動を開始し、最終的な追葬は六世紀末～七世紀初めころである。またこの3丘陵に四世紀代の古墳も構築されている。

(1) 前期古墳について

四世紀代ころの古墳については、持丸古墳群では箱式石棺・石蓋土壙を内部主体とする4基の低墳丘墓（5～8号墳）が、古寺A・B支群では各1基の前方後円墳が構築されている。各古墳の規模・内容を簡単に記せば以下のようである。

- ・持丸5号墳……径17.3～19m、高さ2mの円墳で箱式石棺を内部主体とする。副葬品はない。
- ・持丸6号墳……径11の円墳状を呈し2墓の箱式石棺を内部主体とする。副葬品はない。
- ・持丸7号墳……方墳を呈すが墳形は不明。50cmほどの盛土がある。箱式石棺を内部主体とする。滑石製白玉71個を副葬する。
- ・持丸8号墳……墳形は不明。10cmほどの盛土が残る。石蓋土壙を内部主体とする。副葬品はない。
- ・古寺2号墳……帆立貝式前方後円形を呈し、主軸長30m、後円部径25m、前方部長5m、後円部高3.5mほどで最厚部で50～60cmの盛土が残る。木棺を内部主体とし200個以上の玉を棺外副葬する。
- ・古寺4号墳……前方後円形を呈し、主軸長20m、後円部径10m、同高さ1m、前方部長10m、同高さ0.8mほどで最厚部で50cmの盛土が残る。内部主体は2基で木棺の可能性を残す土壙墓である。副葬品はない。

このように、持丸古墳群では内部主体は箱式石棺が主体を占めるが古寺古墳群では箱式棺は見られず木棺あるいは土壙である。また、両古墳群間で墳形においても明確な相違が見ら

れ規模・内容ともに傑出するのは古寺2号墳である。構築順序を明らかにする積極的根拠に乏しいが、箱式石棺の床面に玉石を敷きつめ、滑石製臼玉を副葬する持丸7号墳が最も新しい様相を呈する。占地の面だけから見れば持丸古墳群では5号墳が最好所に、一墳二葬の6号墳が次に良い場所に構築され、5→6→7→8号墳という順が考えられるが、先述のように持丸古墳群では7号墳が最も新しいと考えらる。6号墳については一墳二葬であるが一墳一葬の5号墳との新旧関係は必ずしも一墳多葬の6号墳が古いという根拠に乏しく、これらを勘案すれば5→6→8→7号墳という順が想定される。古寺古墳群では2→4号墳という順が想定される。古寺古墳群の2・4号墳については前方後円形を呈し、持丸古墳群は円・方形を呈する古墳であり、古墳の平面形の相違が被葬者の生前の社会的な地位、すなわち、政治的ヒエラルキーの中における位置を如実に表現すると考えられる。古寺古墳群と持丸古墳群との時期差を示す積極的な資料はなく、両古墳群はおおむね併行して構築され、持丸古墳群の被葬者は古寺古墳群の被葬者の下位の階層に属していたと考えられる。また、構築時期の問題があるが、両古墳群は南方5kmの神蔵古墳(註15)と比べて規模・内容において格段の差があり、神蔵古墳の被葬者は初期首長墓としての位置を占め、持丸古墳群・古寺古墳群の被葬者は、神蔵古墳の被葬者に連なる階層に属する地域の小首長層であったと考えられる。

(2) 群集墳について

古寺古墳群は小規模な群集墳で、持丸古墳群も含めて一連の群集墳とみなされる。すなわち第2図(7頁)で明らかのように両古墳群は指呼の間にあり、石室構造や出土須恵器によれば構築・追葬時期はほぼ重なっており、先述のよう古寺A支群・古寺B支群・持丸支群の3支群として把握される。

古寺A支群は円墳2基からなり、B支群のように2基一対として把握できる在り方はせず、石室は玄室に羨道が接続するものであり構造的には古寺B支群・持丸支群と比較してやや新しいものである。また、供献土器などの出土須恵器も他の2支群の追葬時期のものである。古寺B支群は円墳4基を調査し、石室は玄室に前庭部が接続するもので構造的には持丸古墳群と同様で古寺A支群より古い。持丸古墳群は円墳4基が調査され、図や写真によれば石室の構造と初葬時の出土須恵器は古寺B支群とほぼ同様である。したがって、古寺A支群は古寺B支群・持丸支群にやや遅れて構築を開始し、ほかの2支群の追葬時期と重なるようである。

副葬品は3支群ともほぼ共通している。古墳個々においては存否の差があるが、各群ごとに見れば、馬具、刀・鉄鏃などの武器、刀子・鎌・鉄斧などの農具、耳環・玉類などの装身具は共通してみられる。装身具、とりわけ玉類の副葬例の多いことが特徴である。また、耳環・玉類や出土土器の中には同一工人の手になると思われるものが支群間を越えて副葬、供献された例も見受けられる。

供献土器は、古寺3号墳・持丸4号墳については墳丘の遺存状態が悪く不明であるが、そのほかの古墳では基本的には石室奥壁に向かって左側の墳丘内で、第一次墳丘の墳裾部に相当する部分で検出した。古寺8号墳は石室奥壁に向かって左右の墳丘内に供献土器を検出したが、持丸2号墳は奥壁背後4mほどの部分の土壌に大甕を破碎して置いており、この2古墳だけは供献行為の面で他の古墳と相違している。しかし供献土器の出土位置は第一次墳丘の墳裾部に相当する部分であることは共通している。すなわち、石室完成後に供献行為を行っており、盛土をすべて終了し本来意図した古墳が完成した時点では、墳丘内に存在するわけである。追葬時の供献土器は墳丘裾部からは検出されておらず、玄室内に副葬品として土器を納めている。このように、これらの古墳群では石室完成後にのみ土器を使った供献行為を行い、第一次墳丘の墳裾部において土器群が検出される。しかるに、古寺8号墳の供献土器A群では、時期差のある土器を一括して検出したのだ。このことは、供献行為が数回にわたって行われたのか、時期差のある土器を使って供献行為を行ったのかのいずれかの場合が想定される。が、前者の場合は石室の構築から墳丘の完成までかなりの時間を要したことになり、後者の場合は祭器としての土器になぜ時期差のある土器を使用したのか問題となる。今回の調査では土器の出土状態を平面的に把握したにすぎず、墳丘盛土との関係を詳細に把握していないので時期差のある土器の一括出土については他の要因を推測するには資料的に不足している。今後の調査方法を検討してみる必要があり、この問題の解決は将来の課題として残る。この問題はさておき、本古墳群では供献土器の中で中心的な役割を果たすのは大甕のようである。出土状態を把握できた古寺1・5・8号墳では大甕を多用する例(1号墳)、大甕を中心に他の土器を配置する例(5・8号墳)がある。また持丸2号墳では先述のように特殊な扱いをされている。供献土器の組成と数量については前章に示しているが、瘦尾根に構築された古墳群であるため墳丘の流出によって失われたものも予測されその実態を正確につかみえない。古寺古墳群の場合、1号墳では大甕が多く坏が少なく、5・8号墳では大甕・坏とも存在するが、8号墳は坏の多用が目立っている。須恵器と土師器の使われ方等も含めて供献土器の含む問題は多岐にわたってはいるが、その検討については力量不足故に、将来の課題として残しておく。

本群集墳は六世紀中葉をやや過ぎたころから造墓活動を開始し、すくなくとも六世紀末ころまでは追葬が行われて埋葬行為が継続されている。この時期に重なるように構築された鬼の枕古墳(註16)は、本群集墳から南方700mほどの位置にあり、両者の関係は極めて密接なものであったと思われる。六世紀後半ころの首長墓たる鬼の枕古墳の被葬者の直接支配を受けた可能性が高く、武器・馬具等を副葬する本群集墳の被葬者は、ムラの長ではありながらも社会的・政治的には鬼の枕古墳の被葬者の支配を受け、非常時には一定の集団を率いて戦闘に参加する小集団管理者の立場であったろう。しかし、装身具と農工具の副葬品から、通常は農耕を主体とする集団を率いた地域的な小首長層であったろうと考えられる。

註

- 1 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-4-(柿原古墳群Ⅰ)1984
- 2 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-6-(柿原古墳群Ⅱ)1986
- 3 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-12-(柿原古墳群Ⅲ)1987
- 4 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-19-(柿原古墳群Ⅳ)1990
- 5 甘木市教育委員会『持丸古墳群』(甘木市安川町大字持丸所在古墳群の調査 甘木市文化財調査報告第1集) 1974
- 6 甘木市教育委員会『鬼の枕古墳』(福岡県甘木市大字菩提寺所在古墳の調査 甘木市文化財調査報告第19集) 1987
- 7 1990年九州大学調査
- 8 夜須町教育委員会『小隅窪跡群Ⅰ』(福岡県朝倉郡夜須町大字下高場所在遺跡調査報告 夜須町文化財調査報告書第12集) 1988
- 9 甘木市教育委員会『古寺墳墓群Ⅱ』(甘木市大字菩提寺後牟田所在の古墳および古墳時代墳墓群の調査 甘木市文化財調査報告第15集) 1983
- 10 註9と同
- 11 甘木市教育委員会『池の上墳墓群』(福岡県甘木市大字堤字池の上所在古墳時代墳墓群および歴史時代火葬墓群の調査 甘木市文化財調査報告第5集) 1979
甘木市教育委員会『古寺墳墓群』(甘木市大字菩提寺字古寺所在の古墳時代墳墓群 甘木市文化財調査報告 第14集) 1982
甘木市教育委員会『古寺墳墓群Ⅱ』(甘木市大字菩提寺後牟田所在の古墳および古墳時代墳墓群の調査 甘木市文化財調査報告第15集) 1983
- 12 甘木市教育委員会『小田茶臼塚古墳』(福岡県甘木市大字小田所在古墳の調査 甘木市文化財調査報告書 第4集) 1979
- 13 甘木市教育委員会『神蔵古墳』(福岡県甘木市大字小隅所在古墳の調査 甘木市文化財調査報告書 第3集) 1978
- 14 註5と同
- 15 註13と同
- 16 註6と同

版 图



菩提寺古寺古墳群A支群全景（北東上空から）



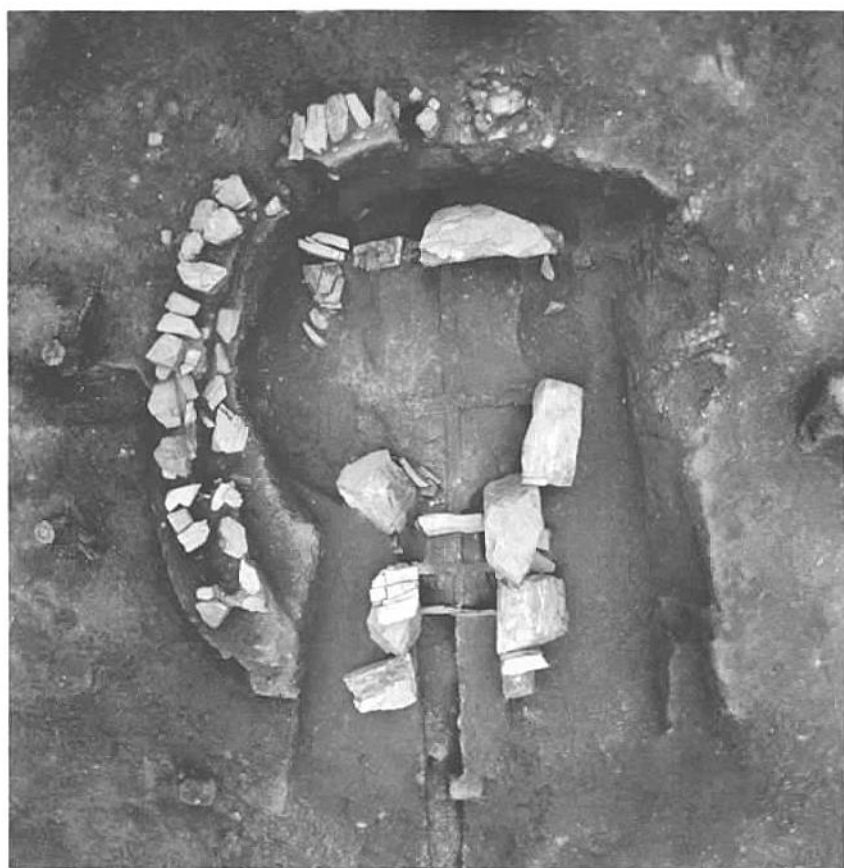
菩提寺古寺古墳群A支群全景（南西上空から）



菩提寺古寺古墳群A支群遠景（西から）



菩提寺古寺古墳群1～3号墳（北上空から）



(上) 菩提寺古寺古墳群 1号墳全景
(下) 菩提寺古寺古墳群 1号墳石室全景



菩提寺古寺古墳群 1 号墳玄室一次床面



菩提寺古寺古墳群 1 号墳玄室二次床面



菩提寺古寺古墳群1号墳石室全景



菩提寺古寺古墳群1号墳玄門と羨道



菩提寺古寺古墳群 1号墳前室状遺溝と閉塞状況



同上閉墓石除去後の状況



菩提寺古寺古墳群 1 号墳玄室二次床面遺物出土状態



同上



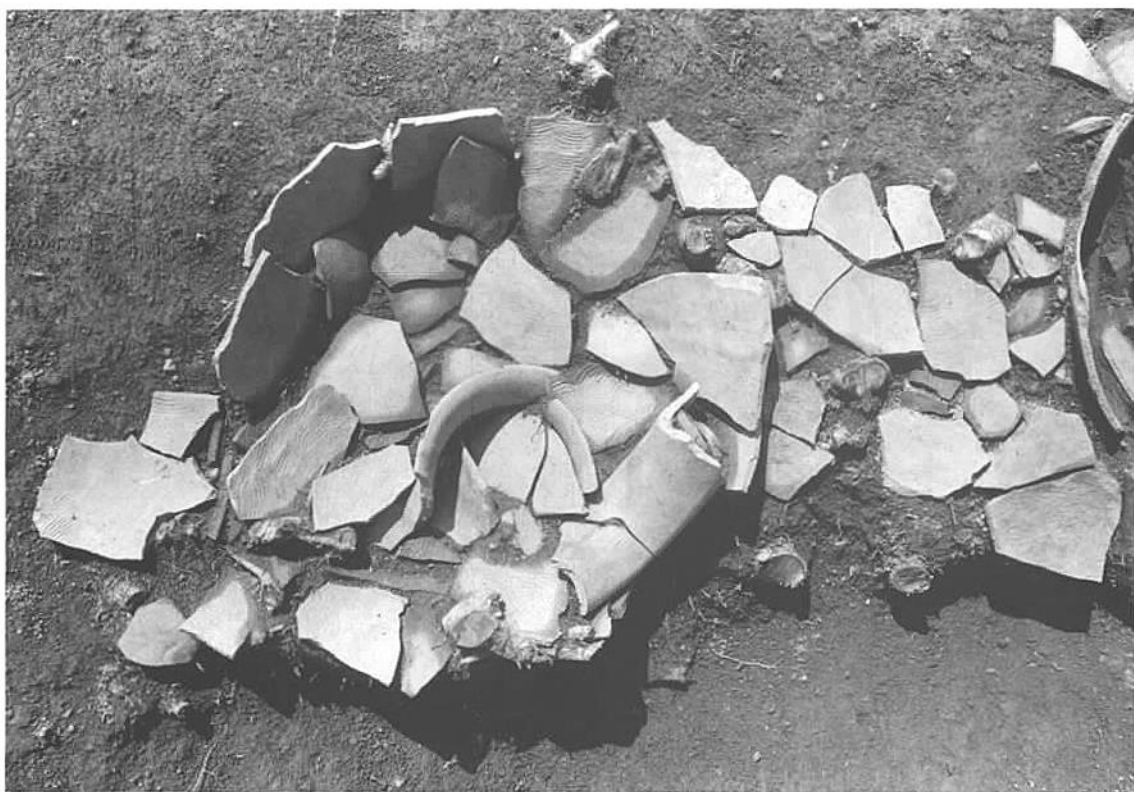
菩提寺古寺古墳群 1 号墳供献土器出土状態



同上



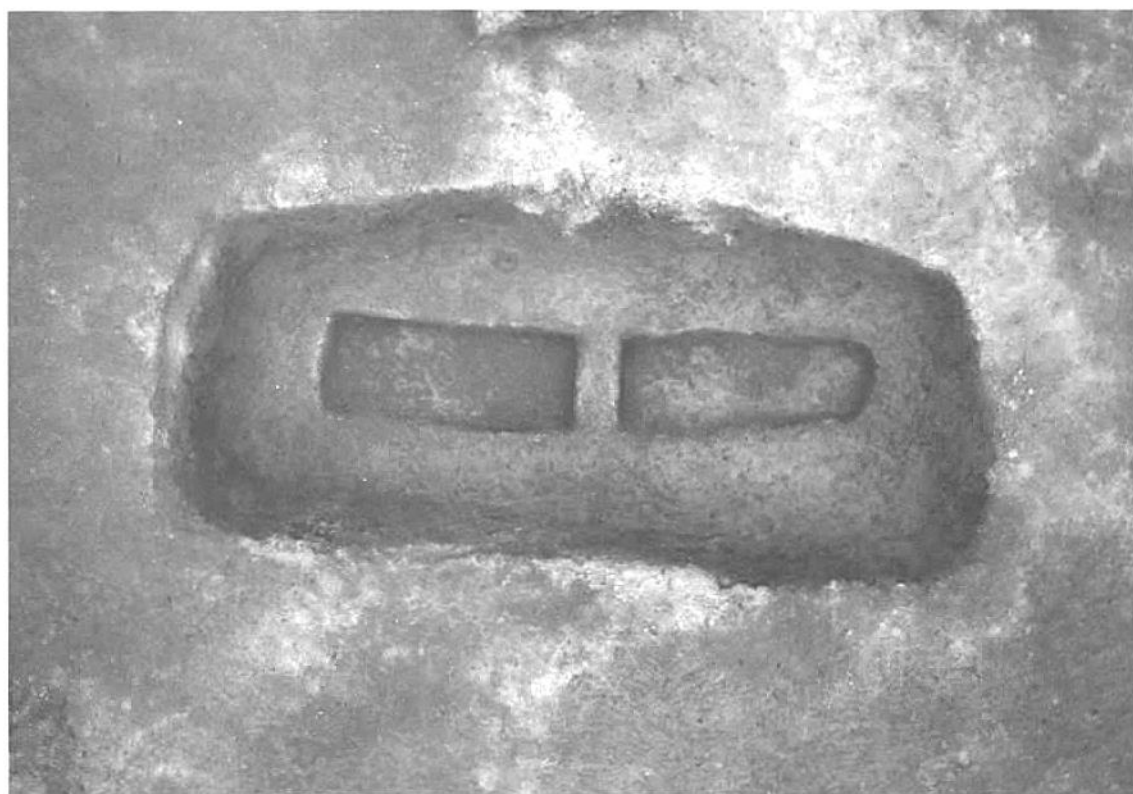
菩提寺古寺古墳群 1 号墳供献土器出土状態



同上



菩提寺古寺古墳群 2号墳全景



菩提寺古寺古墳群 2号墳埋葬施設全景



菩提寺古寺古墳群 2号墳埋葬施設土層断面



菩提寺古寺古墳群 2号墳遺物出土状態



(上) 菩提寺古寺古墳群3号墳全景
(下) 菩提寺古寺古墳群3号墳墳丘内の石積





菩提寺古寺古墳群 3 号石室墳全景



菩提寺古寺古墳群 3 号墳遺物出土狀態



菩提寺古寺古墳群蔵骨器出土状態



同上



菩提寺古寺古墳群B支群全景（北西上空から）



善提寺古寺古墳群B支群西半部（北上空から）



善提寺古寺古墳群B支群東半部（西上空から）



菩提寺古寺古墳群 4号墳墳丘



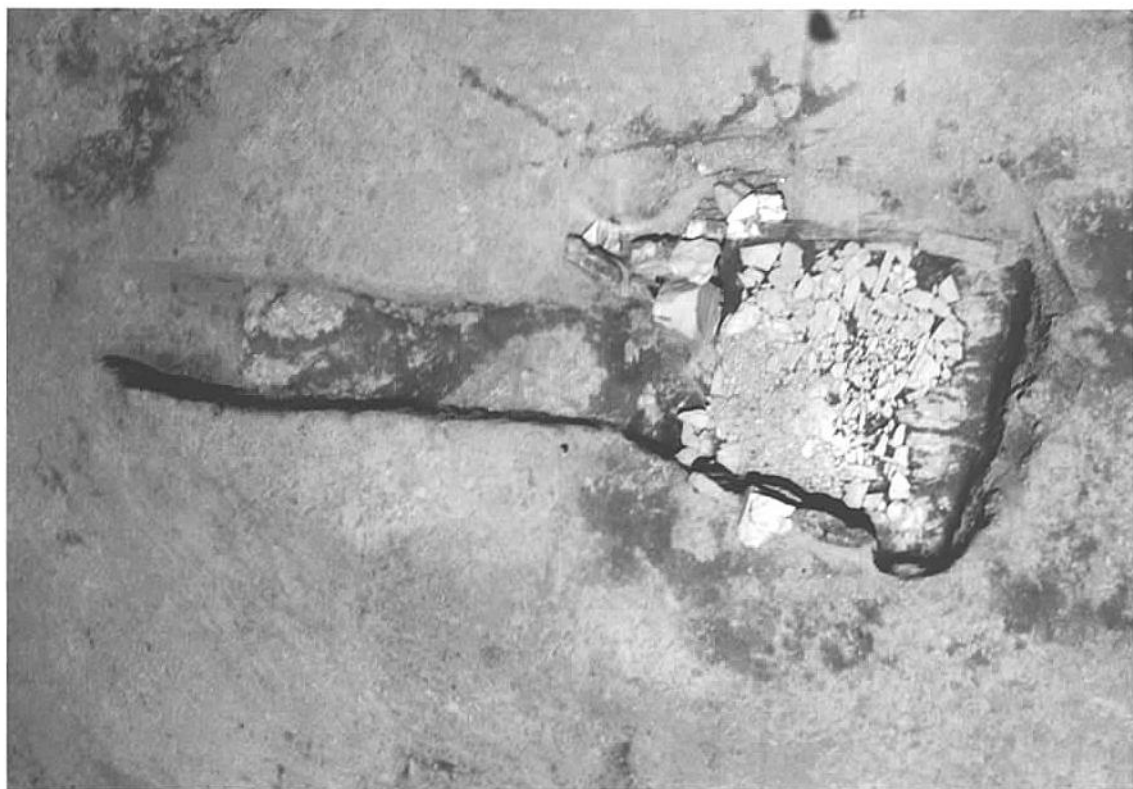
菩提寺古寺古墳群 4号墳南側溝土器出土状態



菩提寺古寺古墳群 4号墳第1主体部



菩提寺古寺古墳群 4号墳第2主体部



菩提寺古寺古墳群 5 号墳全景



菩提寺古寺古墳群 5 号石室墳全景



菩提寺古寺古墳群 5 号墳玄室二次床面遺物出土狀態



同上



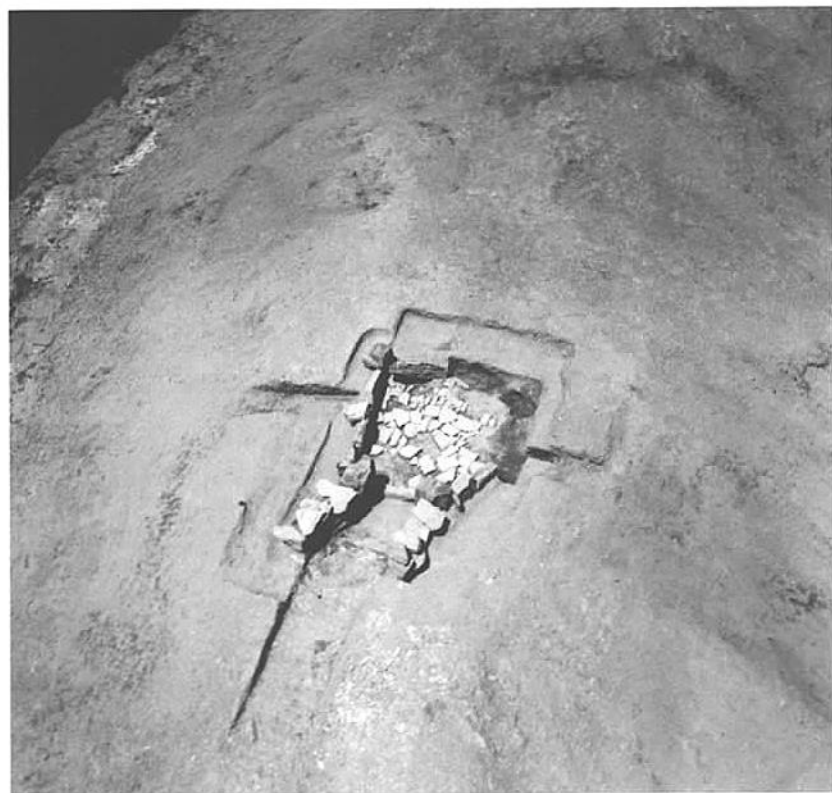
菩提寺古寺古墳群 5号墳供献土器出土状態



同上



菩提寺古寺古墳群6・7号墳遠景



菩提寺古寺古墳群6号石室墳全景



菩提寺古寺古墳群 6号墳玄室



菩提寺古寺古墳群 6号墳羨道



菩提寺古寺古墳群 7号墳墳丘



菩提寺古寺古墳群 7号墳全景



菩提寺古寺古墳群 8号墳墳丘



菩提寺古寺古墳群 8号墳全景



菩提寺古寺古墳群 8号墳玄室



同上



菩提寺古寺古墳群 8 号墳 A 群供献土器出土状態



同上



菩提寺古寺古墳群 8 号墳 A 群供献土器出土状態



同上



菩提寺古寺古墳群 8 号墳 B 群供献土器出土状態



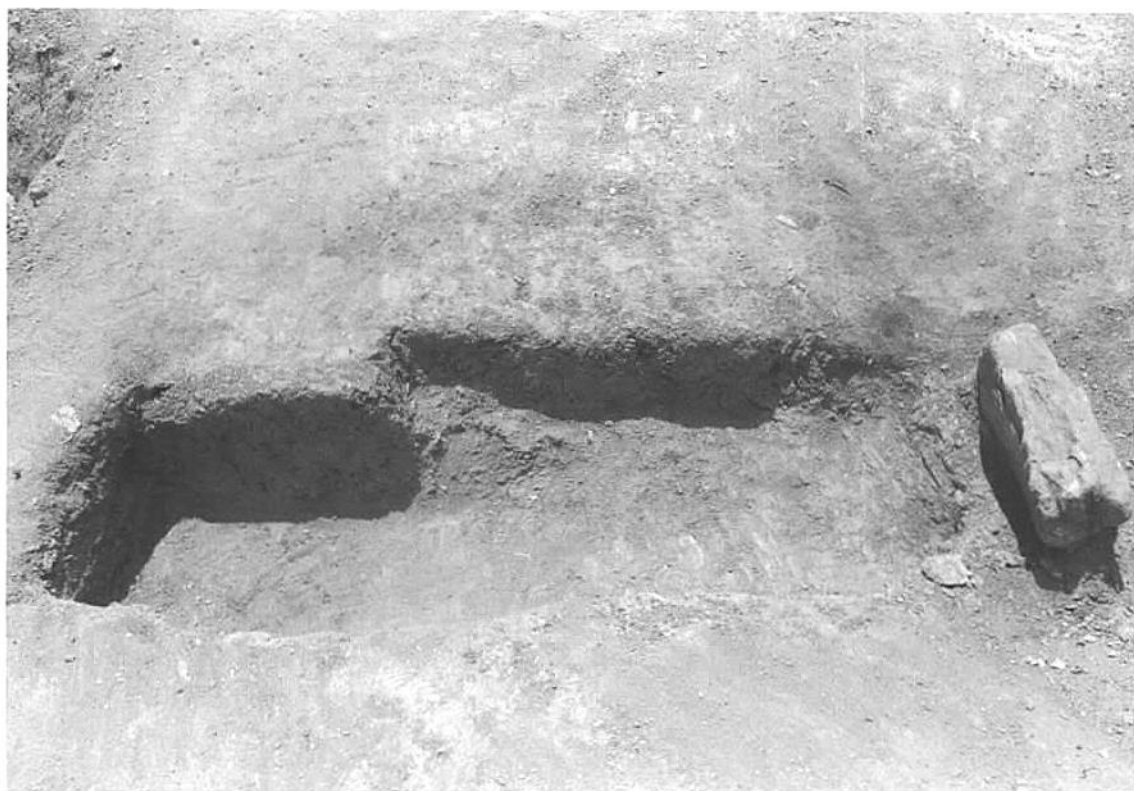
同上



菩提寺古寺古墳群 8 号墳 B 群供献土器出土状态



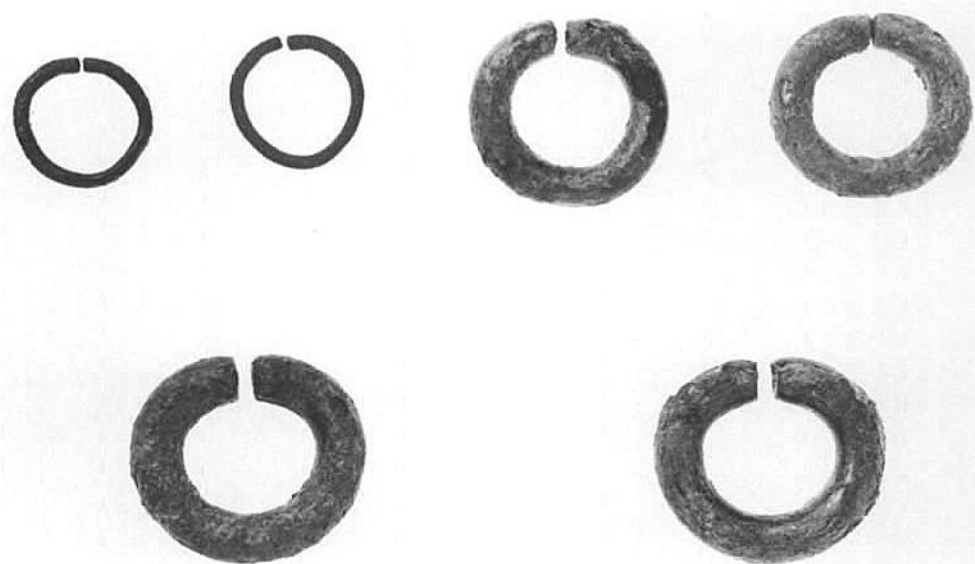
同上



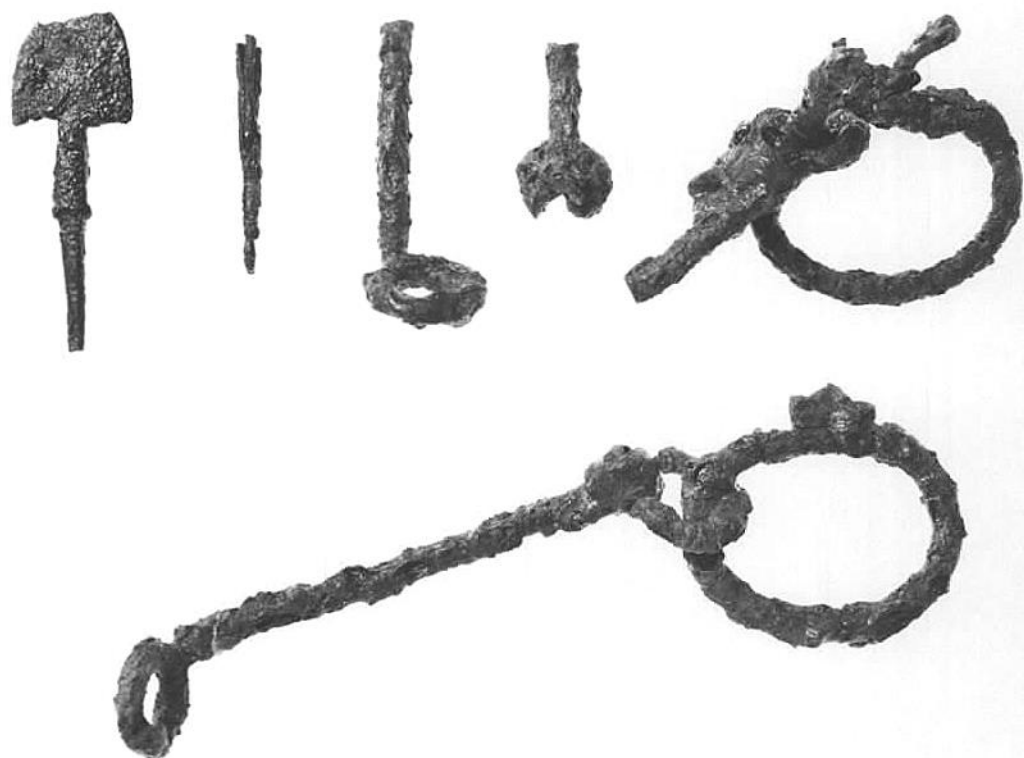
土墳墓



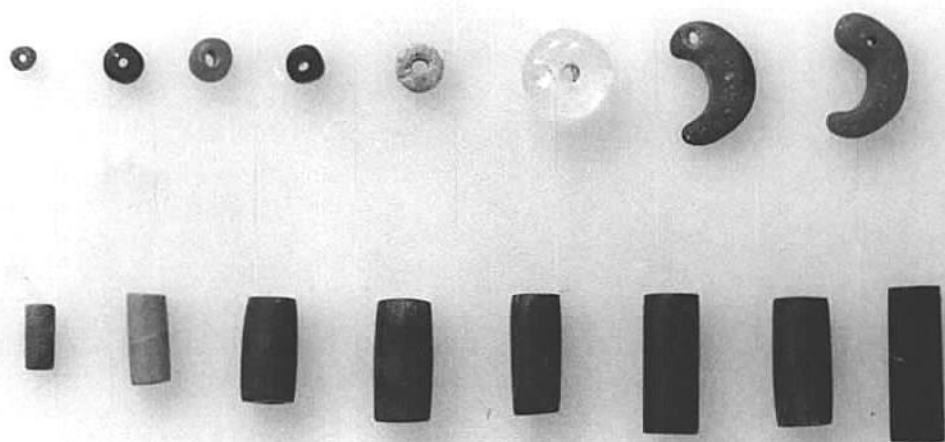
金剛寺地区の試掘



菩提寺古寺古墳群 1 号墳出土耳環



菩提寺古寺古墳群 1 号墳出土鉄製品



菩提寺古寺古墳群 1 号墳出土玉類



菩提寺古寺古墳群 1 号墳出土玉類



2



3



4



5



8



9



11



12



14



13



20



15



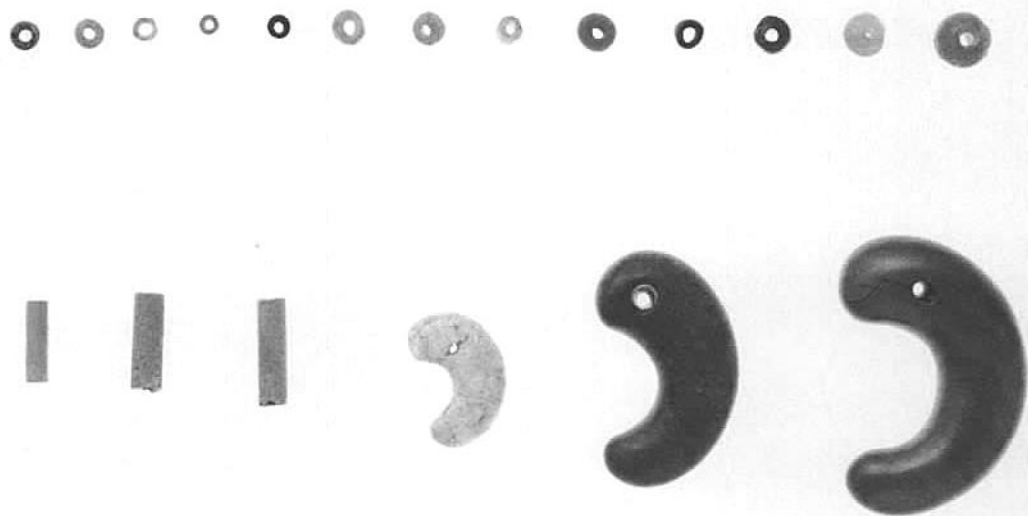
26



19



28



菩提寺古寺古墳群 2号墳出土玉類



菩提寺古寺古墳群 2号墳出土玉類



菩提寺古寺古墳群 3 号墳出土鉄製品



藏骨器

1

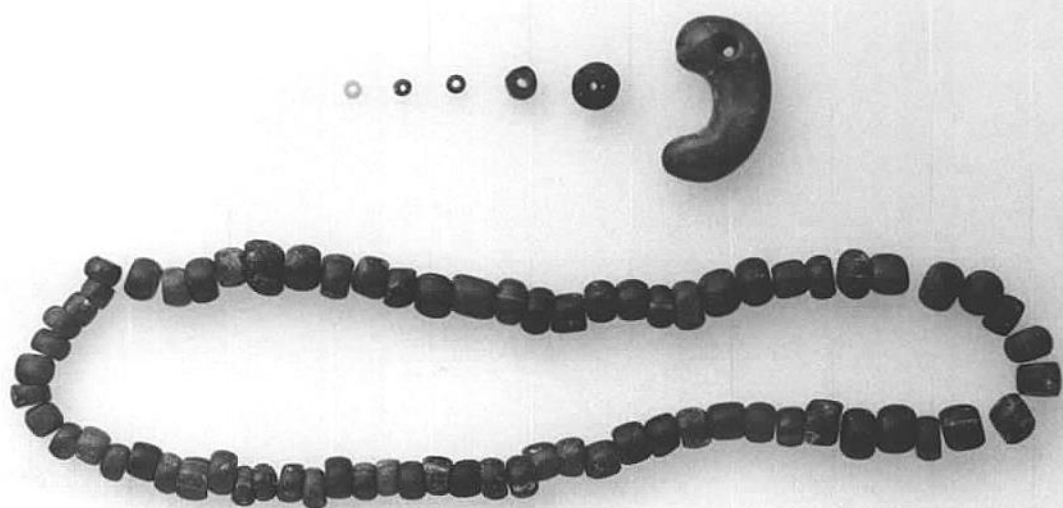


菩提寺古寺古墳群 4 号墳南裾溝出土土器

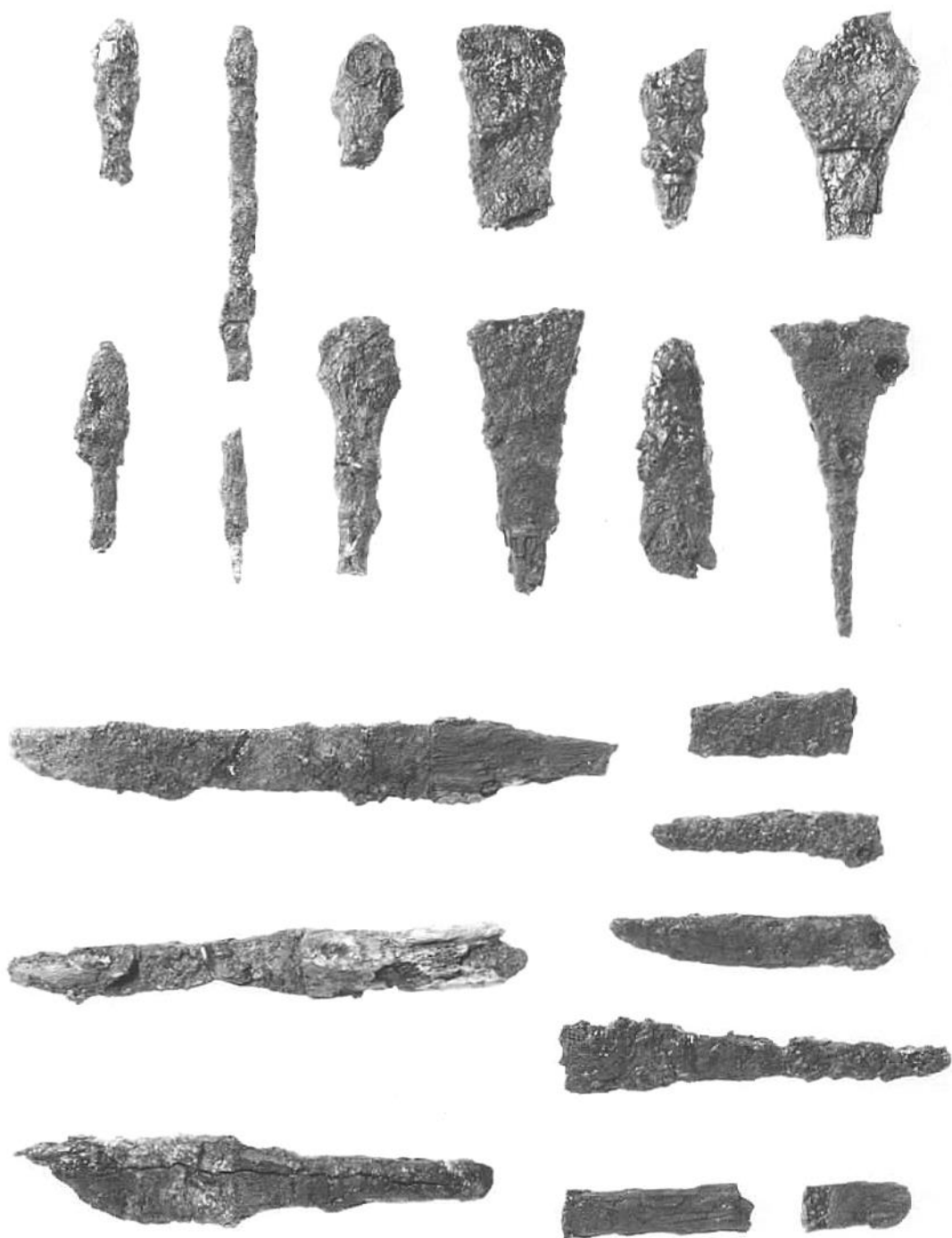
2



菩提寺古寺古墳群 5 号墳出土耳環



菩提寺古寺古墳群 5 号墳出土玉類



菩提寺古寺古墳群5号墳出土鉄製品



3



17



4



22



7



25



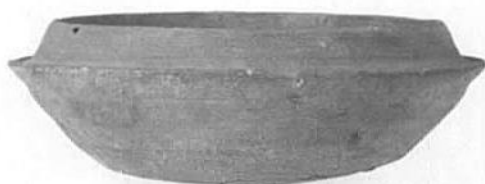
8



9



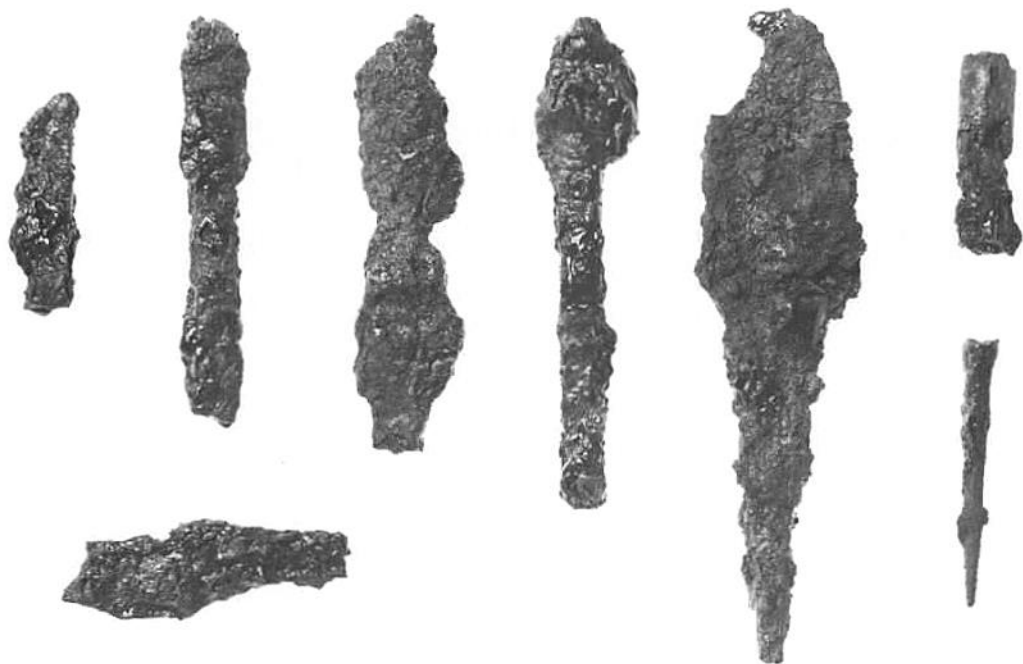
10



11



26



菩提寺古寺古墳群 6 号墳出土鉄製品



2



5



3

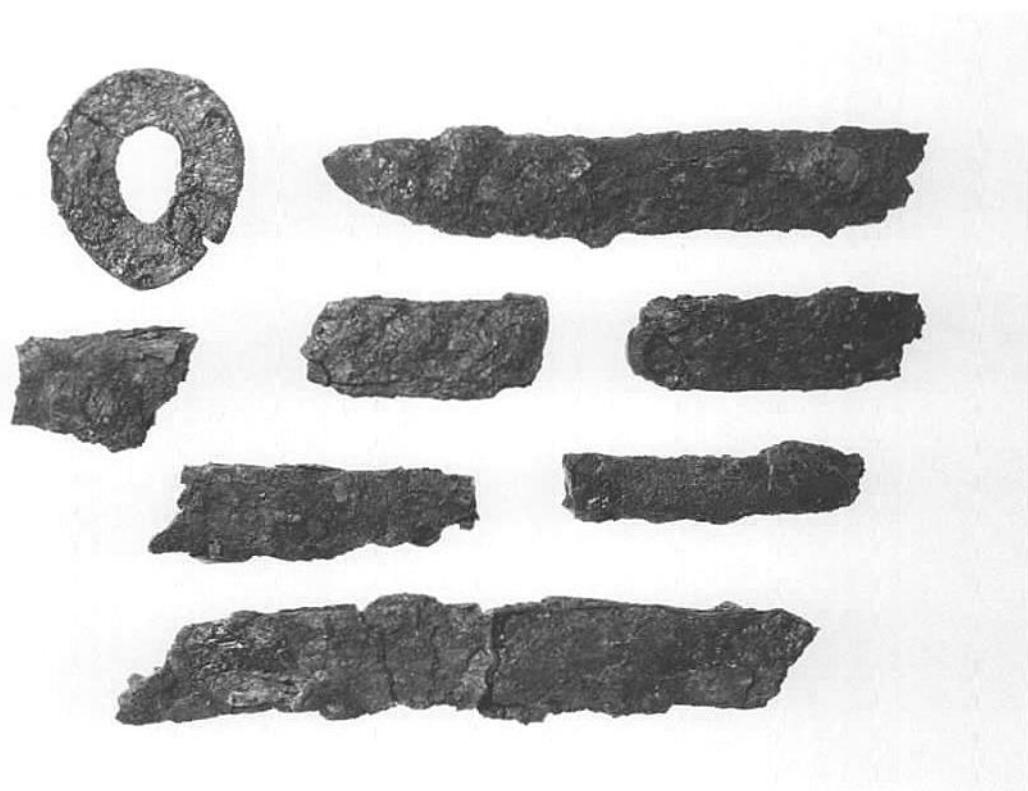


4

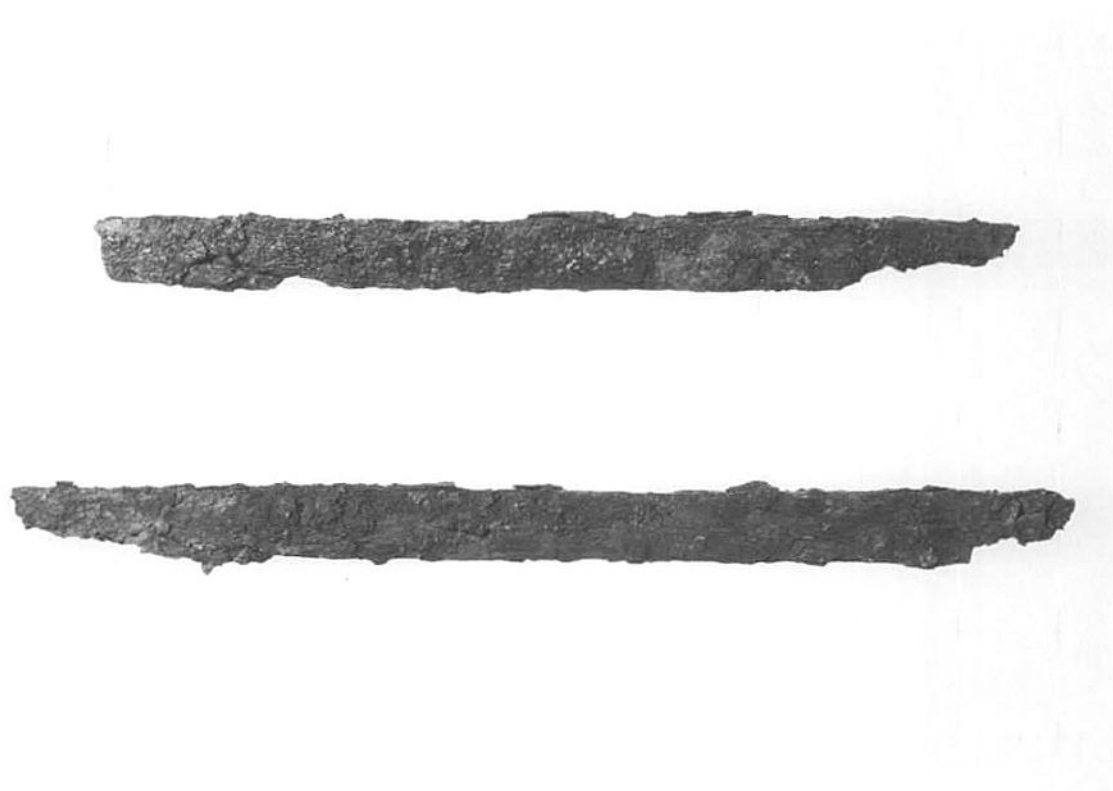


6

菩提寺古寺古墳群 6 号墳出土土器



菩提寺古寺古墳群 7 号墳出土鉄製品



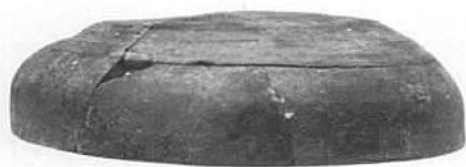
菩提寺古寺古墳群 7 号墳出土鉄製品



菩提寺古寺古墳群 7 号墳出土鉄製品



8



4



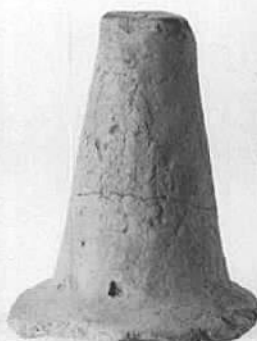
10



5



7

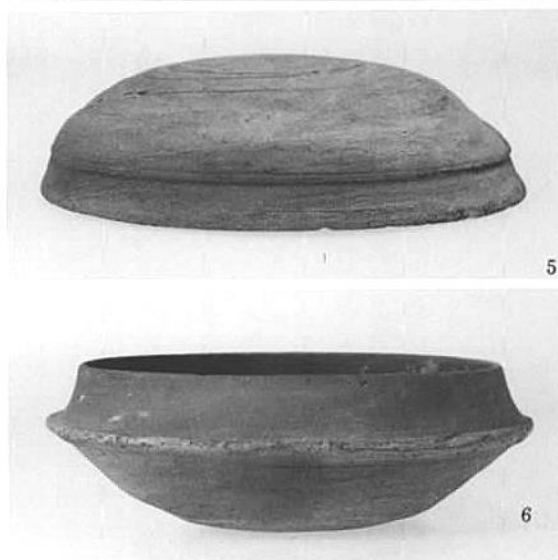


16

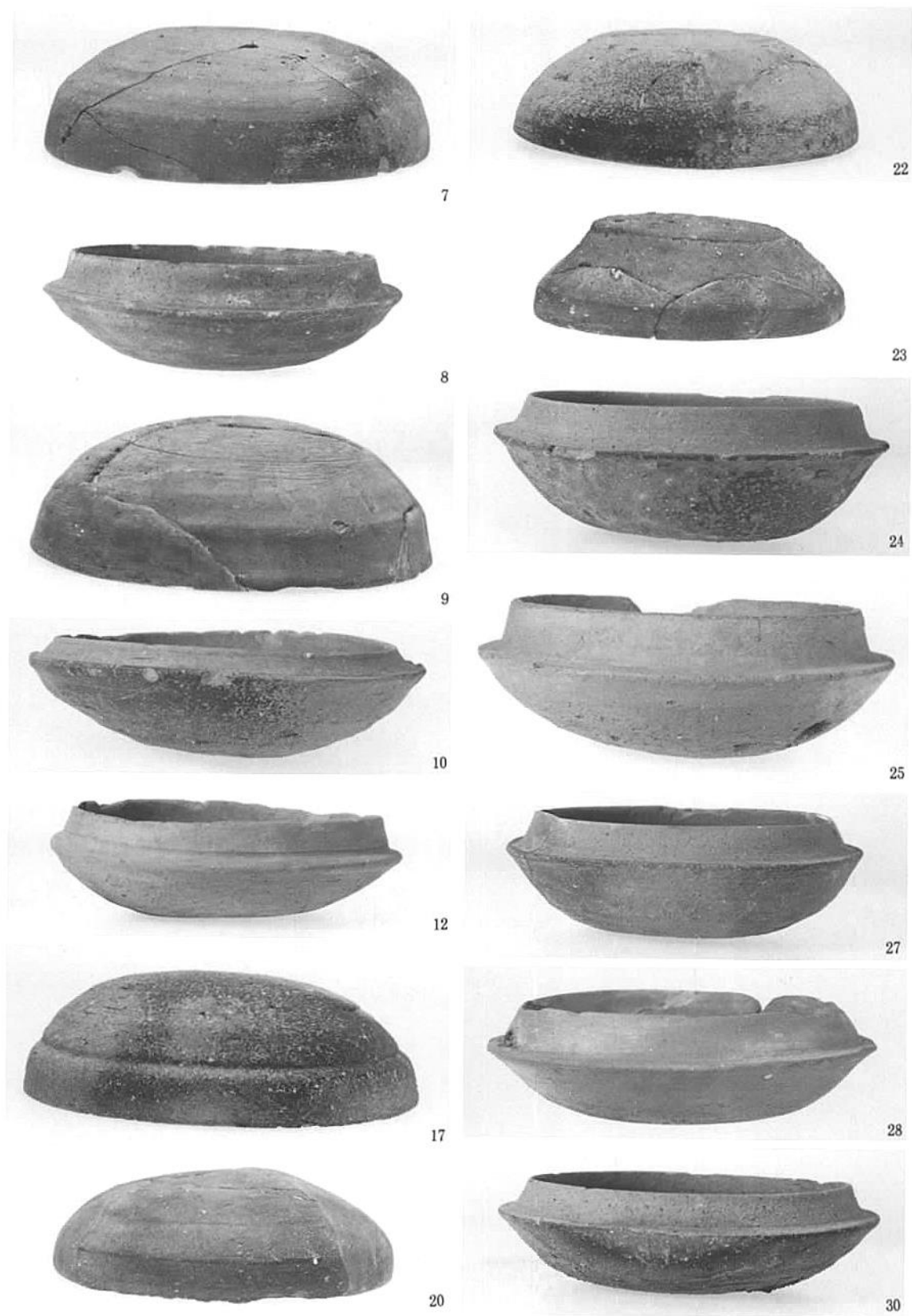
菩提寺古寺古墳群 7 号墳出土耳環・土器



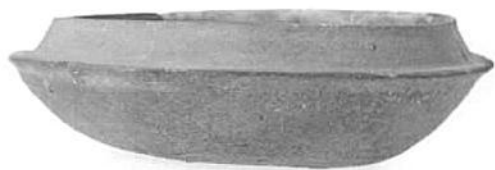
菩提寺古寺古墳群 8 号墳出土土耳環・玉類・滑石製紡錘車



菩提寺古寺古墳群 8 号墳出土鉄製品・A 群供献土器



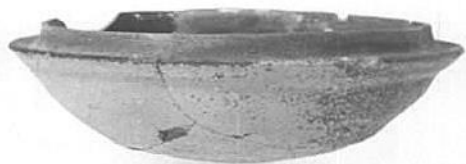
菩提寺古寺古墳群 8 号墳出土 A 群供献土器



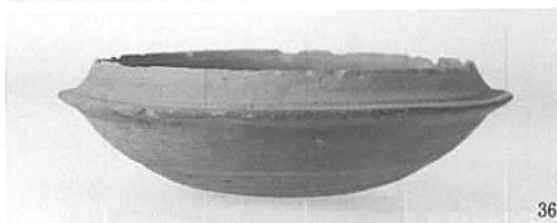
31



35



32



36



34



39



40



41



42



43



46



49



53



50



54



51



55



51内面



56



66



57



75



58



60



1



61



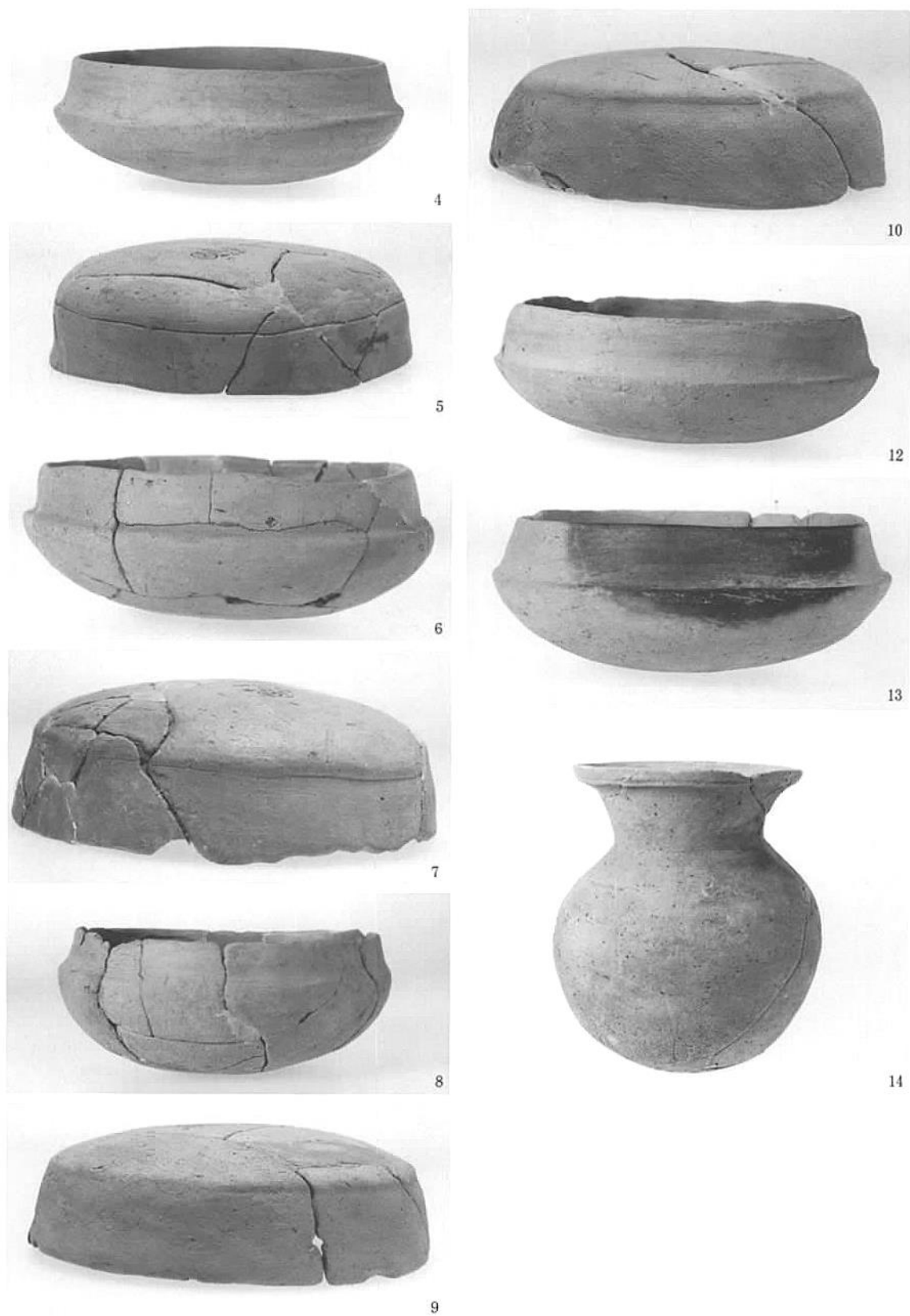
2



63



3



菩提寺古寺古墳群 8 号墳出土 B 群供献土器

国道386号線バイパス関係

埋蔵文化財調査報告書

平成3年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号
印刷 福博総合印刷株式会社
福岡市博多区堅粕3丁目16番36号

福岡県行政資料

分類番号 J H	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 6 3	登録番号 1 5